

西国観音霊場三十三所 順禮記



(那智参詣曼陀羅図)

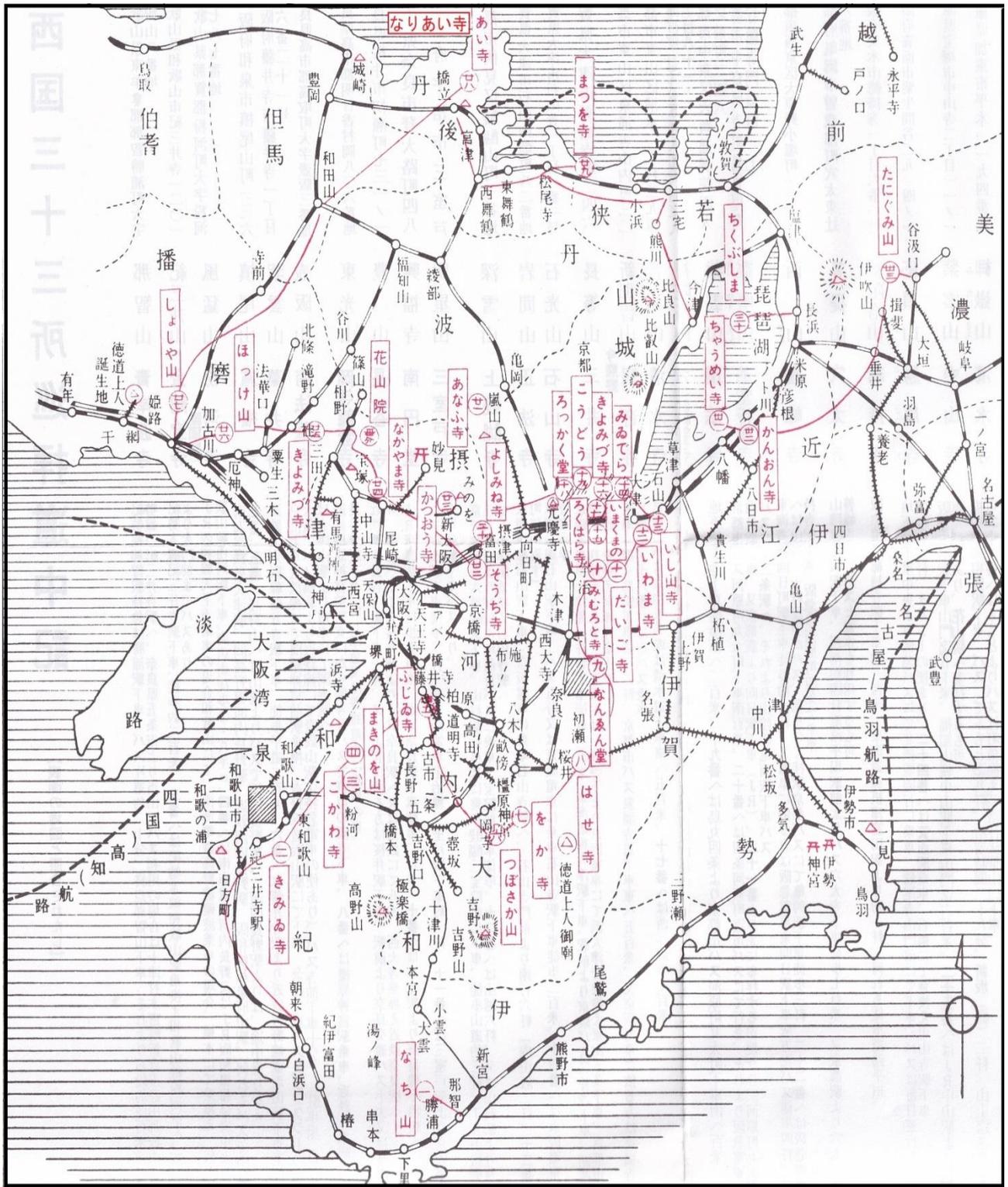
はじめに

- | | | | | | |
|------|------|-------------|-------|------|----------|
| 第一番 | 那智山 | 青岸渡寺 | 第十九番 | 靈麿山 | 行願寺 (革堂) |
| 第二番 | 紀三井山 | 金剛宝寺 (紀三井寺) | 第二十番 | 西山 | 善峯寺 |
| 第三番 | 風猛山 | 粉河寺 | 第二十一番 | 菩提山 | 穴太寺 |
| 第四番 | 槇尾山 | 施福寺 | 第二十二番 | 禰陀落山 | 総持寺 |
| 第五番 | 紫雲山 | 葛井寺 | 第二十三番 | 応頂山 | 勝尾寺 |
| 第六番 | 壺坂山 | 南法華寺 (壺坂寺) | 第二十四番 | 紫雲山 | 中山寺 |
| 第七番 | 東光山 | 龍蓋寺 (岡寺) | 第二十五番 | 御嶽山 | 播州清水寺 |
| 第八番 | 豊山 | 長谷寺 | 第二十六番 | 法華山 | 一乗寺 |
| 第九番 | 興福寺 | 南円堂 | 第二十七番 | 書寫山 | 圓教寺 |
| 第十番 | 明星山 | 三室戸寺 | 第二十八番 | 成相山 | 成相寺 |
| 第十一番 | 深雪山 | 上醍醐准胝堂 | 第二十九番 | 青葉山 | 松尾寺 |
| 第十二番 | 岩間山 | 正法寺 (岩間寺) | 第三十番 | 竹生島 | 宝巖寺 |
| 第十三番 | 石光山 | 石山寺 | 第三十一番 | 姨綺耶山 | 長命寺 |
| 第十四番 | 長筭山 | 園城寺 (三井寺) | 第三十二番 | 繖山 | 観音正寺 |
| 第十五番 | 新那智山 | 今熊野観音寺 | 第三十三番 | 谷汲山 | 華巖寺 |
| 第十六番 | 音羽山 | 清水寺 | 番外 | 東光山 | 花山院菩提寺 |
| 第十七番 | 禰陀落山 | 六波羅蜜寺 | 番外 | 豊山 | 法起院 |
| 第十八番 | 紫雲山 | 頂法寺 (六角堂) | 番外 | 華頂山 | 元慶寺 |

おわりに

寓多羅亭鈍助 述之

西国三十三観音 位置図



(引用出典：青岸渡寺作成「西国三十三観音霊場位置図」)

歩程 33札所総延長：991.1km、札所間最長区間：[1]那智「青岸渡寺」～[2]紀三井寺間＝191.4km
 札所間最短区間：[16]清水寺～[17]六波羅密寺＝1.4km (札所間最長・最短区間は番外を除く)
は札所番号

はじめに

四国歩き遍路を2巡し、観音巡礼では坂東三十三札所、秩父三十四札所も済ませたので、残るメジャーな霊場巡礼は西国三十三観音霊場札所順礼とスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラだけとなった。後者は来年にでも歩くとして、今年は全行程を徒歩で廻る西国三十三観音霊場順礼を発心した。

発心したと言っても、小生は宗教心皆無の人品骨柄であるからただただ物見遊山の域を出ないが、マ、夫々の門前町の赤提灯でそれなりの供奉をしてきた功德と霊験は彼岸での閻魔王のお裁きの折に若干の罪一等を減じて貰えるかも知れないというこれまた浅ましい魂胆が情けない。二河白道、六道ノ闇。

西国三十三札所順礼の開創は四国遍路よりも古く1300年の歴史を持つ本邦最古の巡礼にして、四国遍路、坂東三十三札所、秩父三十四札所巡礼なども西国を手本にして開創されたと伝えられている。

伝承によれば、養老2年(718年)奈良・長谷寺の徳道上人が、閻魔王から三十三ヶ所の観音霊場を開いて衆生を救うように命じられた。上人は言われたとおりに霊場を開いたが衆生は笛吹けど踊らずで、やむなく上人は大王から授かった三十三所の宝印を某寺(今の第24番札所、宝塚の中山寺)の境内に埋めた。それから年を経ること270年、当時の藤原一族の陰謀によって政争の犠牲になり弱冠18歳で皇位を奪われた花山法皇が落飾の身で全国の仏教行脚に憂き身をやつしていた時に、この埋められた宝印を見つけ出して西国観音巡礼を再興したのが嚆矢と言われている。

当初の巡礼は僧侶や修験者が中心であったが、やがて室町時代になると庶民へも拡大し、江戸時代に入るとお伊勢参りと併せた物見遊山ともなった。巡礼路は近畿5府県及び岐阜県の約1,000kmに及び、現在では殆どの巡礼道もいにしへの古道から市街地の輻輳した車道に変わってしまっているので、アルキで廻る人は殆どいないが、アルキを本来とする小生はやはり巡礼古道を歩くことにした。

幸いなことに、史料・史跡等によって巡礼古道の同定の試みがなされていて、西国札所第29番松尾寺(舞鶴市)の松尾心空師等によって旧来の巡礼古道ルートが復元され、年に何人かはアルキで巡っている人もいるらしい(巡礼の途次、上記「松尾寺」で松尾心空老師にお会いした時、老師の話では年間僅か30人ほどとのことであった)。

それでは、観世音菩薩さまとの同行二人、西国観音巡礼(いやいや、実は物見遊山)の旅に出よう。

ॐ 南無観世音菩薩

om ālolik svāhā

おん ありりきゃ そわか

オン アロリキャ ソワカ

発心：令和元年五月

満願：令和元年十一月十八日



(註) 参考図書など

松尾心空著「西国札所古道巡礼」(春秋社)、松尾心空発行アリの会編「西国三十三所古道徒歩巡礼地図」(松尾寺)
加藤淳子著「街道を歩く 西国三十三所」(創元社)、佐藤孝子著「西国三十三所 徒歩巡礼」(東邦出版)
熊野古道については、高木徳郎著「熊野古道を歩く」(吉川弘文館)が詳しい。

第一番 那智山 青岸渡寺 (和歌山県那智勝浦町)



(西国観音霊場第一札所「青岸渡寺」の三重塔と那智の滝)

西国三十三観音霊場札所巡礼は、紀伊半島南端・那智の「青岸渡寺」を第一番として紀伊半島を北上し、概ね大和、近江、山城、摂津、播磨を巡り、そこから日本海側の丹後に抜け最後は美濃の第三十三番「華厳寺」で結願する全行程約 1,000km の巡礼である。全て徒歩で廻れば 40～50 日間ほど掛る。

その内、紀伊の国には上記の第 1 番を始め、第 2 番「金剛宝寺」(和歌山市、通称・紀三井寺)、第 3 番「粉河寺」(紀の川市) の 3 札所がある。この内、第 1 番「青岸渡寺」から第 2 番「紀三井寺」までの西国三十三観音霊場巡礼古道は、もう一つの古道である熊野大社参詣古道(京都から熊野三大社まで。所謂、熊野古道)と重なっている(ただし、巡礼の方向は逆)。熊野古道、特に那智や本宮などの山中の古道は世界遺産にも登録されており、またサンティアゴ・デ・コンポステーラと姉妹巡礼路にもなっているので欧州からのトレkkerが多く、道標なども全て熊野古道として整備されている。

一方、西国三十三観音霊場札所巡拝の古道は、現在は徒歩で巡る人は滅多にいないから、標識などは全く無い。たまに、四国遍路道でよく出会う  の如き小さなシールがガードレールにひっそりと貼られていたりはあるが、矢印だけで文字の記載が全く無いので四国遍路を歩いた経験者でないといこの標識は何のことやら分から分からないであろう。おまけに、矢印の向きが定まらず、惑わされて反対の方角に進むこともあった。

このシールマークは、熊野古道を外れた地域に貼ってあり、また熊野古道の範囲内ではちゃんとした「熊野古道」の表示のある標識が整備されていたので、これは西国三十三観音霊場巡り古道の標識と思われるが、熊野古道と西国観音霊場古道の歩く方向を混同して貼られたのかも知れない。

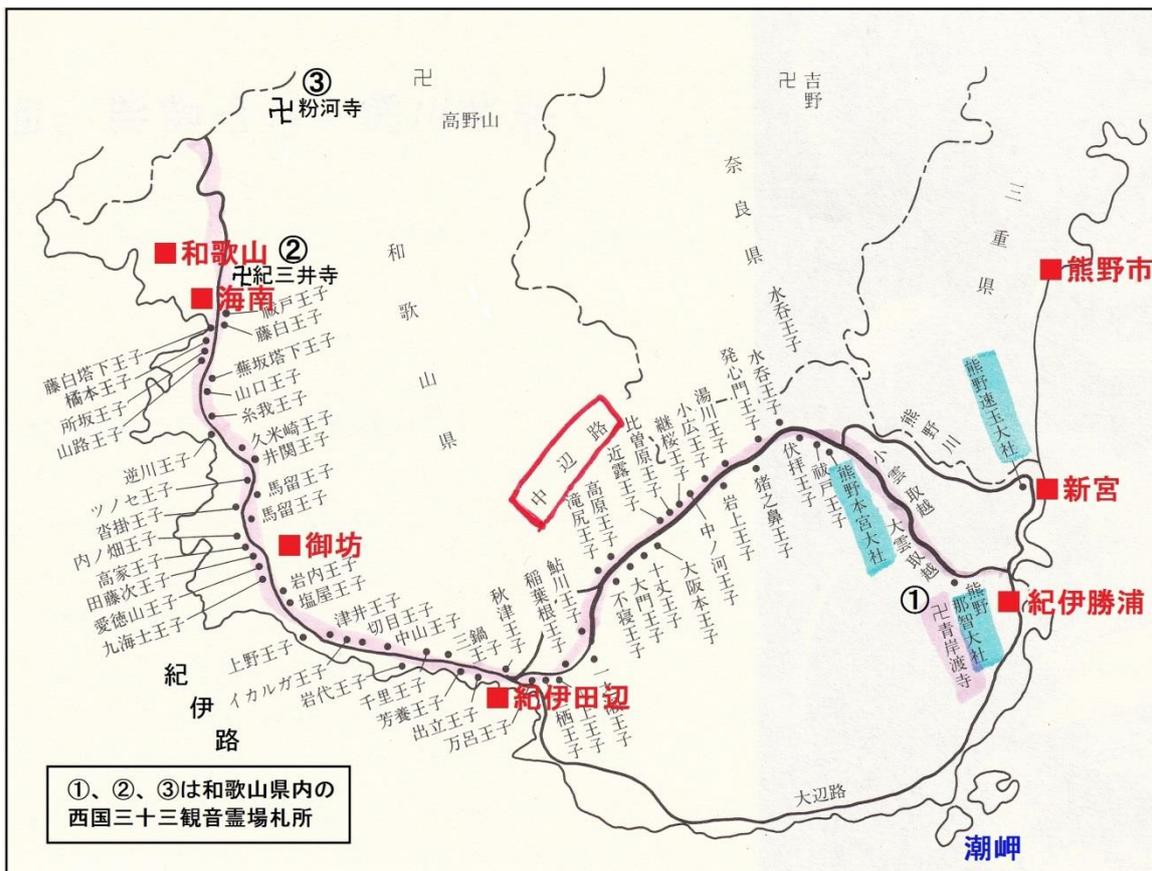
しかし、この付近の西国観音霊場巡礼古道では、熊野古道の道中標識でもあり、また前進キャンプでもある「王子社*」を逆に辿って行けば熊野古道の逆方向(即ち西国観音霊場巡礼古道の順方向)を辿れることにもなるので、西国三十三観音霊場札所巡拝も熊野古道の王子社を逆に繋いで歩けば、道を間

違うことなく迎れるというものである。

(註)「王子社*」

王子とは、熊野権現の子とされる御子神で、熊野権現の分身として熊野参詣道の途中の道中に祀られた小さな社である。その数は時代と共に増えていき、11世紀後半には数ヶ所程度であったものが、最盛期の13世紀頃には80~85ヶ所程度あったことが史料・文献から分かっている。これらの王子社を総称して熊野九十九王子などと呼ばれているが、九十九とは実数ではなく多いことの比喩表現である。

中世の熊野詣に於いては、王子社では奉幣と経供養が行われた。また、里神楽や馴子舞などの芸能も奉納されたり、後鳥羽上皇の参詣に代表されるように和歌を詠む歌会が開かれることもあった。また、王子社は参詣皇族や貴族などの休憩所や宿泊場所でもあった。王子社の所在地の一例を示す地図を以下に掲げておく。



(引用出典原典：松尾心空著「西国札所古道巡礼」春秋社。和歌山市以南の約60ヶ所の王子が記されている。
赤字の地名は筆者が補記。王子社はこれ以外にも京都から和歌山市までの熊野古道に沿って分布している)

さて、前置きが少し長くなったが、私の今回の西国観音霊場札所巡礼は、とりあえずは手始めに紀伊のこの3寺を廻って手応えを掴むこととした。熊野に入ったのは改元で令和に変わった2019年5月初めの、奉祝10G.W.連休直後の5月10日であった。世の中は改元奉祝ムードに沸いていた。

熊野古道を逆に歩く訳であるから、熊野詣での根源である熊野三山(熊野本宮大社、熊野那智大社、熊野速玉大社(=新宮))、並びに新宮の旧宮である神倉山(神倉神社)に敬意を表すとも必要であるから、西国第一番・青岸渡寺がある那智山に入る前に新宮の熊野速玉大社と神倉神社を参拝し、その足で補陀落渡海で名高い那智の補陀落山寺を参拝した。

そのような訳で、多少道草にはなるが、西国三十三観音霊場札所順礼に入る前に、これらの序章について触れておきたい。

この（2019年）夏に関西在住の60年来の大学時代の学友（岳友&呑友&悪友でもある、潔ちゃん）と二人で欧州アルプス（モンブランの氷河登高）に登りに行くので、前夜彼の家に一宿一飯の恩義に与ってその打ち合わせを兼ねて山上の清談と宴を行なった翌朝、新大阪から電車で南紀・新宮に向かった。「くろしお」という名の特急ではあったが、車内販売も無く、泡飲料は言うに及ばずペットボトルも飲めない猛暑の車中での5時間の旅となった。

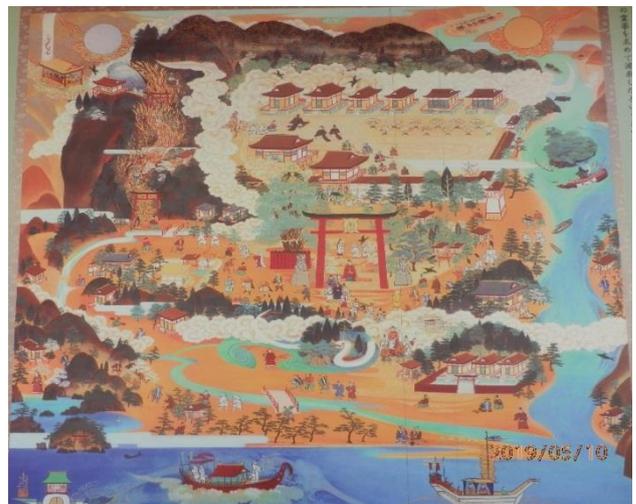
太平洋からの白波が打ち寄せては返す南紀の磯の海岸をノンビリと見ながら、電車はやがて新宮駅着。新宮駅は鄙の暇な駅で、新宮大社への道を尋ねた駅窓口のお嬢さんは、田舎特有の超ゆっくりペースで地図を書きながら懇切丁寧に道順を説明してくれた。

そういえば、「熊野」の“熊”の字源は「隈」で、「隈野」とは「奥まった地」という意味だそうだ。また、中世に貴族が熊野に参詣した時の日記（藤原宗忠「中右記」、1109年）には、新宮から那智に向かう浜辺を歩いていた時、『・・・南に白浪の畳むを見ゆ。遙かに雲水の茫々たるを見ゆ。これ日域の南極なり』との記述があって、此处は日本の南の最果ての地と観念されていたようだ。そのような事から、南紀は荒々しい大平洋岸と海洋性の気候・植生が造り出す深山幽谷が織りなした特異な景観の浄土であり、大昔から修験僧などの修行や補陀落渡海などの信仰が発達した聖地でもあったのであろう。

新宮では、「新宮大社」（熊野速玉大社）、及びその旧宮である「神倉神社」を見学した。新宮大社まで続く街中の参道は、なるほど古い門前町を彷彿とさせる佇まいであった。熊野大社の御札は熊野牛王ごおうと言ひ、三社によって多少のデザインの相違はあるものの、『日本第一』という由緒書きと八咫鳥やたがらすという3本脚の鳥の文様に朱印が押されたものである。この牛王には権威があつて、その裏面に書き付けられた商売や取り交わしなどの証文は二言を許されぬ誓約書として尊重されたという。



（荘厳な熊野速玉大社）



（熊野速玉大社 参詣曼陀羅図 下は補陀落渡海船）



（左：熊野速玉神社の牛王、右：八咫鳥） — 6 —

神倉神社は、先述したように熊野速玉大社の旧宮である。速玉大社とは千穂ヶ峰を挟んだ反対側にあり、538段の急な石階段に息が切れた。帰りには急な下りの石段に膝が笑って転げ落ちそうになった。毎年二月に行われるこの神社の「御燈祭」には、松明を持った千人を超える屈強な男達がこの石階段を勢いよく駆け下るのだという。神倉神社は境内にある巨大な岩（ゴトビキ岩）が御神体で、大きな注連縄が張ってあった。



(神倉神社のゴトビキ岩)



(神倉神社から新宮市内と熊野灘を望む)

ところで、熊野詣については以降は触れることも無いであろうから、ここで少し触れておきたい。奈良時代の初め、奇岩・巨岩が屹立し、また温暖な海洋性の気候によって作られた豊かな自然と交わって法華経を唱えつつ修行を行う修験道がこの地に発生し、そのような修行僧達が起こした多くの奇瑞が都人の貴人にも知られるようになって、そのような霊力を授けてくれるというこの熊野の地への憧れが醸成され、やがて皇族・貴人自身が此処を詣でるようになってきた。中世になると、貴人だけではなく、庶民の間にもこの風習が伝わった。所謂「蟻の熊野詣」と呼ばれるほどの巡礼行列ができて盛況を呈したという。

特に、後白河上皇の33回、後鳥羽上皇の29回、鳥羽上皇の23回をはじめ、各上皇、法皇、女院の熊野詣が頻繁に行われたことが史実に残っている（次ページ左写真参照）。往時の貴頭の参詣は、随員300名にも及ぶ大所帯であり、これらの経費一切が庶民の懐から吸い上げた年貢と地元の負担で賄われていたので、庶民の権利意識が強まってくると皇族などの御幸は段々と衰退していったが、それでも中央政界への商売・権利獲得材料として中央の宗教界・神社寺院や地元の豪族・神社・御師などが“付度”を働かせて熊野詣というイベントを定着拡大させていったのであろう。

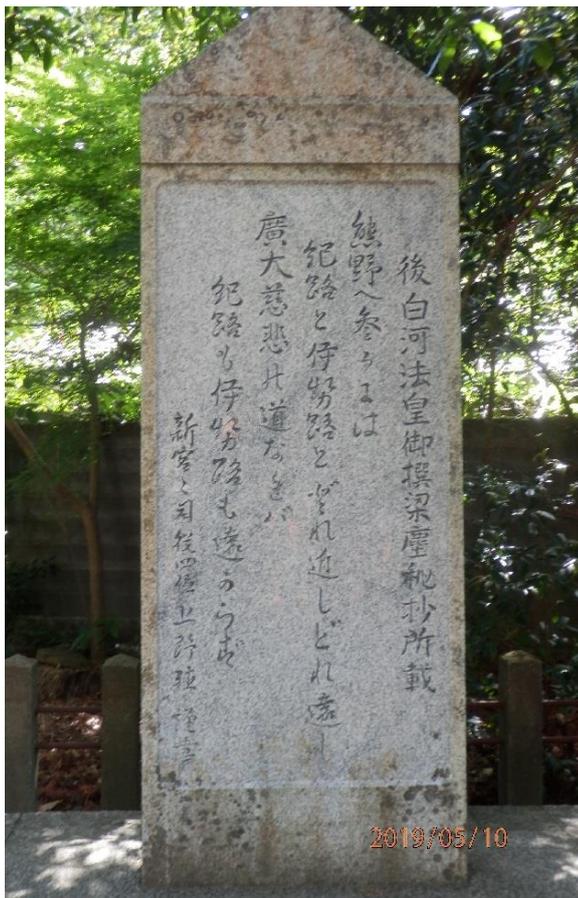
往時の熊野詣の行路は、京都から紀伊半島の南西岸を廻って海南、御坊を經由して紀伊田辺から山中に入って直接熊野本宮に至るルート（これを「紀伊路・中辺路」と呼ぶ）、紀伊田辺から更に潮岬沿いに紀伊勝浦に入るルート（同「大辺路」）、東側の伊勢を經由して新宮から熊野本宮に入るルート（同「伊勢路」）、高野山から直接熊野本宮に入るルート（同「小辺路」）、及び、奈良県の吉野山から険しい大峯山を越えて熊野本宮に至るルート（同「大峯道」）の5本があった。この内、「紀伊路・中辺路」が一番ポピュラーなメインルートで、最後の「大峯道」が最近の登山者に人気が高い「大峯奥駈道」である。

また、往時は、熊野本宮大社に詣でた後、熊野川を舟で下って新宮に詣り、新宮からは徒歩で次の那智大社に詣でて往路の中辺路を逆に辿って京に戻ったという。舟下りの様子が次ページの一遍上人聖絵にも描かれている。

西国観音霊場の巡礼古道は、「紀伊路・中辺路」の逆コースとなっていて、小生もこれを辿った。



(熊野御幸碑 在熊野速玉大社境内)



(後白河法皇謹撰、花山法皇謹製 梁塵秘抄所載

「熊野に参るには 紀伊と伊勢路のどれ近し、どれ遠し、
廣大慈悲の道なれば、紀伊も伊勢路も遠からず」



(「一遍上人絵伝」の一枚。社殿は大斎原の熊野本宮。

右の熊野川に舟下りの舟が描かれている)

新宮からはバスでJR那智駅まで戻り、那智駅前にある補陀落山寺を見学した。補陀落山寺は、代々補陀洛渡海僧を出した名刹である。補陀洛渡海とは、僅かな穀粒と水、及び經典だけを持たされて生きてきたまま小さい渡海舟に乗せられて流され、補陀洛山（観世音菩薩が住む西方浄土）に赴くという寸法である。流されている途中で逃げ出せないように、舟に設えられた小さな御堂の扉は渡海者を入れた後に釘付けされて封印される。この宗教儀礼は、ここ那智が有名であるが、それ以外にも四国の足摺岬、室戸岬や薩摩半島の坊津などでも行われた記録がある。

この寺の寺伝によれば、平安時代から江戸時代にかけて二十数名が渡海入水往生したと記録されており、その墓（実際は西方浄土に入水したのであるから、墓がある筈は無いが・・・）が裏山にあった。私はこの種の話が大好きであるので、この寺には是非立ち寄りたかったのである。

補陀洛渡海と言えば格好良いが、狭い舟の中に閉じ込められて浪間に沈むのはいくら高僧であっても堪えられないらしく、初期はともかくそれ以降は陸で往生した後に舟に積んで流すという擬似儀礼に変わってきたそうだ。この補陀洛寺の代々の住職は或る年齢になれば補陀洛渡海するという不文律があったそうで、初期には僧も信者もこれを嬉しがる風習だったが、中には補陀洛渡海を嫌がる僧も出てきたらしくて、井上靖の小説『補陀洛渡海記』には、未だ渡海する気になれないのに周囲の人々からのプレッシャーで渡海せざるをえなくなり、渡海することを決めた或る住職の死に向かう心の動き、恐怖、葛藤を描いた作品がある。

戦国時代のこと、或る僧が渡海舟に乗せられて船出したものの、途中で命が惜しくなって屋形を破り、舟から逃げだして小島に上がってしまったが、役人に見つかって海に突き落とされて殺されてしまったという言い伝えもあるそうだ。

P.5に掲げた熊野速玉大社曼陀羅図の下部に描かれている小舟が渡海舟であり、また、本稿冒頭のP.1に出した那智参詣曼陀羅図では浜の赤い大鳥居前に描かれている小舟の右側の方が渡海舟である。因みに、この那智参詣曼陀羅図には上方全体に大きく那智本宮大社が描かれているが、浜の右側に描かれている小さな御堂が「補陀落山寺」である。

ご参考までに、渡海儀式の部分の拡大図を右に示しておく。帆が張ってある方の舟が渡海舟で、その左側の舟（人が乗っている舟）は流す時の随伴舟である。渡海舟を皆で押している様子が描かれている。

ガイドブックによればこの補陀落山寺には復元された渡海舟が展示されているそうなので、楽しみにして立ち寄ったが、今は鞘堂に収納されているのかその姿は無かった。ご参考までに、同じように補陀洛渡海が盛んだった四国足摺岬の金剛福寺（四国遍路八十八ヶ所の一つ）に復元されていた渡海舟を右に出しておく。舟に設えられた小さな御堂が渡海者を閉じ込める部屋である。また、四周に鳥居が建てられていることが特徴である。



渡海舟は見られなかったが、裏山にある渡海僧の墓地を見に行った。20 数基の渡海僧の墓碑があり、周囲の鬱蒼とした景観と相俟って苔蒸した墓碑は些か不気味な感じの場所だった。一番大きな墓碑には「補陀洛渡海宥照上人塔」と刻まれ、他の墓碑にも全て「勅賜補陀洛渡海〇〇上人」と刻まれているそうだ。



(些か不気味な渡海上人の墓)



(宥照上人塔)

さて、些か前置きが長くなったが、補陀洛山寺を那智駅前からバスに乗って那智の滝や那智大社がある那智山に入った。西国観音霊場第一番札所である青岸渡寺もここにある。この晩は那智山にある旅籠「美滝山荘」に泊まった（1万円、まずまず）。令和改元の大10連休が終わった後だったが、ガイド・ツアー客10人の他、個人客も10人ほど泊まっていて、ご主人の話では平生のG.W.直後なら暇な時期に入る頃であるが、今年は改元・様々で暫くは満員御礼が続くのだそう。結構、結構。

さて、西国三十三観音霊場巡りのスタート地点に立つまでに随分道草を喰ったが、お待たせ申した。いよいよここからが西国への道である。

西国観音霊場第一番札所「青岸渡寺」参拝は、翌朝早く行った。ここの拝観時間は早朝の5時からとなっていて、早暁の熊野灘から観世音菩薩がお住まいになっている補陀洛山の西方浄土を伏拝できるように配慮されているらしい。境内は、寺男が何人も朝早くから掃除をしていて清々しかった。

那智ノ滝の一带は、古来から修験者の修業の場で、平安期には本宮、新宮とともに熊野三山と呼ばれる修験大霊場に発展し、貴人の熊野詣が相次いだことは上述したとおりである。往時は神仏混淆で、那智大社も青岸渡寺も一体で、明治になって廃仏毀釈の際に境内にあった如意輪観音堂が青岸渡寺本堂となり、従って御本尊も如意輪観音である。この本堂は豊臣秀吉によって再建された豪壮で重厚な佇まいであった。青岸渡寺は、本項冒頭に掲げた那智ノ滝をバックにした三重塔の景観が有名であるが、この本堂の方も古色蒼然としてなかなかの味があった。今も両寺社は同じ境内にあり、木戸一枚で自由に往来できるようになっていた。 - 10 -



(熊野三山・那智大社。この左隣が青岸渡寺の境内)



(青岸渡寺の重厚な本堂。内陣に本尊お前立・如意輪観世音菩薩が見える)



花山上皇(968-1008)は在位わずかにして一條天皇に御譲位なされ深く観音力を信じられ那智の山に籠って修業せられること三ヶ年、更に広く大慈大悲を求めて那智観音を第一番として西国三十三ヶ所へ、当山の弁阿上人等を先達として巡礼の旅に出られた。世に花山法皇を西国巡礼の祖とあがめ、今なおその心の旅がつづけられているのである。

20

(境内にあった花山法皇西国巡礼の碑。花山法皇は西国観音霊場巡礼の中興の祖)

那智ノ滝の滝壺まで降りて天空から落下する神水の飛沫に打たれたかったが、時間が無かった。

さて、紀伊國にある西国観音霊場3札所は、この第一番札所「青岸渡寺」から熊野山地に分け入り、熊野古道の中辺路を逆に辿って紀伊田辺に出てからは紀伊水道沿いに南紀海岸を北上して和歌山市にある第二番札所「紀三井寺」、紀の川市にある第三番札所「粉河寺」の3札所を巡るものであるが、徒歩で10日間ほど掛かる。一番から二番までは約200km程離れていて、その間には札所は無いから専ら山中の「中辺路」と下界に降りた「紀伊路」を黙々と8日間ほど歩くことになる。

下記に、そのルートと日程を示した。以降の記事は、目的の札所に辿り着くまでを当該項として書いたものである。例えば、次の「第二番 紀伊山 金剛宝寺」(通称、紀三井寺)の項は、一つ前の札所である第1番「青岸渡寺」を出発してからこの第2番「紀三井寺」に参詣する迄の様子を書いたものである。従って、前の札所から当該項の札所までの距離が長い場合には、次の第二番の項のように、冒頭にはその札所の本堂などの写真を掲げてはいるが、目的の札所に辿り着くまでに数日以上を費やす場合もあるので、その間は途中の古道の様子などを描いていて札所の様子は稿末になってやっと出てくる場合も多いので、ご承知置き願いたい。また、札所の宗派、本尊などもその項の稿末に付記した。



[第一番 那智山 青岸渡寺]

天台宗 本尊：如意輪観世音菩薩 御真言：おん ばらだ はんどもい うん
 創建：4世紀 御詠歌：補陀洛や 岸打つ波は 三熊野の 那智のお山に ひびく滝津瀬
 参詣日：令和元年5月11日



第二番 紀三井山 金剛宝寺 (和歌山市)



(大千手十一面観世音菩薩、4丈、平成20年開眼、紀三井寺・仏殿)

この寺は西国観音霊場第2番札所であるが、第1番札所の那智山「青岸渡寺」から約200km、徒歩で8日間掛る。その間には札所は無い。よって、この寺に辿り着くのは8日後になるので、その間、那智山から和歌山市まで逆に辿った熊野古道の様子などを王子社を中心にご覧頂くこととしたい。

【1】那智山から熊野本宮まで (令和元年5月11日～12日)

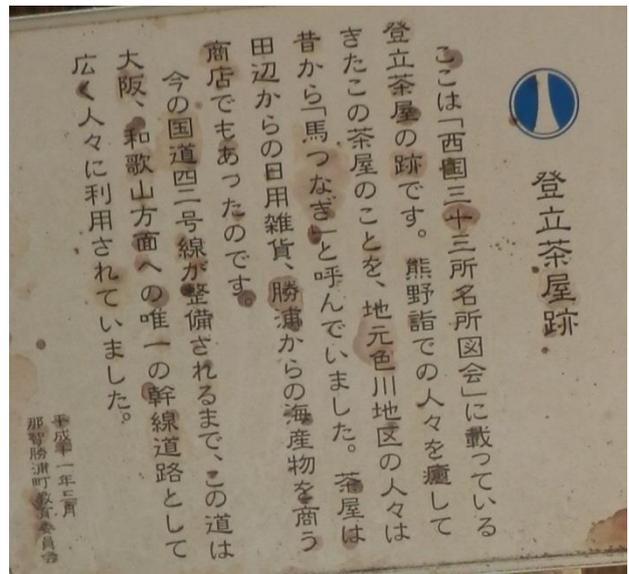
那智山から熊野古道「中辺路」^{なかへち}に入る道は、那智山地の大雲取越、小雲取越という熊野古道随一の難所を登って熊野本宮に抜ける古道であり、さらに熊野本宮からは紀伊山地に分け入って紀伊田辺迄富田川の溪谷を下る山・溪・里山道のルートとなる。“雲取”と言うだけあって越える峠の標高は9百メートルもあり、スタート地点の那智山の標高が100メートルであるから標高差800メートルを水平距離僅か2kmで登るという勾配4/10の急坂である。

第一番札所「青岸渡寺」の裏山からこのルートに入った。いきなりの急坂で息が上がる。しかも凸凹の石畳であるから足の裏が痛いことこの上ない。

石畳の急坂をヒイヒイ言いながら2時間、登立茶屋跡という茶屋跡に辿り着いた。右のような案内板が建てられていて、この大雲取越の道がかっての新宮と和歌山・大阪を結ぶ幹線道路であったようだ。

更に1時間ほど急坂を上った所が舟見茶屋跡という展望ポイントになっていて、文字通り熊野灘の沖に行く舟が見える展望台であった。

スペインから来た若者が2、3人憩っていた。この熊野古道は、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラと姉妹巡礼路になっており、しかもユネスコの世界遺産であるから、欧州からのトレッカーが沢山歩いていた。日本人は少なかったが、例の騒々しい団体ツアーのChineseが全く居なかったのが幸であった。



(←舟見茶屋跡から熊野灘を望む)

長閑な南紀の山道では、燦々たる陽光のもとで鶯と春蝉が競うように鳴いていた。

舟見峠からの下りは八丁坂と言い、「亡者の出合」とも呼ばれている。ここは妙法山という死者が集まる那智の霊山への道の途中であるから、亡くなった肉親や知り合いが白装束で眼前を歩いている姿が見えるのだという。ナルホド、ここの薄暗い石畳道にはそのような不気味な気配が感じられた。

アップダウンがキツイ山道を下って行くと、大きな舗装林道のほとりに出て地蔵茶屋跡というちよつと開けた場所に出た。「この先、熊野古道崩壊、林道を迂回せよ」という標識が出ていた。それによれば、この上の石倉峠という場所が土砂崩壊で通行できず、小さな迂回林道を1時間程余計に迂回せねばならないようだ。距離にすれば通常ルートの3倍くらいになるようだ。

しかし、他に逃げ場も無いので、トコトコと迂回の林道に入って行った。ところが、この林道は狭くて淋しく、また薄気味悪そうな山道で、行けども行けども先が見えない。石倉峠への標識もそれらしき分岐も全く無く、五里霧中のロストポジションになってきた。道はクネクネと曲がっているから、これから向かうべき小口という小さな集落への方向もサッパリ分からない。

これは、ひょっとしたら、誤って全く違った仕事道に入ってしまったのではないか？ 仕事道と言うモノは何処に繋がっているのか分からないし、また、途中で消えている場合も多い。さすれば、狐にでも化かされたようなもので、一晩中この淋しい山中をウロウロとリングワンデリングする可能性が高い。登山の鉄則は、“道を間違えたと感じたら、直ちに引き返せ”ではなかったか？

という次第で元の出発点である地藏茶屋跡にノロノロと戻ってみたが、この標識以外に新しい情報がある筈もない。道を聞こうにも人っ子一人居ない。あ～あ、困りにケリな。他に選択肢も無いので、再び標識に従って仕事道に戻ってみたが、事態が好転する兆しも無い。やはり、迂回路はこの林道（仕事道）ではなさそうだ。きっと別な迂回路があるに違いない。という次第で、またまた地藏茶屋跡まで引き返した。このようなことをしている内に、2時間ばかりロスってしまった。時計を見ると既に15時を廻っていた。

土砂崩壊で通行止めになっているという石倉峠を強行突破してみるか？ しかし、崩壊の現場まで行き着いたとしても、崩壊が激しくて行くに行けず戻るに戻れずになるかもしれない。また、正しい迂回路が見つかったとしても、この先には大雲取越で一番標高が高い越前峠（標高900m）が待ち構えており、またその先には胴切坂という急傾斜のゴロタ道が延々と下っているのだ。ここから今晚の宿がある小口集落までは順調に歩いても3時間は掛かる。ここまで大雲取越の急坂の難路と迂回林道のウロウロで体力と時間を浪費してしまった小生には5時間くらいは掛かるであろう。さすれば、日が暮れた山中の闇夜のゴロタ石の急坂を下らなければならないが、これは白内障で視力が弱っている小生にはとても無理だろう。深い山中でビヴァークか？ さすれば予約している宿の人も到着しない予約客を心配して遭難捜索救助を要請するだろう。翌朝の地元新聞には、「後期高齢者、無謀な古道歩きの山中で遭難、真夜中に警察と消防団が捜索出動、地元大迷惑！」という活字が躍っているだろう。

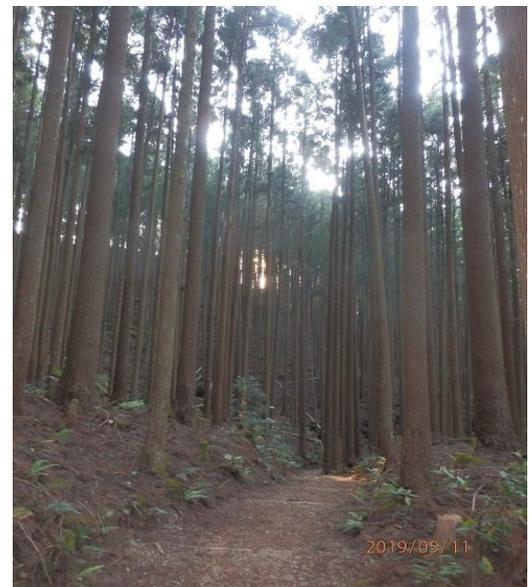
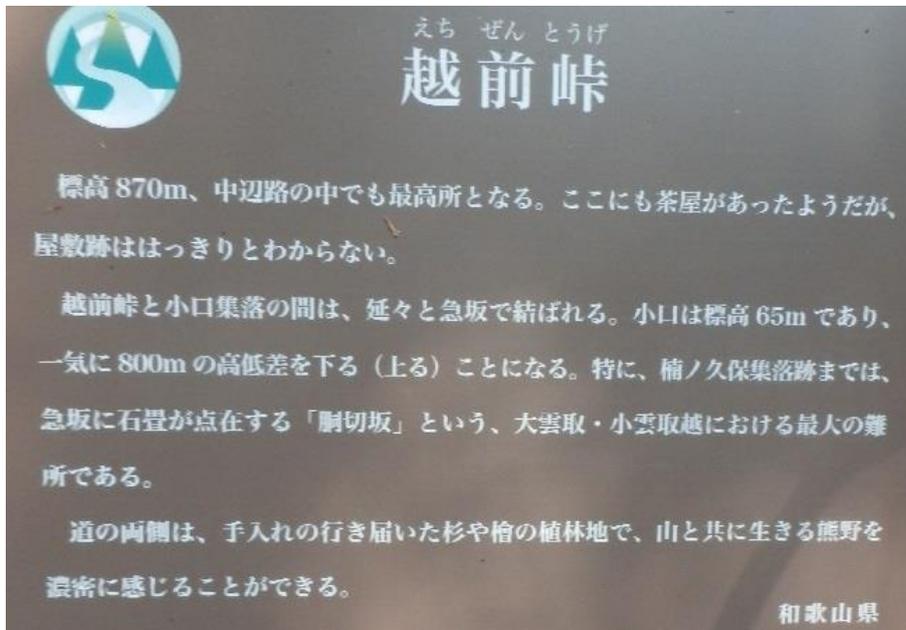
こうなったら、恥も外聞もない。いくらタクシー代が掛かるうがタクシーを呼ぶしかない。深い山中ではあったが、幸運なことに携帯のアンテナは3本立っていた。タクシー会社の電話番号が分からないので、予約してあった小口の宿に電話を掛けてタクシー会社を聞いて見た。宿の御主人曰く「あなたが今いる場所は林道は通っているが、こちらからはゲートが閉まっていて車は入れない。また、この辺りにはタクシーも無い。熊野本宮からタクシーを呼ぶしかないが、事前に予約していない限りこのような遠方のしかも山の中の林道までは来てくれないだろう。たとえ来てくれたとしても、往復のタクシー代金はウン万円を超える。宿の方では何時迄でも気長に待っているから、所定の安全なルートを通して歩いて来るように。ヘッドランプは持っているか？ 真っ暗な山道だから、充分注意してゆっくり歩いて来なさい」という、有り難いご返事。

これに元気を頂いて、しばむ心を奮い立たせて三度迂回路の仕事道林道に入った。ここに限らず、熊野古道ではある意味では標識がしっかりしているのであるが、熊野古道巡礼道の方は京都から和歌山を經由して熊野本宮・那智・新宮方面に向かう方向を順路としているので、当然のことながら標識は全て熊野古道巡礼の方向で設置されているし、熊野詣がメインの熊野地方では西国観音霊場巡礼は全く認識されていないので、西国観音霊場巡礼用の標識は全く無い。従って、熊野古道を逆方向に辿る西国観音霊場順路では、四国遍路の「逆打ち」と同様、熊野古道の標識は西国観音霊場順路にとっては無いに等しいのである。

そのような訳で、今回進んでいる方向からは全く標識が見えなかったのであるが、よく注意して見たら、こちらからは見えにくい引込んだ場所に越前峠への標識があり、この仕事道が正しい迂回路であることがやっと分かった。この標識を見落としたばかりに、思わぬ体力と時間を大浪費してしまったという次第であった。嗚呼、情けなや、情けなや。

越前峠への登りはゴロタ石を重ねたような凸凹の急坂の石畳で、ここまでで十分に草臥れきった身には誠にキツかった。そういう訳で、越前峠に辿り着いた時はホッとした。多少心の余裕も出て来たし、いくら焦っても浪費した時間と体力が戻る訳でもないと観念したら気が楽になった。

宿には到着が遅くなるということも伝えてあるので、こうなったらいくら時間が掛かってもよいから、ゆっくりと歩を進めて、転倒したりして足腰を骨折しないように気を付けるのが一番である。路傍に建っている案内板と石碑を読む余裕も出て来た。



(案内板にも記されているように、手入れが行き届いている植林地)

上段右側の石碑は越前峠にあった土屋文明の歌碑で、「輿の中海の如しと嘆きたり 石を踏む^{よぼる}丁のことは伝えず」。後鳥羽上皇の熊野詣に随従した藤原定家の、折からの大雨で輿の中までズブ濡れになった我が身の辛さだけを詠んで、自分を乗せた輿を担いでくれる輿搔き人夫（丁）の苦勞には思いを致さない貴族（藤原定家、「熊野御幸記」）の身勝手さを皮肉ったものである。

越前峠からは胴切坂と呼ぶ長い急な下りの難所が始まる。胴切というのは、身が振れて横腹が切れるほど痛いという意味らしい。脚が笑って笑って往生した。最後には脹脛が苦しくて座り込んでしまったが、一旦座り込むともう立ち上がれなくなってしまう。ヘッドランプを点けてはいるが、視力が衰えている上に鳥目の小生は真っ暗な闇の中では足の置き所が見えず摺り足で歩を進める始末。おまけに、凸凹の急な石畳の上にゴロタ石やザレ石が載っていて石車となって始末が悪い。

越前峠の標高が 870 ㍎、一方、これから下る小口は標高僅か 65 ㍎であるから、一気に 800 ㍎の標高差を下ることになる。もう転がり落ちたいくらいだ。道は山の中腹を巻いているのだが、いつまでたっても標高が下がらない。どのくらいな時間が経過したであろうか。やっと、溪の下の方から川の水音が聞こえて来て、やがて足下の林を透かして小口集落の灯りが見えだした。ヤレヤレ。

しかし、集落の中の道は真っ暗闇で宿がどこにあるのか見当もつかない。誰かに尋ねようにも、人の気配さえ無い。宿に電話してオンサイトで道案内をして貰う始末。

今朝那智山の宿を出てからこの小口の宿に入るまでに 12 時間掛かった。那智山から小口までの熊野古道は、集落はおろか、民家一軒も無い山中のまた山中の連続であった。那智山から紀の川市までの今回の 10 日間の旅で、初日の今日が一番キツイ 1 日となった。

前頁で触れた後鳥羽上皇の一行は、この小口には泊まらず、那智山から 1 日間で次の泊まり場・熊野本宮まで足を延ばしたそうだし（「熊野御幸記」、また、西国観音霊場札所古道を復活した松尾心空師のグループ「アリの会」（P.2 参照）も同じ本宮までの 35km を 12 時間で歩いているので、ロストポジションでロスした 2 時間を差し引いたとしても、その半分の距離しかない小口までの 17km に 10 時間も掛るようでは、これはこれから先が思いやられる。

今日の行程では、熊野詣古道を順路で（熊野から那智方向へ）歩いて来た人びとには何人かに遇った。主にヨーロッパやオーストラリアからのトレッカー*（or 巡礼者）であった。日本人も少しは居た。しかし、この逆方向（即ち西国観音霊場巡礼の順路）を歩いていた人は一人もいなかった。やはり熊野徒歩巡礼に較べて西国観音徒歩巡礼は圧倒的に知名度が低いのであろう。地元の人に道を聞いても、熊野詣の道は教えてくれるが、西国観音巡礼の方は全く聞いたこともないようであった。

註*) いつも不思議に思うのであるが、日本語が読めない欧米人が、日本人でも分かりにくい遍路道や熊野古道をどのようにして山道の間違わずに通ってくるのであろうか？ 今回もスマホを見ていた外人に聞いて見た。スマホには詳細な英文の巡礼地図がインストールされていて、勿論 GPS によって自位置も表示されている。従って、例えば分岐点に差し掛かると、正しい方向への分岐道をスマホが指示してくれるのだそう。また、詳細な巡礼地図も英語版が発行されていて、標識や石碑の類も日本語と英語の両方が対比できるように記載されている。例えば、路傍の標識や石碑は書いてある日本語が分からなくてもイメージとして認識して、それと同じイメージをスマホ（や紙の地図上）で探せば正しくその表示に従うことができるのだそう。成程、なるほど。左様でございますか。

小口は小さな集落で、宿も民宿が 2 軒しかない。その内の一軒は農家民宿で 1 日に 2 組しか泊めず、この夏までは予約で満員とのことで断われた。もう一軒の方は廃校になった中学校を再利用した民宿で、応対も設備も飯もなかなか良かった。宿泊客はヨーロッパ人が多く、係の人は英語で応対していた。「小口自然の家」という。

何にも増して嬉しかったのは、夜半遅く到着した小生に嫌味一つ言わず、冷えた晩飯なども暖め直してくれて、「今日のビールは格別に美味しいでしょうネ」と労ってくれた宿の人びとの心遣いであった。

やはり、マナーが行き届いている国から来た欧州人を相手にしているから、そのような親切心が培われているのであろう。5月11日泊。

(1泊2食8,000円)。

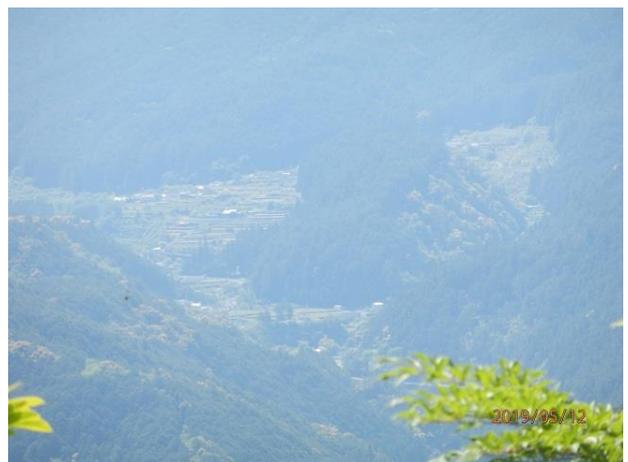
[本日の歩行距離=急坂山道17km] (中学校を再利用した「小口自然の家」、右が食堂、左の校舎が宿泊棟)

さて、翌日5月12日は小口から熊野古道中辺路の小雲取越を越えて熊野川に降り、熊野川沿いに少し遡って熊野本宮に至った。小雲取越は昨日の大雲取越と異なり標高がその半分程度の500m程度であるから、昨日に較べれば楽ちんであった。

小口から道路を少し歩き、赤木川が大きく彎曲する小和瀬という所から中辺路の尾根道に入った。急坂を1時間程登ると、桜茶屋跡に出た。かつては桜が植えられた茶屋があって、旅人のオアシスとなっていたという。小口の集落が俯瞰できた。南紀はもう真夏日で、顔の汗がタラタラと滴り落ちた。



(桜茶屋跡の四阿)



(桜茶屋跡から小口集落を俯瞰)

中辺路には、その場所場所の由来を示す標識や歌碑が諸処に建てられている。熊野古道の整備は関係市町村が石畳補修、標識設置、歌碑設置などそれぞれを分担して整備しているようで、このような努力によって古道が保たれているのである。

途中、右のような歌碑もあった。「まさびしきものとぞ思ふ たたなづく青山のま乃川原を見れば」 斎藤茂吉作



小雲取越を登り切ると、前述の死霊が集まるといふ妙法山（標高 609 ㍎）中腹のコルに出て、一気にパッと視界が開けた。ここは熊野参詣道中随一とも言われる展望台となっていて、百間蔵と呼ばれている。標高 430 ㍎。ここに来て初めて紀伊半島・南紀山側の熊野本宮方面の眺望が得られる。ちょっとした広場になっていて、片隅には地藏菩薩が祀られ、急坂を登って来た身には有り難い休憩場所であったので、座り込んで水をガバガバと飲んだ。北側に霞んだ山なみは、紀南の秘境と呼ばれる大塔山（標高 1122 ㍎）、冷水山（1261 ㍎）、高尾山（944 ㍎）などの紀和国境をなす果無山地ほてなしの山々であった。



（百間蔵から果無山地の山々を望む）

世界遺産
World Heritage

 ひゃっ けん
百間ぐら

小雲取越の絶景ポイント。「ぐら」とは「高い崖」の意とされる。

熊野三千六百峰といわれる幾重にも重なる山並みが美しい。

北西には果無山脈ほてなしさんみやくの稜線が美しく眺められる。連なるように西南に遠く横たわるのは、紀南地方の最高峰 大塔山おおとうざん（1121.8m）を中心とした大塔山系である。西には野竹法師のたけはうし（970.8m）の均整の取れた姿が目立つ。

和歌山県

百間蔵から熊野川に降った時から雨になった。この熊野川との出合地点は請川という場所で、本日の終点である熊野本宮はここから未だ徒歩1時間半ほど熊野川を遡った地点にある。雨の中を歩道が無い国道を歩いて行くのは大型トラックやダンプカーに刎ねられに行くようなものだからという理屈を付けて、折から来たバスに乗って本宮に行った。乗車時間たった7分。これは正解であった。本宮に着いた時には、雷が鳴って犬や猫が降ってきた。

本宮には宿が少ない。熊野本宮を参拝する人々はその大部分が1里ほど離れた湯峯温泉に宿を取るからである。やっと予約できた宿は、農家を改造した農家民宿であった。若いオーナーは誰も住まなくなった農家を買って取って民宿に改造し、改造資材にも化学新建材などは全く使わず自然のままの農家に宿泊できるように、またアトピー患者なども安心して泊まれるように化学食品や洗剤なども持ち込み禁止にするなど、環境に配慮した農家民宿を2軒、洒落たカフェを1軒営業しているインテリジェンスに富んだオーナーご夫婦であった。民宿は農家一軒まるまるを貸切タイプで提供し、食事も宿に有害物質が残らないように兼業のカフェで頂く仕組みになっていた。さすれば、カフェにはアルコール類は置いていないのではなかろうかと、余計な心配をしたが、少し高価ではあったがちゃんと提供されていた。

宿にはオーナーは常駐せず、客だけが宿泊するスタイル。今晚の泊り客は全室貸切で小生1人のみ。

ご主人曰く「明日の宿は予約しましたか?」。ワタシ「10連休直後なので、どこでも空いているのではないのでしょうか?」。ご主人「令和改元直後ですから、今年のG.W.後は平年と大違いです。もし未だなら至急予約しておかないと、路頭に迷うこととなりますヨ。特に明日泊まれる予定の近露集落には民宿は沢山ありますが、あそこはいつも満員になっていますからネ・・・」。という訳で、ガイドブック片手に片っ端から予約の電話を入れてみたが、全て満員。参った、マイッタ。

オーナーの奥様が知り合いを頼って何軒かに電話して探してくれた結果、つい先日新規に開業したばかりという1軒の民宿をやっと探し出して下さった。ヤレヤレ、やっと助かった。後で記すが、この民宿も大変気持ちの良い民宿であった。夕食をこのカフェで頂きながら、また、〇ビを飲みながら、オーナーご夫婦と四方山話をした。熊野の世界遺産の話から海外の話にも及び、ワタシの海外山行や遍路行脚などの話をしたら、非常に興味を持たれたようであった。サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼にも今年か来年行く予定とっておられた。

精進宿「山水月」(やまみづき)。夕食付9,564円。食事良。5月12日泊。[本日の歩行距離=山道19km]

※蛇足であるが、本宮には呑み屋は全く無い。また、酒類を調達できる酒屋もスーパーもコンビニも全く無い。左党に

は全く淋しい所である。また、翌日の朝食や昼食を調達できる店も無いので、下界に居る間に買っておくこと。

【2】熊野本宮から南部町まで (令和元年5月13日～15日)

令和元年5月13日 晴れ午後雨

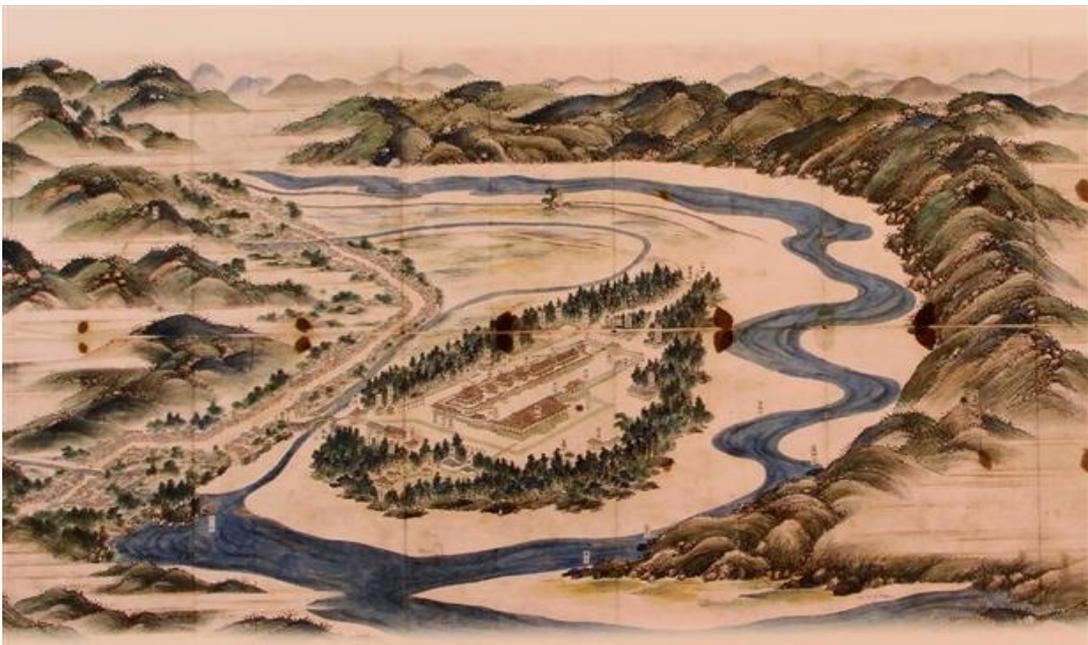
前夜泊まった本宮の農家民宿を早朝に出発し、朝霧に咽びながら熊野本宮大社の旧社地である大齋原を訪ねた。大齋原は、熊野川が低地に下って来て大きく蛇行し、そこに音無川と岩田川が合流する中洲である。明治22年8月に発生した十津川・熊野川大水害で、ここに建てられていた本宮大社の伽藍の多くが流されるまでは、この大齋原が熊野本宮大社の社地であった。

(旧社地・大齋原の大鳥居。天辺のマークは八咫鳥⇒)





(現在の大斎原)



(江戸時代末期に作成された熊野本宮本社絵図、大斎原。熊野川と深い関わりのある立地であったことが分かる)



(水害後、大斎原から近くの高台に遷座した現在の本宮大社) (本宮大社の八咫鳥碑、大斎原入口。直ぐ後が音無川)

本宮大社が大齋原に在った頃は、浅瀬であった音無川（前ページの絵図で境内の左側に描かれている細い方の川）を藁沓を脱がずに渡って本宮に参詣することが作法であったそうで、前述 P. 15 の藤原定家『熊野御幸記』には、「・・・これ濡れ藁沓の入堂といふ云々・・・」と記されているようだ。今は水深も深く、大きな太鼓橋が架かっていた。

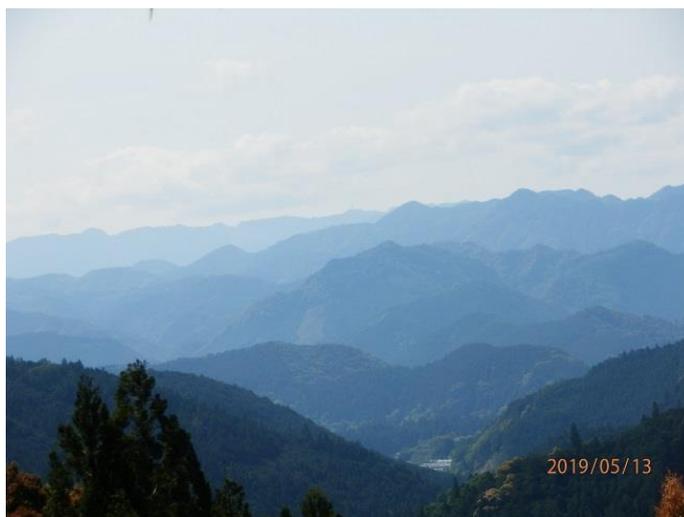
さて、熊野本宮のことはこれ位にして、先を急ごう。

本宮からの熊野古道は、熊野川沿いに北側から西に廻り込んで隣町の中辺路町に至る中辺路、及び、湯峯温泉を通過して直接中辺路町に抜ける赤木越の2種類がある。熊野古道の王子社（P. 4 参照）の配置から見るとどうも前者がメインルートようだから、小生もそれに従った。本宮大社から熊野古道の逆を辿る時に最初に現れるのは本宮大社のすぐ近くの祓戸王子社であるが、これは割愛して次の伏拝王子を目指した。

伏拝王子は、遙々京都から歩いて来た熊野参詣者が、初めて熊野本宮大齋原の樹叢が見下せる台地に立って遙かに大齋原を伏し拝んで感涙に咽んだ場所だという。

ここには、今でも茶屋が開いていて、〇ビは置いてなかったが、手製の紫蘇ジュースが乾いた喉に美味かった。

伏拝王子には平安時代の歌人・和泉式部の供養塔（笠塔婆）が建っている。よく知られているように、和泉式部は貴顕に従がって熊野に7回詣でているが、いずれも月の障りによって参拝できなかったという。



（伏拝王子から遙か本宮を望む。右下）

その無念さを、「晴れやらぬ身のうき雲のたなびきて 月の障りと成るぞ悲しき」と詠じたところ、夢枕に熊野大権現が顕れて「もとよりも塵に交わる神なれば、月のさはりの何かくるしき」と返歌したという。これを聞いて和泉式部は念願の熊野詣を遂げたと伝えられている。

事実がどうであったか知る由も無いが、この説話は往時は不浄が忌み嫌われた世情にあつて、熊野信仰の神の寛容さを演出して庶民にまで教線を拓ける御師のデマゴグの一環であったのかも知れない。

世界遺産
World Heritage

ふしおがみおうじあと
伏拝王子跡

京都を出発した熊野参詣の人々は、およそ260km、歩行12日前後でこのあたりにたどり着いた。そして、熊野三山巡拝の最初の目的地である本宮が、遙か彼方の熊野川の中州に鎮座する光景を目の辺りにして、感動のあまり「伏して拝んだ」という。

また、この王子には、熊野本宮を目前にしてにわかに月の障りとなり、参拝を断念しようとした女流歌人・和泉式部を、熊野権現が快く受け容れたという伝説もある。

境内には和泉式部の供養塔と、一定の距離を示すために13世紀に建てられた笠塔婆がある。

和歌山県



チョット^{シモノネダ}下種になって恐縮であるが、小生の民俗学的研究によれば、往時の男女の間柄は極めてオープンで、特に宮居の中や貴頭の間では毎晩毎晩誰彼構わずやりまくったらしい。特定の相手という習慣はなく、いわば毎晩が歌垣&混交パーティーであった。誠に羨ましい限り。特に貴頭の女流は詩歌などの文才も一流であったが、アチラの方面も大変に旺盛で、しかも次々に男を変えてオコナったそうであり、その中でも和泉式部はスキモノの筆頭格であったらしい。彼女の『泉式部日記』は女流日記文学の最高峰と褒められているが、ナニ、単なるオ○○コ日記であり、また往時の不倫マニュアルでもあった。

マ、そのような訳で、上皇や貴頭の熊野詣への随行も、謂わばソノ方面の需要を満たすためのものであるから、いつ誰のタネを宿したかも分からず、いつも誰かのタネを宿していた訳だから、月の障りになる時期は無かったと考えるのが正解である。従って、当然のことながらこの説話は後世の作り話で、熊野の御師（今で言うツーリスト会社の営業マン）の格好の客引きキャッチコピーであったという次第。神仏の聖なる世界にこのような性なる下種を持ち込む小生は、やはり仏縁が無い。二河白道、六道の闇。

(↓伏拝王子の和泉式部供養塔)



伏拝王子社跡からは、小高い台地状の長閑な畑の中を1時間程歩けば次の王子社である水呑王子跡に着く。名前の如く湧水が湧き出ていて往時の参詣者にとっては丁度良い休憩場だったのであろう。途中には微笑ましい姿の熊野・八咫鳥の道案内が建っていた。





やたがらす
八咫鳥(由来)

熊野では八咫鳥を神の使者と言われています。三本足とは熊野三党(宇井鈴木・榎本)表わすとも言われ、当社では主祭神家津美御子大神(素盞鳴尊)の御神徳である**智・仁・勇**、又**天・地・人**の意をあらわしています。

鳥は一般に不吉の鳥とされてきているが、方角を知るので未知の地へ行く道案内や、遠隔地へ送る使者の役目をする鳥とされており、熊野の地へ神武天皇御東征の**砌**、天皇が奥深い熊野の山野に迷い給うた時、八咫鳥が御導き申し上げたという意があります。又、歴史上の一端より触れて述べれば源平合戦の折那須与一出身地(栃木県)鳥山城は鳥が金の御幣(神のお告げ)をこの地にもたらしたので築城したといわれています。

2019/05/13

更に歩くこと1時間で「発心門」王子に着く。ここは、京都から行脚してきた参詣者がいよいよ熊野の聖域に入る、即ち、此处で下界での悪行を振り落して信心を発心する場所であった。小さな鳥居と祠があったが、これが発心門の王子社だったのであろう。折から熊野詣ツアー客を案内して来た尻皮・ニッカーボッカー白衣姿の山伏が法螺貝を吹きながら般若心経を唱えていた。下の右写真に見えるように、何やら神さびて厳かな場所であった。

世界遺産
World Heritage



ほっしんもんおうじあと
発心門王子跡

熊野川の中州に鎮座する熊野本宮まで約7kmの所にあるこの王子の名は、
発心門すなわち「悟りの心を開く入り口」とされる大鳥居があったことに由来する。

天仁二年（1109）に参詣した貴族・藤原宗忠（1062～1141）は、まず門前で祓いをし、発心門は大鳥居であり、参詣の人々は必ずこの大鳥居をくぐることに、また、はるかに見遣ると恐れを感じることを日記に書き残している。

また、建仁元年（1201）に和歌の講師として後鳥羽上皇の熊野御幸に供奉した貴族・藤原定家（1162～1241）は、王子社の背後にあった南無房という尼の居室を宿舎とし、門柱に感動と祈願を込めた漢詩と和歌を書き付けている。

熊野九十九王子の名称は地名や地形に基づくものが多いが、発心門王子の場合は信仰に関連する命名の代表であり、この王子が果たした役割の大きさを表している。

和歌山県



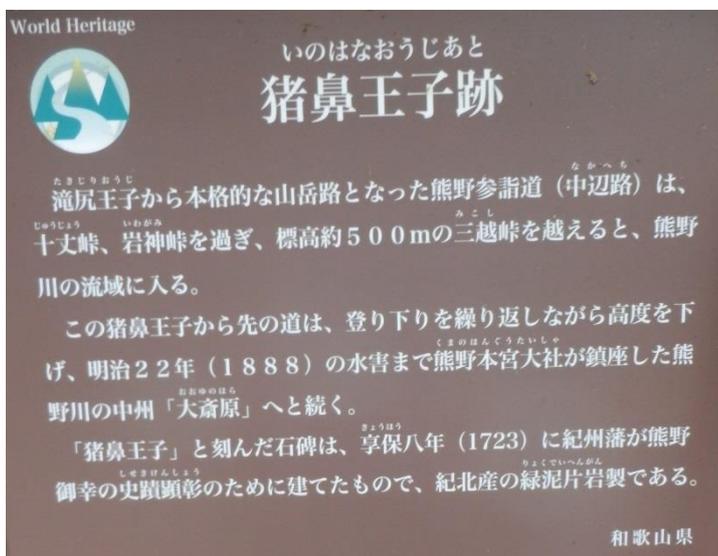
(神さびた発心門王子の佇まい)

さて、普通の熊野古道ハイキングの人々は大抵はここ発心門王子から本宮方面に引き返すので、ここから先の音無川源流部を遡って三越峠を越えて中辺路町に出る所謂「熊野古道・中辺路」ルートを逆に辿る人は滅多にいない。

このルートから戻って来た単独ドイツ人は、この先のナントカいう橋が大水で崩れ落ちていてそれから先には進めなかったの引き返して来たと言っていた。また、別の日本人単独行者は、本宮に戻る積りで間違っこの中辺路に入ったが、音無川に降った地点の土手が崩れていてその先の径が消え、また赤木越・湯峯温泉経由で本宮に戻るルートも土砂崩壊で通行禁止となっていたとの情報を伝えてくれた。

小生は道中ズート中辺路を辿る積りにしていたから、土砂崩壊があつたとしてもマア何とかなるだろうとタカを括って誰も居ない淋しい音無川源流部への急坂を降って行つた。これがマチガイであつた。

木の根が張り出した歩き難い急坂を音無川の河床に下ると猪鼻王子という王子跡があり、またその横には玉姫稲荷と船玉神社があつた。玉姫神社というからには美人の姫君に纏わる伝説でもあるのだろうが、案内板は無かつた。一方、船玉神社には次のような由緒書があつた。曰く「船玉神社は、この付近の玉滝という滝の滝壺で溺れる蜘蛛を救う為、熊野の神が楠の木を削り抜いて初めて舟という物を造つた。船の神様で、船乗り達に深く信仰されている、云々・・・」。



(船玉神社)



(左：船玉神社、右：玉姫神社)

さて、引き返して来たご両人の言うように、音無川の源流部に降った赤木越分岐点の所が土砂崩壊して、先に進めなかった。



(赤木越分岐点。この橋が影も形も無く消えていた)



(中辺路ルート of 音無川源流部付近の地道)

本来の中辺路ルートの古道がどこにあったのか定かではなかったが、あちこち歩き回って探してみると左岸の土砂崩壊した土手の上に径らしき物が見えるように見えた。これしきのトラブルで引き返すようでは世界的クライマーの小生としては恥ずかしき限りなので、何とか径らしき所まで土砂崩壊した滑る斜面を這い上がった。土手の上に細い地道が通っていた。

この地道を三越峠方面にドンドンと登って行くと、やがて地道が草茫々となり、人が歩いた形跡が全く無くなってきた。道は段々と狭くなって中腹を縫うように登っているが、諸処に土砂崩壊の跡もあって、ここも人が歩いた形跡が全く無い。これはどうもヘンだ。道を失ったか？段々と不安になってきた。やがて道が上側の林道に登り切った所に臨時緊急看板が掲出されていた。曰く「ここから音無川に降る熊野古道は土砂崩壊のため通行できません。この林道どうりに発心門王子に直行して下さい」。ナルホド、ここまでの音無川源流部の土手道や山腹のトラバース道が荒れ放題になっていた理由が、これで判明した。

それならば、何故発心門王子にも同様な迂回警告看板が出ていなかったのか？ 実は、この辺の熊野古道詣は紀伊田辺方面から熊野本宮に向かう方向がメイン方向なので、道標も全てその方向で掲示されているのであって、逆方向からの西国観音霊場巡礼の為の道標設置などは初めから念頭に無いのである。

さてさて、ここで感った。今どこに居るのか？ この先、本宮町と中辺路町を分ける三越峠を越えるまでにどのくらいの時間が掛かるのか？ それに、この先の古道に更に崩壊箇所が出てくるかも知れない。また、この先は今晚泊まる予定の近露集落まで集落や民家は全く無く、山中の小径の激しいアップダウンが少なくとも 10km 位は続いているらしいので、もし古道の崩壊などのトラブルがあればまたまた山中ビヴァークの真なしとしない。その上、先程のドイツ人の話では、この辺りの巡礼道でオーストリア人が転落して死亡し救助隊が入っていたような話をしていたナア〜。これはマズイことになりそうな予感。

そう思いだしたら、段々と気が滅入ってきた。お化けが出そうな気配もある。かつて熊野詣の路頭に倒れた巡礼者の幽霊もこの辺にウヨウヨしているのではなからうか？ 空模様も怪しくなってきた。という次第で、残念ではあるが、この三越峠越えはまたの機会に譲ることに決めて、このままこの迂回林道を発心門まで引き返し、そこからバスで本宮経由で近露まで飛天することにした。バスの本数が少ないので、終発に間に合うかどうか分からないが、マ、発心門集落まで行けば人家もあるので、何とかなるだろうと、コンクリ舗装のウネウネと曲がった先の見えない林道を歩いて発心門のバス停に戻った。

バスを待っていた乗客は、小生以外は全て白人だった。運転手氏が首から小型のスマホの如きモノをぶら下げていた。ポケトークという翻訳機だそう。このバス路線（龍神バス）は外人の利用客が多いので、会社が運転手に持たせているのだそう。例えば、「どこまで乗りますか？」と吹き込めば、音声と画面で翻訳文が表示される仕掛。何ヶ国語にも対応しているので、運転手はどこの国の乗客にも話しかけることが出来るし、また逆に乗客に質問を吹き込んで貰ってこの翻訳機に回答を喋らせるという芸当もできるそうだ。試しに触らせてみて貰って、スペイン語で質問してみたら、翻訳機がちゃんと正しい回答をスペイン語で戻してくれた。便利な世の中になったものだ。龍神バスは小さなローカル・バスであろうが、やっていることはなかなかニクイではないか。これぞ地元活性化の横綱ではないか。

発心門を発車する頃から雷雨になった。三越峠を越えて歩き続けていれば、この土砂降りでは低体温症に陥って遭難しているかも知れないので、途中で引き返した判断は正しかった（としよう）。発心門から本宮・湯峯温泉経由で2時間程山中を走って、今晚の泊まり場である近露集落に到着した。湯峯温泉から先は小生一人の貸切バス状態となり、運転手氏がいろいろと観光案内をしてくれて楽しかった。

近露では新しく営業を始めたという近露「そら」という民宿に泊まった。オーナーご夫妻は和歌山県出身ではあるが、長い間川崎に住んでおられたが、定年を機にIターンしてここ近露で熊野古道巡礼者用の民宿を開いたのだそう。ご主人は和歌山市の出身、奥様はこの近露に縁がある人だそうだ。

ご主人は京大工学部数理工学科卒のインテリでキャノンでIT技術者をやっていたそうで、コンピュータ関係の仕事をしていた小生と話が合い、ビールを飲みながら業界の四方山話などをして楽しかった。この民宿には欧米人も沢山泊まるそうで、そちらの担当は専ら通訳士である奥様の御役目のようだった。今日も1組の白人夫婦（恋人？）が泊まっていた。食事も贅沢ではないが新鮮なものだった。5月13日泊、2食付9,000円ほど。

5月14日 雨

本日は朝から雨だった。雨の中の山道を歩くのは、木の根や泥濘、石畳、苔で滑ったりしてまたまた腰椎骨折の古傷がぶり返してもいけないし、そろそろ中休みも欲しかったので、雨これ幸いと途中の主要な王子社にだけ立ち寄って、後は本日の泊まり場である上富田町・鮎川まで路線バスで飛天することにした。近露では、近露王子に参った後に山道に入りすぐ近くにある牛馬童子を見た後、大坂本王子まで足を延ばし、そこから国道の道の駅まで引き返して滝尻王子までバスに乗った。



(近露王子跡)



(雨に煙る近露集落、熊野古道の四阿より)

牛馬童子というのは、童子が牛と馬の2頭を並べてその上に跨って乗っている珍しい石像で、その童子の愛らしさで人気が高いそうだ。童子は、藤原一族の陰謀によって弱冠18歳で皇位を追われ、以降は西国霊場巡礼に浮身を棄し西国観音霊場の中興の祖となった花山法皇を模したものであるとも言われている。下右側の写真に見るように意外に小さい石像であった。蛇足であるが、この像は頭部が何者かによって切断されて持ち去られ、替わりに同じ石材を使って復元された頭部が補填されている。切断された頭部は地元住民の必死の捜索活動によって11km離れた山中で発見されたが、復元された頭部を取り除くのが困難なため、元の像には戻されていない。



(愛らしい牛馬童子像)



(左が牛馬童子像、右は役行者像)

大坂本王子は、急坂を越えた所にあるので“逢坂”⇒大坂本と呼ばれたそうだ。中世の熊野参詣記の代表格、「中右記」(藤原宗忠)によれば、ここには蛇形が掛った大樹があり、これは女人が化成した不思議な樹であると伝えている。今はそのような樹も無く、淋しい空き地に碑と鎌倉時代の笠塔婆が残っているだけであった。(淋しい大坂本王子跡⇒)



大坂本王子跡から少し引き返し気味に国道に出ると、そこに道の駅があった。白人のトレッカーが次々に雨宿りに下山して来て店の中は大入り満員となった。中に食堂があったので、〇ビと親子丼で昼食にした。道の駅の前にバス停があって、次に立ち寄りたい滝尻王子(別格の熊野五体王子の一つで、ここから熊野大社までが神域となるキーポイント)

ト。中辺路の起点)まで飛天した。バスは富田川の井戸の底のような溪底を駆け下った。このバスの終点は遙か先の南紀海岸・紀伊田辺だそう。

バスが駆け下った滝尻には熊野古道館という展示館があり、熊野参詣や古道の史料などが展示されていた。そこに荷物を置かせて貰って、滝尻王子に詣でた後、急な山道を1時間程登った所にある不寝王子跡と乳岩、胎内くぐりを見に行った。

滝尻王子は広くて立派な社殿で、綺麗な休憩所も整えられ、種々の資料も置いてあった。流石、別格の五体王子だ。(滝尻王子社↓)



(熊野古道館)



滝尻王子

Takijiri-Oji

国史跡 平成十二年十一月二日指定

この王子社は、岩田川(富田川)と石船川が合流する地点にあり、ここから本宮まで厳しい山道となります。天仁二年(一一〇九)に熊野参詣をした藤原宗忠は、十月二十三日に水を浴びて禊をした後、この王子社に参拝していますが、日記に「初めて御山の内に入る」と書いているように、滝尻からが熊野の霊域とされたのです。承安四年(一一七四)に藤原経房がこの王子に参拝した時には、社殿で巫女が里神楽を舞い、建保五年(一二二七)の後鳥羽上皇と修明門院の参詣の際には、両院が馴子舞いに興じているように、いろいろな芸能が奉納されました。特に著名なのは、後鳥羽上皇が歌人を随行させた時には、この王子社の宿所で歌会を開いたことです。建仁元年(一一〇一)に藤原定家が随行した際に、めいめいが和歌を書いた「熊野懐紙」は一枚も残っていませんが、前年の正治二年(一一二〇)のものは十一名の分が伝来しており、そのすべてが熊野古道館に複製展示されています。鎌倉末期以降、熊野の御子神五所を祀る五体王子の一つとされ、室町時代にもそのように呼ばれていますが、三栖から潮見峠越えて栗栖川へ通じる道が多く利用されるようになると衰退しました。明治時代には村内の神社を合祀して十郷神社と呼ばれましたが、現在は滝尻王子宮十郷神社と称しています。

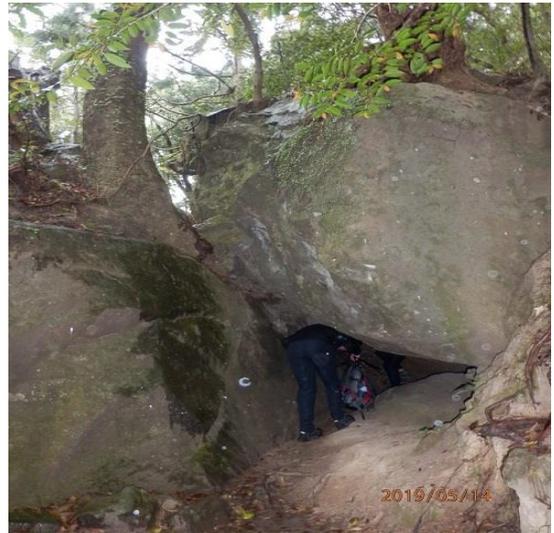


(滝尻王子にあった中辺路古道の起点標)



(不寝王子跡。左の木箱にはスタンプが入っている)

(胎内くぐり⇒)



ちち いわ
乳 岩

ひでひら

むかし奥州の豪族藤原秀衡が夫人同伴で熊野参りに来た時、ここで夫人が急に産気づき、この岩屋で出産したという伝説がある。夫妻は赤子をここに残して熊野に向かったが、その子は、岩からしたり落ちる乳を飲み、おおかみ狼に守られて無事だったので、奥州へ連れ帰ったと伝えられている。その子が成長して、秀衡の三男の和泉三郎ただひら忠衡になったという話までである。



滝尻からはまたバスに乗って本日の泊まり場、上富田町の鮎川で降りた。民宿「賀茂」、缶ビール2本とも7,600円。なかなか結構。工事関係の長期宿泊が多いそうだ。但し、今宵は小生一人。

5月15日 晴れ

本日の行程は、いよいよ熊野古道・中辺路ルートを後にし、富田川中流域の鮎川から南紀・田辺湾の田辺市街に出て紀伊水道沿岸の熊野古道・紀伊ルートを辿って南高梅で名高い南部町みなべまでの約25kmの歩程である。山中の山道から一気に平地の車道に降りた感じであった。

山中の山道は険しくはあるが一本道であるから、ある意味では迷いようがないが、平地に出ると国道や県道や地道などが交錯していてどこが熊野古道なのか、サッパリ分かりにくかった。遍路人口の圧倒的違いはあるが、例えば四国遍路道や秩父観音霊場では道標がしっかりしているのに対して、ここ熊野古道の平地・町中部分には全くと言っていいほど道標が見当たらなかった。また、歩いている巡礼者に会うこともなかった。

マ、往時の古道は熊野に限らずどこでも道路整備や土地利用の変化、工業団地や住宅団地の新規開発等によって寸断され、或いは荒廃・消滅している箇所も多いから、往時の古道を復元することは簡単ではない。かつては、^{みちしるべ}道標の石碑や一里塚が諸処に設置されていたが、現在ではそれらも極く一部を除いて撤去・移転させられているから、これらを繋いで歩くこともなかなか容易ではなくなってきている。



(これくらい大きな道標であれば見落としにくいですが・・・)

(こちらは見落としやすい。右こかわてら)

正面：左くまの道、左面：南海道善光寺如来)

マ、そのような訳で、平地に降りてからは迷いに迷った。理屈上では熊野古道の王子跡を繋いで歩けばよさそうなものであるが、一般的には商店街でもない限り滅多に人影を見ることがなく道を聞こうにも聞く人が居ない。また、「〇〇王子はどこですか」と訊ねても、余程郷土史に詳しい人でない限り何のこともやらチンプンカンプンの様子であった。それもその筈、路傍の草に埋もれた小さな古い祠など地元の人でもいちいち知ってはいないであろう。

マ、そのような訳で、迷った道筋を書き殴っても仕方がないので、本日の行程は途中で立ち寄った王子社(跡)の写真を順に掲げてお茶を濁すこととしたい。

(一瀬王子跡)



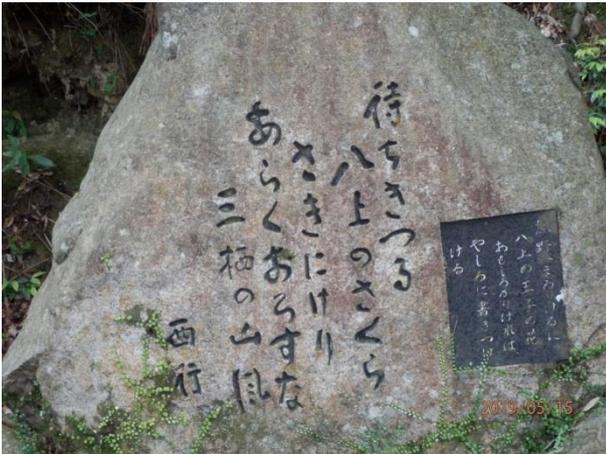


(稲葉根王子)



西行法師 八上王子参拝絵巻より 2019/05/15

(↑ 八上王子に掲げられていた西行法師の参拝絵巻)



(← 同、西行歌碑。「熊野、まゐりけるに 八上の王子の花のおもしろかりければ やしろに書きつけける」の詞書も彫られている。右下の黒石部分)



(三栖王子。梅林の隅にあった)



(万呂王子跡。標柱以外何も無かった。梅畠の中)

この石碑と説明板が置いてあるだけだった



(秋津王子跡。マンションの横の溝にひっそりと石碑があった。これでは在所が分かりにくい)

今晚の宿は、南部町^{はねた}埴田の民宿「にしかわ」。素泊まり 4,300 円。ママア。職人の常連宿泊客が主。但し、今宵は小生一人。今回初の夜遍路は近くの焼鳥・釜飯屋「とりじゅん」。Good。本日の歩行距離=25km。



5月16日 快晴

南高梅^{みなべ}の南部町から、安珍・清姫伝説で名高い道成寺の御坊市までの約 30 km が本日の行程である。道成寺はその縁起の絵解きで有名だそうだが、今回の観音霊場ではないので残念ながら見学を割愛した。

註) 南高梅^{みなべ} 南高梅というのは、関東などでも梅酒を作るにはこれでないとい美味い梅酒が造れないという伝説的な梅で値段も高い。“南高”というのは南部高校のことで、この学校が梅の品種改良を行って高級梅の新品種を創り出したのだそう。世間に出回っている南高梅の梅干しは、それぞれの梅干しメーカーが開発した漬け方によっているので、南高梅干しの製品のブランド統一は無いようだ。

さて、本日は田辺湾から紀伊水道の海岸沿い道路（国道 42 号）を終日北上するのであるが、ここでも途中に散在している王子社を辿って歩いたが、昨日同様迷った。特に、行ったり戻ったりしつつ迷っていたので、南部市街から千里浜までのたった 3km 程の道に 2 時間も掛った。マ、これも修行の内かも知れないナ。

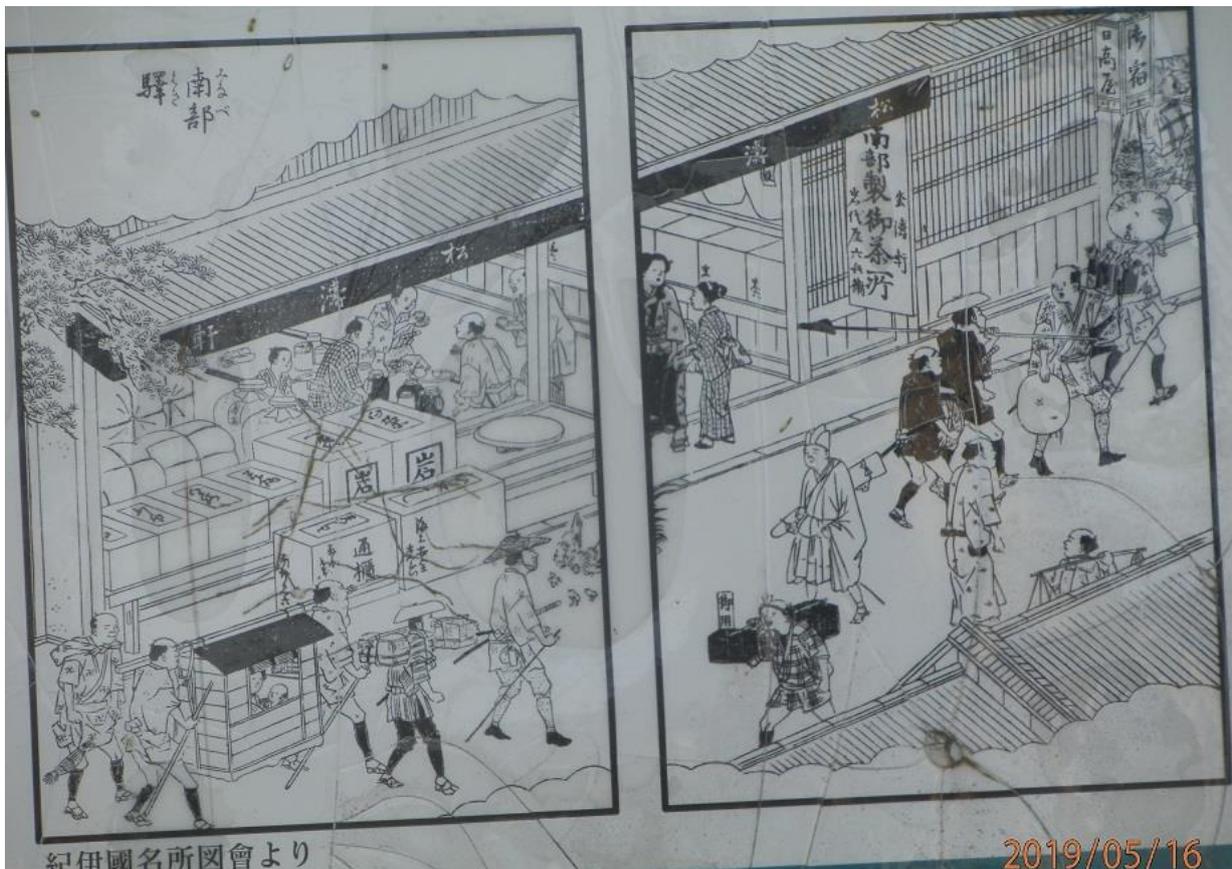
使用した巡礼地図は、冒頭の P.2 参考図書の項でも触れたが、松尾心空発行アリの会編『西国三十三所古道徒歩巡礼地図』である。これは地理院の 2.5 万図幅に西国霊場札所順礼古道を赤線で重ねて追記しただけのものであり、主要なランドマークの記載が無いので、この地図を見ただけではルートが非常

に分かりにくい。オリエンテーリングの読図知識を総動員しても追いつかない程のシロモノである。

他と比較して悪いが、例えば、同様な造り方で出来ている四国遍路のガイド地図（へんろみち保存協力会編「四国遍路ひとり歩き同行二人[地図編]」）に比べれば、追記されている情報量の少なさ、読みにくさから言って雲泥の差で劣る上に価格も高い（本書は3,500円、四国遍路の方は2,500円）。値段のことを云々するのは心苦しいし、また、両者には需要部数にも大きな差異があるので一概に比較することは慎むべきであるが、折角実地を歩いて西国霊場札所巡礼古道を復元されたのであるから、改訂版を出されてより充実した巡礼地図になることを期待する次第である。

さて、本日の行程の内、千里浜の砂浜の古道歩きと御坊市街地の手前にある坎中仏（通称「仏井戸」、井戸の水中の内壁に彫られている非常に珍しい仏像彫刻）の二か所が行く前からの最大の期待目玉であったので、本日は主にこれらについて書く。

本日の朝出発した南部の街は、かつての宿場らしく、由緒ありそうな佇まいの街だった。



ここから、三鍋王子を経て千里王子がある千里浜に向けて歩くのだが、南部川を渡って途中の小高い梅島の中に入り込んでしまうと、仕事道が縦横に交錯していて全くのロストポジションになって困った。おまけに間もなく梅の収穫シーズを迎えるらしく、梅の木の下には梅の実を集めるネットが張り巡らされ、所有者以外立ち入り禁止の看板やら防犯カメラ監視中の看板があちこちに立っていて、泥棒扱いされているようで益々慌ててしまった。逃げ出したいのだがどちらに行っても出口が無い。困りにけりナ。

そのような訳で、2時間ほどあちらに行ったりこちらに戻ったりしている内に、やっと千里観音という神仏混交の境内に出ることができた。すぐ先に千里浜の砂浜が茫洋と広がっていた。千里王子社はこの境内のすぐ下の砂浜に祀ってあった。

後鳥羽上皇の妃・修明門院の熊野詣に随伴した藤原頼資の『修明門院熊野御幸記』には、「潮去り潮来たりて、野中の松風袖を払う。信心胆に染む。蓋し幽玄の地なり」と記されているとうりの名勝地であった。ただ、
 信仰心皆無の小生には、“信心胆に染む”という感懐は無かったが、茫洋とした水平線の彼方を見ていると、往時の補陀洛渡海の願望も何となく分かるような気もした。



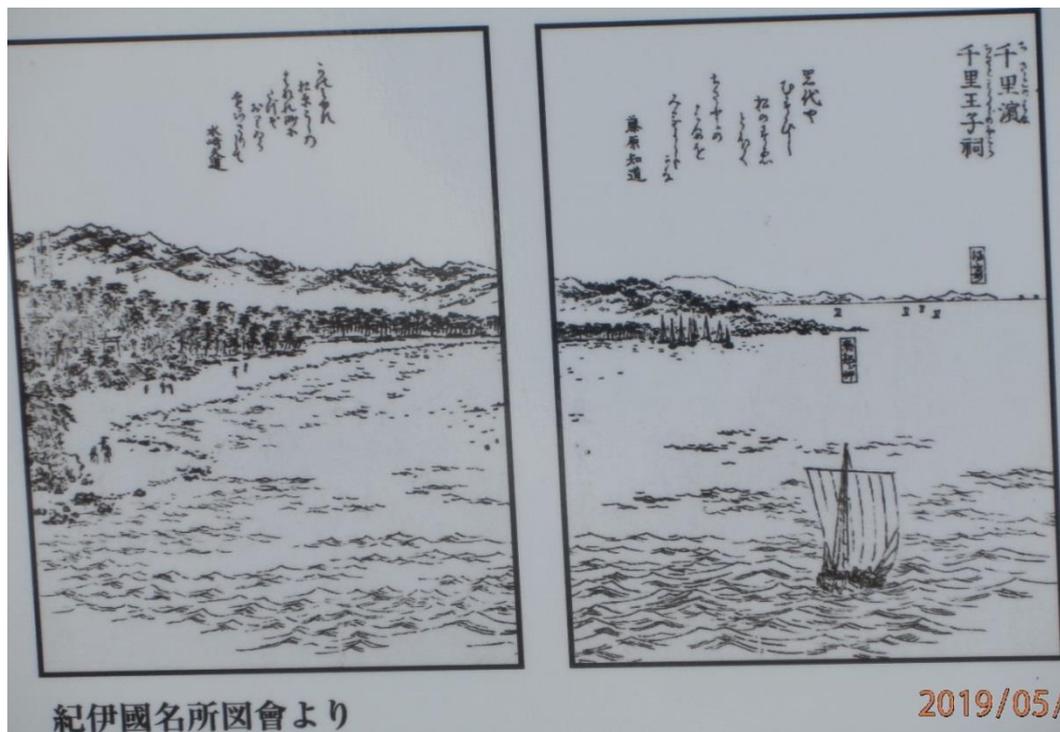
(千里観音の山門。扁額には「梵音閣」とあった)



(千里観音のすぐ下に千里浜が広がる)



(茫洋とした千里浜)



紀伊國名所図會より

2019/05/16

千里観音には白馬が奉納されていた。毒酒を飲まされて死んだ小栗判官が照手姫の牽く土車に乗せられて熊野湯峯温泉で地獄から生還した後、その帰途の千里浜沖で遭難しかけている時に千里観音菩薩が白馬に化けて救ったとの伝承があり、小栗もその後自ら馬頭観音を刻んでここに奉納したという。

また、千里観音の山門の参道脇には西国三十三観音霊場の本尊を刻んだ石仏が33体並べられていた。どれも相当に古色掛っていて風情が感じられた。惜しむらくは第一番「青岸渡寺」の如意輪観世音菩薩像が失われたのか、真新しい新品に替わっていたのは残念であったが、中には微笑ましい仏像もあった。



(微笑ましい仏像も⇒)



この千里観音の直ぐ下の砂浜にある千里王子社は小さいながら鞘堂に覆われた祠であった。境内には花山法皇の御製歌碑が建っていた。「旅の空夜半の煙とのぼりなば あまの藻塩火たくかや見む」。この歌に関して、「大鏡」には以下のような逸話が記載されているそうだ。「熊野道に千里の浜といふところにて、御心地そこなはせたまへれば、浜づらに石のあるを御枕にてんのごもりたるに、いと近く海士の塩焼く煙立ち昇る心細さ、げにいとあはれにおぼされけむな」



(鞘堂に覆われた
千里王子社⇒)



(花山法皇の歌碑)

千里王子社からズ～ト砂浜伝いの古道を、次の岩代王子社まで歩きたかったのであるが、砂浜は先の岬の先端で岩礁に変わっており、また岸壁には JR 紀勢線の擁壁が建てられていて浜伝いには通過できなかった。台地上に上がって線路を横切り野球場の造成地を大回りして海岸の岩代王子社に辿り着いた。

途中、公園の工事をしていた人と四方山話をしたが、那智から奈良・京都・姫路を抜けて舞鶴まで歩いて行くような酔狂も居るのかと驚いた表情だった。



(千里浜の岬突端（終点）はこのような岩礁になっていた)

次のトピックス、坎中仏は、印南町から御坊市に抜けた国道 42 号線の脇にあった。通称仏井戸と言われている。井戸の中の水中の壁面に仏像が彫り込んであるそうだが、水の中なので良く見えなかった。説明板によれば、相当に珍しいものだそうだ。何故水中に仏を彫って祀ったのか？

井戸を掘削した時に、落盤事故か何かが発生して工事中の人が死んだ供養のためであるのか、或いは井戸は掘れたが早魃で水が出ず、誰かが人身御供になって埋められたことへの供養であるのか……。或いは、井戸掘り職人が単に記念のために、または信仰心か遊び心で彫ったのかも知れない。



(中央の小さな祠に仏井戸がある。周辺は長閑な農村)

和歌山県指定文化財(史跡)

【平成24年7月20日指定】

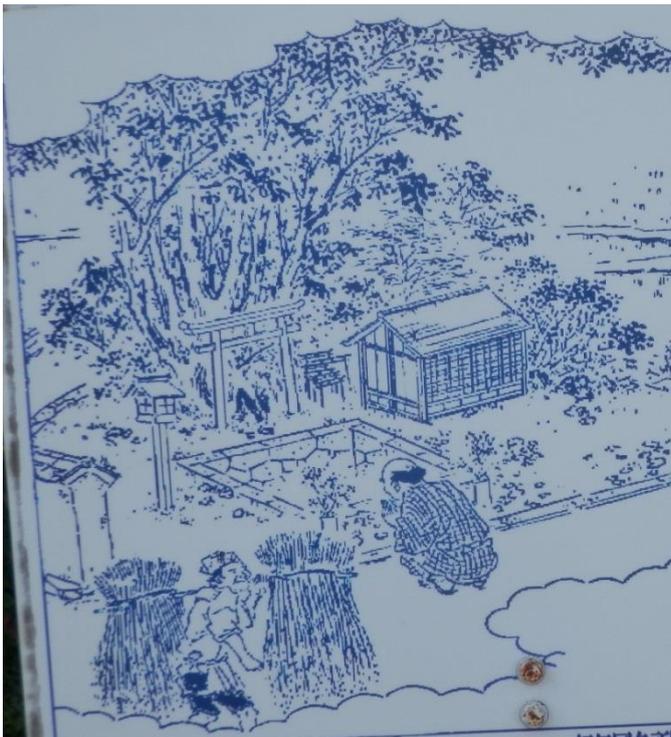
仏井戸・上野王子旧地

(熊野参詣道 紀伊路)

階段を降りて正面、北側の壁面の石材に石仏三体(中央-阿彌陀如来坐像、左-地藏菩薩立像、右-観音菩薩立像)が彫られています。

像高は、約25cmで室町時代末期頃の作と推測され、普段は井戸の水の中に見ることができません。

仏井戸のように仏像を井戸の中に祀ることは、全国的にも珍しいと思われます。



(村人が仏井戸を拝んでいる様子)



(水が溜まっていた井戸の中は見えなかった)

本日の余談であるが、今日の御坊市の泊まり場の近くには塩屋王子というかなり大きな王子社があった。通称「美人王子」と呼ぶらしい。夜店開催のポスターが貼ってあった。

美人王子というのは、この塩屋王子神社（村社）の主祭神である大日靈女貴命（天照大神）の神像が美しいことからの命名であるそうだが、美人といい、夜店といい、歌垣の場に相応しい。往時は、開放的な真夏の夜の老若男女の〇〇パーティーの場であつたに違いない。

本日の宿。御坊市塩屋町の民宿「寿旅館」。素泊 3,800 円。綺麗な旅館でベッド室もある。応対も良い。小生はトリプルベッドの広い洋間であつた。ここも作業関係の人が多いそうだ。（出稼ぎ？の外国人も泊まっていた）。

食事は隣の兼業の寿食堂で食べる。一膳飯屋風の大衆食堂であるが、これまた非常に結構。



5月17日

本日は、御坊市から日高町を經由して醤油発祥の地・湯浅町までの 25km の行程である。途中には熊野古道・紀伊路の難所と言われる鹿ヶ瀬峠があり、また熊野古道最長の石畳が 500 ほど山道に沿って貼られていた。中世の熊野参詣記の代表格、「中右記」（藤原宗忠）には、「坂を登るの間十八丁、其の路甚だ險阻にして身力すでに尽く。林鹿遠くに報らせ、峽猿近くに叫ぶ。物の感に触れ、自然情を動かす」と記されている難路であつたようだ。今は古道公園として整備され、急坂ではあるが歩きやすい山道になっていた。

さて、御坊市から日高町に入った所で、国道 42 号線と JR 紀勢本線が並行して走るようになると、そこに本日最初の王子社である「高家王子社」があつた。なかなか立派な社殿が建っていた。（高家王子社⇒）

源平の戦いに敗れた平家の最後の武将・平維盛が那智に落ち延びて補陀洛渡海の壘に倣って入水して果てたという



伝説があるが、その平維盛が熊野に詣でる途中にこの高家王子社に立ち寄ったことが『源平盛衰記』に「鹿瀬の山を越え過ぎて、高家王子を伏し拝み、日数漸く経る程に千里の浜も近付きにけり」と記されているようだ。

さて、高家王子社からは西川という小さな川沿いを鹿ヶ瀬峠に向かって山に入っていく。この辺りは長閑な山間の田園地帯で、田植前の田起こしが行なわれていた。路傍には馬留王子跡という碑もあった。往時は鹿ヶ瀬峠の険峻を越えて下って来たこの地で、馬を留めて人馬共しばし休息を摂ったのであろう。また、この辺りの山には黒竹が沢山生えていて日高名産品として出荷されているようだ。

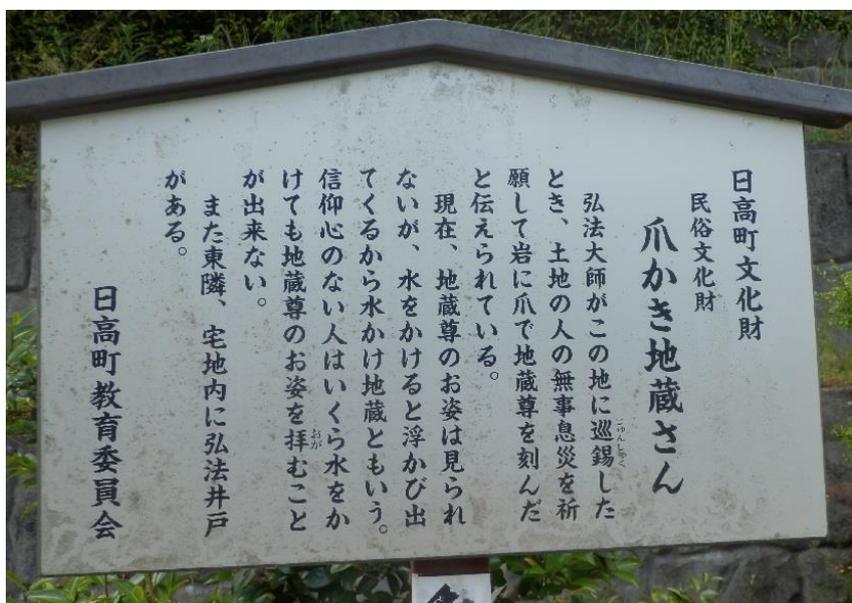


(日高町の長閑な田園地帯)



(馬留王子跡の碑)

ここから、山あいの緩やかな坂道を登って行くと「爪搔き地蔵」と言う祠があった。説明板には下のようにならされていた。



(この祠の中に爪で刻彫された爪搔き地蔵の石が祀られていた)

小生が見た時には、次ページの写真のように爪搔き地蔵菩薩サマが浮かび出て来てそのお姿を拝むことが出来たので、ワタシの信仰心もマンザラではないと思いたい。マ、今までの遍路や観音巡礼で門前町の赤提灯に多額のお布施をイタシて来たので、実は閻魔サマにその功德が多少は認められたのかもしれないナ。

余談になるが、ここの谷間の景色を眺めながらトボトボと歩いていた時に、ふと、会社の同僚だった「岩」さんが確かここ日高町の出身だったと聞いたような記憶が蘇ってきた。確か、小学校では神童、高校では鄙には稀な秀才と呼ばれていたのではなかったか？

彼とは同年代で気が合い、社内でも親しかったので、現役の頃は勿論、今でも年に何回かは会って盃を交わしている間柄である。彼と最近会ったのは昨年の年末であったから、そろそろ半年ぶりにもなるし、彼は奈良在住だから今回の帰途奈良に立ち寄って旧交を温めるのも悪くはないナと思って携帯から電話してみた。

今、何処を歩いているのかと言うから、貴兄が秀才と言われた日高高校の校門の前を通過して、山あいの田圃のほとりを歩いているよと応えると、ちょっとそこの道端の両側に大庄屋の豪農の家が2軒向かい合っているのが見えると思うが、そこが俺の実家だ云々・・・というような次第で、奈良や大阪在住の会社の同僚を集めるから帰途奈良にちょっと立ち寄って貰って、山上の清談でもやろうではないかということになった。有り難いお言葉。これを聞いて、小生の足は一気に軽くなって、飛ぶように鹿ヶ瀬峠を越えることができた（と思いたい）。

また、途中で道を尋ねた農家の方が、「ホホウ、神奈川から歩いて来なされたか？ちょっと待って下されや」といって態々家まで帰って大きな夏みかんを3ヶ程持って来て下さった。皮が固かったので、道端に転がっていた石刃のような石ころで皮を剥いで頂戴した。ちょっと酸っぱくて眼に滲みしたが、出て来た涙は酸っぱさのためだけではなかった。地元の人々の往時から続く古道の旅人への心遣いが眼に滲みしたのであろう。

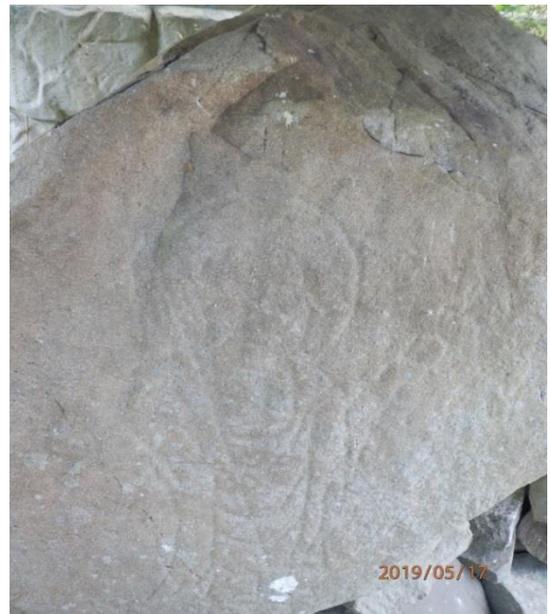
これも観世音菩薩さまの有り難い仏縁ではないか。

さて、ここから、少し登って山の道に入ると金魚茶屋跡という場所に出た。ここはかつては和歌山方面と紀伊勝田辺方面を結ぶ日高往還の宿場になっていたようで、往時の石垣や廃屋が残っていたが、今では淋しい廃墟と化していた。金魚は、旅人を慰めるために飼っていたのだそう。

(右上写真=金魚茶屋跡。後ろの建物は近年まで茶屋をやっていたらしい)

金魚茶屋跡を過ぎると、いよいよ鹿ヶ瀬峠の登りに掛る。登り口に掛る手前には路傍に板碑などが並んでいて、如何にも往時は巡礼の道だったことを示していた(王子谷板碑群)。登り口は古道公園となっていてベンチなども置いてあった。

— 41 — (路傍の板碑群⇒)



(薄らと浮かび上がった爪掻き地蔵の刻線)





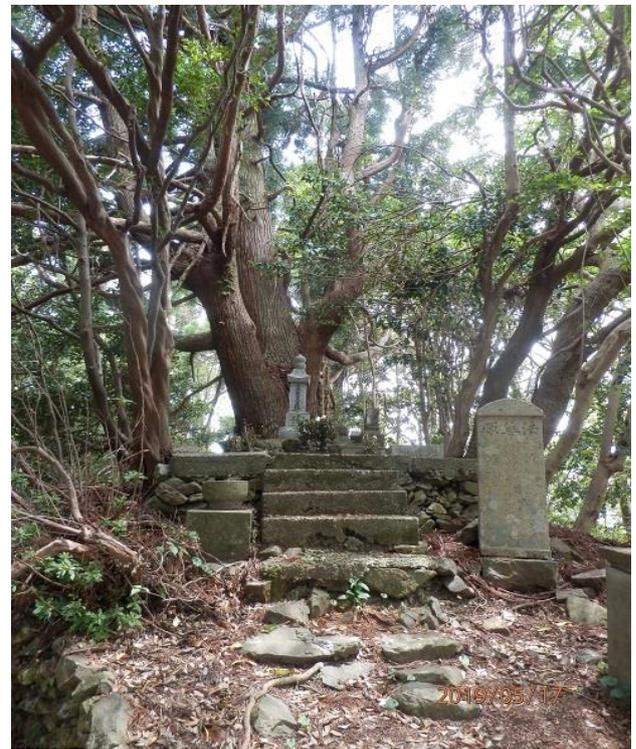
(鹿ヶ瀬峠への登り口にある古道公園。右写真の奥が熊野古道・紀伊路最長と言われる石畳道 500m の始まり)



(鹿ヶ瀬峠へ続く石畳道)



(古い石垣跡が往時の往還を偲ばせる)



(往時の巡礼道を彷彿とさせる史跡も・・・)

鹿ヶ瀬峠から長い長い山腹の坂道を下り、醤油の発祥地の湯浅町に出た。醤油産業は千葉県の野田や銚子が有名であるが、実はここ和歌山県の湯浅が本家本元で、ここから醤油職人が各地に散って行ったのだそうだ。

本日の宿、ビジネスホテル「てまり」。4,600円。食事は1階の喫茶店で食べられる。たった8室の小さなビジネスホテルであったが対応も良かった。オーナーご夫婦の姉妹が川崎に居るのでそちらに行った折に時々横浜や鎌倉、湘南に遊びに行くそうで、喫茶店でビールを飲みながら湘南の話が弾んだ。



(湯浅の街にあった三本足の八咫鳥の看板。ここは未だ熊野の神域か?)

5月18日 晴れ、午後雨

本日の行程は湯浅の街から山越えて和歌山市内に至り、西国観音霊場第二番札所である「金剛宝寺」、通称紀三井寺に詣でた。那智の第一番「青岸渡寺」を出発してからやっと8日目にして第二番まで辿り着いたという長旅であった。

湯浅の街並みは、往時の熊野古道の宿場の俳を残した由緒ありそうな町であった。路傍には熊野詣の史跡や折々の和歌なども掲出されていて、地元の人々のこの地に対する思いが滲んでいるようだった。通りには塵ひとつ落ちていず、また早朝にもかかわらず綺麗に打ち水がしてあり壁に挿された竹筒には野の花も活けてあった。

湯浅姓発祥の地とかで、由緒ありそうな民家に下のような看板もあった。そういえば、何日か前に通って来た熊野古道沿いの熊野本宮の近くの湯川という山奥の集落は全国の湯川姓の発祥の地だそうで、全国湯川会というのがあるそうだが、日本初のノーベル賞受賞者の物理学者と関係あるのかないのか・・・



(右端の貼り紙は次ページのようなものだった。この家が往時からの旧家であったことが分かる)



古しえの
 雅の香り
 偲ぼるる
 湯浅の町は
 今に息づく

後白河法皇が熊野詣での途中、
 当家にお泊りになった際、
 お使いになる水を汲んだと
 伝わる井戸が中庭に在ります。
 小さな井戸ですが、今でも、
 清らかな水を湛えています。

(往時?の常夜灯にはこのような和歌も貼ってあった。
 のびやかな筆であった⇒)

さて、湯浅の町を過ぎてからは、逆川王子という王子社に詣でながら蜜柑畑の中の急坂を登って湯浅町・有田市境になっている糸我峠を越えて、糸我王子に参った。周りは全て蜜柑園で、ナルホド、有名な「有田みかん」は此処が本拠地であったか。

余談であるが、逆川というのは、ここを流れている小さな川が、付近の川とは流れが逆方向になっていることから名づけられたそうで、周辺にある沢山の溜池を繋ぐ水路が複雑に入り組んでいるためかも知れない。



(逆川王子社)



(糸我峠から有田市方面を望む)



(周りは全て蜜柑園)



(糸我王子社、中央右の小祠が社殿)

糸我峠には下に掲げた案内板が建てられていた。貴顕と言えども（貴顕だからこそ？）往時の誠にオープンな男女関係が覗える逸話であろう。マ、どうせ後世の作り話ではあろうが、いつの世でもこの種の話は世間で喜ばれたようだ。案内板に曰く、

糸 我 峠

熊野参詣道紀伊路の有田市と湯浅町にまたがる丘陵を南北に越えるのが糸我峠である。『平家物語』の巻第六「祇園女御」には、糸我峠における伝説が記されている。平忠盛は白川院が寵愛していた祇園女御を賜っていたが、その女御は白川院の子を孕んでいたの、白川院は「生まれる子が女子であれば我が子にし、男子であれば忠盛の子にして武士にせよ」と仰せられた。間もなく男子が生まれ、忠盛はそのことを奏上しようと思っていたが、適当な機会がなかった。白川院が熊野御幸の途中、糸我峠で輿を据えさせて暫く休息なされた。その時、忠盛は藪にぬかご（山芋）がいくつもあったのを見つけてそれを採り、白川院に「いもが子のははふほどにこそなりにけれ」と申し上げた。すると院は直ちにお気づきになり、「ただもり取りてやしなひにせよ」と後の句をお付けになられた。忠盛は山芋に掛けて女御が男子を産んだことを報告し、院も察知して連歌にてこれを詠まれた。この時から忠盛は自分の子として養うようになり、その男子が後の平清盛であるという。 有田市教育委員会

糸我王子の近くに「熊野古道歴史民俗資料館」というのがあった。係員も居ないオープンの小さな施設であったが、展示品はなかなか面白かったので、その幾つかを掲げる。





さて、糸我王子社からは、有田川を挟んだもう一つの丘陵地帯（長峰山脈とかいう標高 500 ほどの山地にある蕪坂峠）を越えて海南市街地に下るのが紀伊路古道である。この山稜にも山口王子社はじめ 3 つほどの王子社がある。この古道は稜線を歩くために、紀伊水道や有田川を眺望できる眺望ポイントだそうだが、折から大雨が降り出して、この雨の中をアップダウンが続く急な山坂を登り降りするのも面倒くさくなって、丁度近くに JR 紀勢線の駅（紀伊宮原駅）があったのでここから和歌山市街地近郊の紀伊三井寺駅まで飛天した。

今回の巡礼の出発点、第一番札所那智山「青岸渡寺」から延々と 200km、8 日間歩いてやっとこさつと第二番札所「金剛宝寺」（通称紀三井寺）に辿り着いた。他人の旅行記ほど退屈なモノは無いし、拙駄文にここまでお付き合い下さった読者の皆さんも大変お疲れになったと思うから、紀三井寺のことはその寺名の由来だけに留めたい。「三井」とは、境内に三ツの名水があることに拠る。清浄水、楊柳水、吉祥水の三井。同じ名前の名刹が大津市にもあるが（園城寺、通称三井寺）、こちらは天智、天武、持統三帝の産湯に使われた霊泉があったことに拠るのだそうだ。

紀三井寺は例の Chinese 観光バス団体はじめ、沢山の人出で賑わっていたが、とくに印象に残ったものは無かった。格式ある古刹にもかかわらず、本項の冒頭に掲げた平成 20 年開眼の大千手十一面観世音菩薩が唯一目立った存在であったことは、小生に信仰心が無いためだけではなく、往時から信仰心というよりも物見遊山がこの寺の売り物であったのではなかろうか。



〔第二番 紀三井山 金剛宝寺〕

救世観音宗 本尊：十一面観世音菩薩
御真言：おんまか きゃろにきや そわか
御詠歌：ふるさとを はるばるここに

紀三井寺 花の都も 近くなるらん
創建：宝亀元年（770 年）

参詣日：令和元年 5 月 18 日



本日の宿：ビジネスホテル「圭」

4,100 円。安価なのを取り柄

夜遍路：宿の隣の中華料理屋「列剛」

生中 2 杯、餃子一皿。

計 1,400 円ナリ



第三番 風猛山 粉河寺 (紀の国市)



(西国 33 観音霊場随一の規模を誇る本堂。一重屋根の礼堂と二重屋根の正堂とが結合した複合仏堂)

[5月19日～20日]

5月19日

本日は、前泊の紀三井寺から紀ノ川を渡って岩出町までの田園地帯の25km。道中の殆どは、歩道が無い炎天下の車道をトボトボと歩くのみ。大型トラックやダンプカーに跳ね飛ばされそうになって命を縮めた。本日は特記事項無し。

海南市の藤白神社から那智山までが熊野古道の紀伊路の領域であるが、海南市から先(京都方面)には王子社は殆ど見掛けられなくなる。



(紀ノ川を渡って岩出町に入る。遠景の山は西国霊場巡礼古道が北に延びる和歌山県/大阪府県境の和泉山脈)

岩出町付近にはホテルが無い。やっと見つけたがここはNG。

岩出町「ホテルいとう」2食付8,860円。大きなホテルで部屋は良かったが、例のChinese観光団が多くて喧しく、また、2食付の飯の内容も最低のレベルであった。

5月20日

岩出町から4時間ほど田園地帯を歩いて第三番札所「粉河寺」に着いた。今日もかなり道に迷ったが、粉河寺は古刹らしく諸処に次ページのような標石があつて助かった。

粉河寺は、鎌倉時代には4km²の広大な境内に七堂の伽藍と五百を超える坊舎が立ち並ぶ栄華を誇ったが、後の秀吉の紀州攻めで全山焼失、江戸時代になって紀州徳川家の手で復興されたという。

今でも広い境内に諸堂が立ち並び、本堂は西国33霊場では最大の建物と言われている。本尊は十一面千手観世音菩薩であるが、本堂の井戸の中に祀られた絶対秘仏のために、誰も未来永劫拝観することができないそうだ。お前立も秘仏で拝顔できなかった。

(右：いせ かうや、
左：こかわ寺へ
ぬけみち)



(豪壮大門)



(広い境内 桜の名所⇒)

この寺の山門にある仁王像は、一般的なお寺のそれが阿吽の憤怒像であるのに対して、憤怒を越えた理知的な顔をしておられた。珍しい仁王像と思うので、下に掲出しておく。



この寺の縁起は門前町の参道に順番に並べられている縁起解説板に掲出されていて、それらを楽しみながら見て歩くのも楽しいことであった。

縁起は、『粉河寺縁起』によれば大凡以下のようなものらしい。

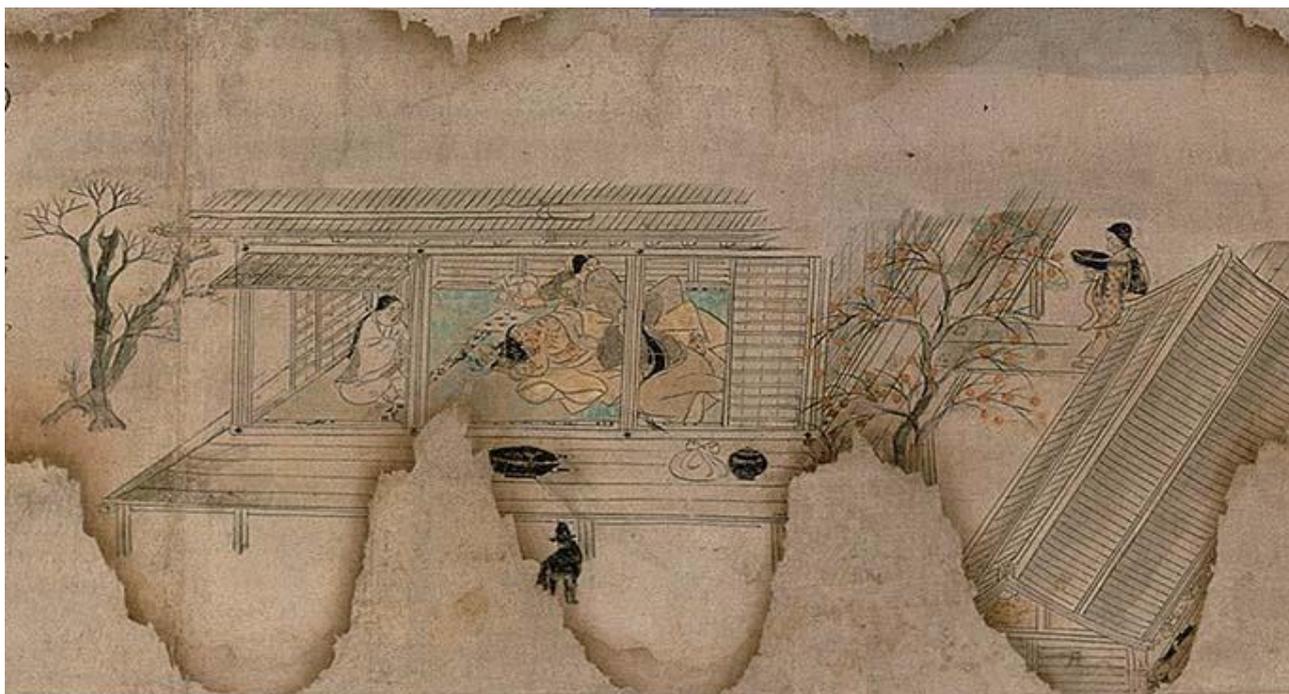
山中での狩猟中に光を放つ地を発見した或る獵師がそこに庵を構え、精舎建立と仏像安置を發願する。すると一人の童子の行者が現われて宿を乞い、その礼に仏像の建立を申し出る。行者は庵に入り、七日の内に仏像を作るのでその間は見えてはならない、完成したら戸を叩いて報せると告げ、庵に籠る。七日目に庵に行き扉を開けてみると、庵内には等身の千手観音立像が安置され、行者の姿は見えなかった。獵師は近隣にこのことを語り、人々はみな参拝して観音様に帰依していた。

或る時、大坂の長者の一人娘が悪臭を放つ皮膚病に侵され、祈禱を尽しても回復の兆しなく三年が過ぎたところへ、童子が現われて七日間の祈禱を申し出た。千手陀羅尼による加持祈禱によって娘の病いは快癒し、喜んだ父母は蔵の財宝を寄付しようとするが童子は断わり、娘が幼少より肌身離さなかった提鞞（小刀）と紅の袴のみを形見として受けとった。

在所を尋ねられた童子は、紀伊国那賀郡の粉河と答えて消えてしまう。次の春、長者一家は那賀郡に赴き粉河の地を尋ねるが知る人がいない。山の方にあるだろうと行ってみると、粉を入れたような白い流れを発見し、喜んで辿ると上流に庵を見出した。庵の扉を開けると輝く白檀の千手観音像が立っており、その施無畏印を結んだ手に、童子に喜捨した提鞞と袴が掛かっていた。長者一家は童子が千手観音の化身であったと知り、剃髪、出家した。獵師の一家は粉河寺の別当となって今に伝わるという。

余談であるが、この長者一族の末裔は今も東大阪市の名家の塩川家で、財務大臣を務めた塩爺こと塩川正十郎もこの名家の出身だそうで、山門には正十郎の父である正三がこの寺に寄進したことが刻まれている石碑が残っているそうだ。

その縁起絵巻の一部を下に掲げる。1枚目は、童子行者が病の娘に祈禱している場面、2枚目は快癒したお礼を言いに童子を探して娘と共に粉河へに出立する大坂の長者一家、3枚目は童子行者に化けていた千手観音を長者一家が拝んでいる場面である。観音菩薩の左手には長者が童子行者に与えた見覚えのある提鞞（小刀）、右手には紅の袴が掛かっている。





[第三番 風猛山 粉河寺]

粉河観音宗 本尊：千手千眼観世音菩薩 御真言：おん ばざら たらま きりく
創建：宝亀元年（770年） 御詠歌：父母の 恵みも深き 粉河寺 ほとけの誓ひ
たのもしの身や

参詣日：令和元年5月20日



さて、11日間を掛けて那智から粉河までの3札所を廻ったが、多少の功德はあったであろうか。距離から言えば、その1/4(250km/全1,000km)を廻った勘定になるが、札所の数から言えばやっと1/11(3札所/全33札所)で、仏縁や験が顕れるには未だ未だ修業が足りないというべきだろう。もっとも、般若湯に現^{うつ}を抜かして門前町の裏町の赤提灯にお布施を差し上げるだけでは、修行には全く程遠い。

粉河寺に詣でた後、この日はJR和歌山線と桜井線を乗り継いで奈良に出て、夕方には奈良の赤提灯で前述の岩さんと山さんの3人で山上の清談を行なうことができた。これも観音様の仏縁と思いたい。

これで、ひとまず紀州編の筆を置くが、第四番「槇尾山 施福寺」(大阪府和泉市)以降の行脚は、また時期を見て再開し、今年(令和元年)中には美濃の第三十三番「谷汲山 華嚴寺」で結願したいと願っている。

(以上、紀伊編 了)

第四番 槇尾山 施福寺 (大阪府和泉市)



(施福寺仁王門。ここから本堂まで石段の急坂が続く)

今年5月の第1回目の巡礼は、切りの良い紀伊の3札所（那智の青岸渡寺、和歌山市の紀三井寺、紀の川市の粉河寺）で打ち止めたので、秋になってからの第2回目は大阪和泉の第4番「施福寺」を出発点として摂津の第2番「総持寺」までの、河内、大和、近江、山城、丹波、摂津の順に21札所を2週間掛けて歩いた。

今回のスタートは第4番札所「施福寺」からであるが、紀伊の最後の札所・第3番「粉河寺」からの本来の巡礼古道沿いを辿るには再度和歌山市まで舞い戻って和歌山・大阪県境の和泉山脈を越えなければならぬので、これは横着をさせて頂いて施福寺がある大阪府和泉市から歩を進めることとした。

前泊を和泉市のJR阪和線・信太山駅前の温泉宿にしたので、千年も前に書かれた『枕草子』にある枕詞「森は信太の森」や「恋しくば尋ね来てみよ 和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」の信太の森を探索して中世説話“葛の葉狐”の悲哀と、そこに発生した安倍晴明生誕伝説の源郷をこの目で見てみたいと午後一杯を足を棒にして歩き廻った。

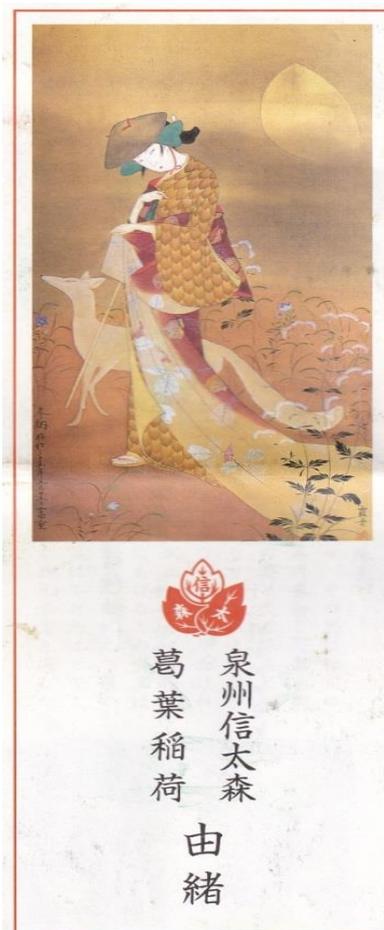
この項も施福寺仁王門を潜る辺りからの巡礼紀行で始めるのが尋常であろうが、少々横道に入って中世の日本文化の地下伏流に思いを馳せてみたいので、些かの道草をお許し願いたい。

新大阪駅から電車で小1時間のJR阪和線に前述の「信太山駅」というローカルな駅がある。大阪湾岸沿いの地帯は岸和田などの臨海工業地帯になっているが、一步内陸部へ入れば和歌山県境や奈良県境となっている和泉山脈や金剛山地に続くなだらかな丘陵地帯となっていて、かつての田園地帯の面影を今も残っていて何やらデジャビュ現象（今までに実際には見たことがないのに恰も過去に見たと感じる現象、既視感）のようなものを感じさせられた。マ、この和泉の辺りから大和や紀伊にかけては古代から中世にかけての我が邦の原郷であった訳だから、我々日本人の遺伝子細胞にこのような幻影がインプリントされていてもおかしくはなからう。マ、それはともかく・・・。

まずは、信太山駅から線路沿いに歩いて30分くらいの信太森葛葉稲荷神社に行ってみた。この稲荷神社は、信太森葛葉狐伝説発祥の地であるが、今は周辺からの住宅進出の波に押しやられて、往時にあったであろう“信太の森”は見る影も無く、どこにでもありそうな住宅地の中のお稲荷さんという風情であった。それでも、境内は何やら古色蒼然としていて往時の名社を偲ばせる雰囲気を感じられた。



(信太森葛葉稲荷)



信太葛葉狐の説話は、古浄瑠璃『しのだづま』、さらには安倍晴明伝説と結びついた歌舞伎『蘆屋道満大内鑑』の中の「葛の葉子別れの段」で古代から民衆に深く愛されてきたので今更解説する必要も無いが、粗筋は次のようなものである。

朱雀天皇の御代、現在の大阪市阿倍野の里に悪人の讒言に掛ってその所領を没収された安倍保名という落ちぶれた豪族が住んでいた。彼は家名を復興しようと霊験あらたかな信太森葛葉稲荷神社に日参していたところ、或る日狩人に追われて逃げ場を失った一匹の白狐が助けを求めた。彼はこの狐を草むらに隠して助けたが、狩人の暴行を受けて深手を負った。そこに一人の若い女が現れて彼の傷の手当てをして家まで駕籠で送ってくれて、数日後には家に訪ねてきて甲斐甲斐しく介抱し、やがて二人は夫婦となって子をもうけた。

その後、一家は家運も興隆し、童子丸と名付けた子供も5歳になって和やかに暮らしていた時、母親が縁側で子供を寝かしつけてから快い薫風に吹かれてうたた寝している時に、この母親は気の緩みからか化性の姿から本性の姿(信太の森で助けて貰った白狐、稲荷大明神の仮の姿とも眷属とも・・・)に戻ったところを子供に見られてしまい、その夜いよいよこの家を去る決心をするに及んで、母親の葛の葉は我が子の寝顔を見守りながら次のように我が子に語りかけたのであった。少し長くなるが、その情景描写が手に取るように読む人の心を打つので、「信太森葛葉稲荷神社由緒」からそのまま引用する。

「コレ、童子丸、今この母が申すことを寝耳にしかと聞き覚えよ。我はもと人間ならず。六年前信太の森にて狩人の悪右衛門のため狩り出され、死ぬる命を汝の父保名どのに助けられし狐ぞや。その恩に報いることもさりながら保名殿は信太の森大明神に信仰を為し、安倍家の再興を念じ給う故にその真心に感応ましまし、我は稲荷大明神の仰せを受け仮に女の姿と変じ保名どのと契りを結びそなたをもうけしは、安倍の家名を興さしめんためなり。それ夫婦親子の愛は愚痴なる畜生三界とて変わりないぞや。

せめてそなたが十になるまで居りたけれど、我が本性を見られし上はしばしも留まり難し。これから後は父上の言うことをよく聞いて手習い学問に精を出し、仁義の道を忘れずに成人せよ。そなたにあげるこの宝玉は大事にして肌身離さずに持たれば必ず役立つこともあるぞ」と童子丸の枕元に置いて立ち上がりましたが、今分かれてはいつの世にまた逢えるかと別離の涙にくれたことでした。せめて夫への形見に一筆書き残さんと口に筆を咥えて傍らの障子に書き残したのが、世に有名な下の一首です。

恋しくは尋ねきてみよ和泉なる
信太の森のうらみ葛の葉。

かくして葛の葉は「我が子よ、我が夫よさらば」と絞る悲痛な声と共に白狐の姿と変じて行方も知れず飛び去ったのです。

(以上、「信太森葛葉稲荷神社由緒」から転載)。



以上が、葛葉狐の説話である。この子・童子丸は長じて陰陽道の統領・安倍晴明となったとされるが、これは葛葉狐の説話が後世に安倍晴明伝説と結びつけられていった結果であった。この葛葉稲荷がある和泉市にお住まいで、また近くにある桃山学院大学学長であった比較文化論・社会思想史専攻の沖浦和光先生(2015年没)によれば、この信太妻の故地である信太の森のすぐ傍には、かつては旧南王子村と言う由緒ある古い被差別部落があって、そこには春駒などの門付芸や大道芸、説教節などで街道筋を流し歩いていた下級賤民の旅芸人が住んでいて、彼らの“語り”がこの葛葉狐と陰陽道&安倍晴明伝説を結び付けて膨らまし、それを各地に伝播していったのであろうと推論しておられる。

旧南王子村の辺りや、同じく葛葉狐伝承が残る聖神社や安倍保名・童子丸父子が我が妻・我が母親であった白狐に逢いに行ったという聖神社の鏡池付近を歩いて見ると、沖浦先生のこの説がナルホドと頷ける雰囲気を感じられた。



(父子が我が妻・我が母の白狐に逢わんと通った聖神社の鏡池。右奥の白い建物は「信太の森ふるさと館」)

信太の森の鏡池 (平成九年三月三十一日指定)

信太の森は「枕草子」(能因本)に「もりは信太の森」と記されるなど、平安の昔から我が国の代表的な森の一つとして知られ、多くの和歌に詠まれました。中世以後は「葛の葉伝説」の舞台として地域の人びとに語り継がれ、演劇・文芸などを通じ、有名になりました。

伝説では、安倍保名が病の妻(葛の葉)の全快と、子宝を願って信太大明神(聖神社)に参籠した際、池の水面に白狐の姿が映ったので不思議に思い、ふり返って見たところ、一匹のねずみが狛師に追われ、坂を駆けおりて来るのが見えました(この坂をねずみ坂といいます)。

保名はかわいそうに思い、ねずみを袖に隠して逃がしてやりましたが、実はこのねずみ、負傷した白狐が逃げるために姿を変えていたものでした。助けもなかった白狐はその後、信太大明神の使いとして、病のため里にもどっていた葛の葉の姿で保名を尋ね、元氣な子を授かると、そのまま一緒に暮らしました。

そして数年後、白狐は我が子に正体を知られてしまい、

恋しくば 尋ね来てみよ 和泉なる
信太の森の うらみ葛の葉

と歌を一首残して姿を消してしまいました。

保名は童子と信太の森をたずね、池の水面に映る葛の葉と最後の別れを惜しまし、以来、この池は鏡池とよばれるようになり、保名とともに訪れた童子はその後、立派に成長し、陰陽師の祖、天文博士として知られた安倍晴明になったと語られています。

鏡池は「葛の葉伝説」のなかで、白狐と保名の出会いの場として、また童子との「子別れ」の舞台として伝えられてきました。

ちなみに池は聖神社の神域にあり、「手洗池」ともよばれていましたが、これはかつて神社で神事を行う際に身を清める神聖な池であったところから来ています。

「信太の森の鏡池」は、「葛の葉伝説」の舞台であるとともに、宗教儀式のうえからも文化的、歴史的に貴重な文化財であることから、平成九年、市史跡に指定されました。



「信太の杜」 藤原重夫



「芦屋道満大内鑑」 三代歌川国貞

(鏡池に立てられていた説明板。伝承は前述の信太森葛葉稲荷神社由緒とは異なっているが、これが伝承というもの)

また、聖神社の鬱蒼と茂った森の奥には信太明神を祀る古い摂社があって、折からの夕暮れ時の所為もあって幽玄な雰囲気漂わせていて、如何にも稲荷明神の眷属である白狐が現れるような気がした。

実は、枕の草子に書かれている有名な句「森は信太の森」というのは、前述の信太森葛葉稲荷神社の森ではなく、こちらの聖神社の森を指しているというのが沖浦先生の説である。この摂社は時の流れに取り残されてもはや訪れる人も無い場所にあった。

長い年月風雨に曝された二匹の狛犬(狐)は、その顔相も分からないくらいに風化してしまっていたが、葛葉伝説ができる遥か前からこの場所に座っていたのであろう。

鏡池や聖神社を訪れた序に、鏡池の傍にあった「信太の森ふるさと館」に寄ってみた。館長らしき男性と学芸員らしき女性の二人が守をしていたが、何様不便な場所であるから他に訪問者も居らず、和泉地方の民俗や伝承を風土記や史書などを挙げながら親切に説明して下さった。マ、係員の暇つぶしの良い鴨だったのかも知れないが、このような地元とのコミュニケーションが歩き巡礼にだけ許された仏縁というものでもあろうか……。

和泉地方には、大坂から熊野に続く熊野街道が通っていて、かつて悪党の為に餓鬼阿弥に落とされた小栗判官が土車に乗せられ照手姫に牽かれて熊野・湯ノ峰まで突ッ走った道であるので、



(聖神社の奥にある信太明神を祀る摂社)



(小栗地蔵)

路傍には諸処に小栗地蔵堂が祀られていた。この道を小栗街道と呼ぶ。また、この道は河内と大和を結ぶ我が国最古の国道で「竹内街道」とも呼ばれている古道でもある。竹内街道には至る所に往時の地蔵堂や古い石碑、石仏などが建っていて、往時の面影を偲ぶことができる。

このようにして、沖浦和光博士の辿られた民衆文化伝播の道の極く一部を歩いてみたのであるが、これはこれで非日常的な匂いに満ちた素晴らしい“路”であった。

ご参考までに、被差別部落の民俗と芸能や陰陽師の発生との関係などに興味を持たれた方は下記の書籍をご参照願いたい。

◎ 沖浦和光著「陰陽師の原像—民衆文化の辺境を歩く」岩波書店

◎ 々 「日本民衆文化の原郷—被差別部落の民俗と芸能」文春文庫

話は飛ぶが、和泉地方はダンジリが盛んな地方で、丁度ダンジリ秋祭りの最中であつた。路傍には各集落のダンジリが出されていて、笛や太鼓の練習中の音が祭りムードを掻き立てていた。



本日は歩き疲れたので、久しぶりにホルモン屋に入って胃にエネルギーを補給してやった。

JR 阪和線信太山駅前「弥生の里温泉」泊。

さて、道草が長くなってしまったが、本題に移ろう。

西国観音霊場札所第4番「施福寺」は、和泉市街地から槇尾川沿いに和泉山脈に登って行き、標高600mの槇尾山の山頂直下の標高500mの中腹に建っている。和泉平野を離れると途中には集落や民家は全く無い山中となり、ウネウネとした車道の終点に寺の宿泊会館と古びた土産物



屋の2軒があるだけの淋しい所であつた。そこからが急坂の参道となり、冒頭に掲げた仁王門からは更に急な石段の山道が続いていて、腰痛持ちの身には些か堪えた。途中で立ち止まり立ち止まりしながら

登ったので、仁王門からでも小1時間掛った。この寺は標高が高い場所にある山奥の寺だから、昔から西国観音巡礼 33 札所の中でも難所の一つと言われていたところである。

参道の途中には、弘法大師御剃髮所という御堂もあった。



本堂は山腹の僅かな平地に建てられていた。平地の余裕が無い為か、他の堂宇は無かった。この寺では本尊・阿弥陀如来坐像、札所本尊・十一面千手千眼観世音菩薩はじめ本堂の金色に輝く眩しいばかりの諸仏、馬頭観世音菩薩などの後堂の諸仏も全て常時公開されているのが誠に結構なことであった。

他の札所ではどこでも本尊は秘仏と称して平生は公開せず、中には 100 年に一回だけしか開帳しないというような寺もある。文化財を破損などから守るために常に公開するのは困難なことは理解できるが、せめて観音様ご縁日の毎月 18 日だけでも公開されたら如何であろうか。或いは、国宝などに指定されている仏像などは東京や京都や奈良の博物館に寄託して一般に公開して頂くという手もあろう。

マ、歴史小説家の杉本苑子が「西国巡拝記」に書いているように、寺院の価値は壮大な伽藍や国宝の多寡や寺格、由緒によって決まるのではなく、そこの住職が如何に仏法に帰依し庶民の幸福を願っているかに依ると言うことであろう。

その一例。京都府亀岡市にある西国 21 番札所「穴太寺」の老師は、その寺の寺宝である「釈迦涅槃像」などを文化財として登録して貰うように申請したら如何かという学者などの提案に対して、“寝釈迦像は、病気の参詣者が悪い箇所を撫でると快癒するという信仰があって、重文などに指定されれば信者に撫でて頂くこともできなくなるから、誰でもいつでも触れるように今のままにしておくのがお釈迦様の本意であろうと言っておられるが、けだし名言・名僧であろう。

名僧の心意気をもう一例。盲人救済に心を尽くし盲人養老院を提供しておられる奈良県壺坂寺の老師は現在の仏教界の華やかな風潮や仏教者の虚飾に触れて「釈尊がどんなに立派でも、その教えを实践、広通すべき我々僧侶が悪ければ釈尊の教えは消えてしまいます。仏の心、仏の言葉を殺しているのは誰でもない、坊主自身です。伽藍仏教の時代は去りました。美術的にどれほど価値のある仏像を擁し、千年の古刹に反り返っていても“魂”がなければ見世物にすぎません」(前記の杉本苑子本による)。

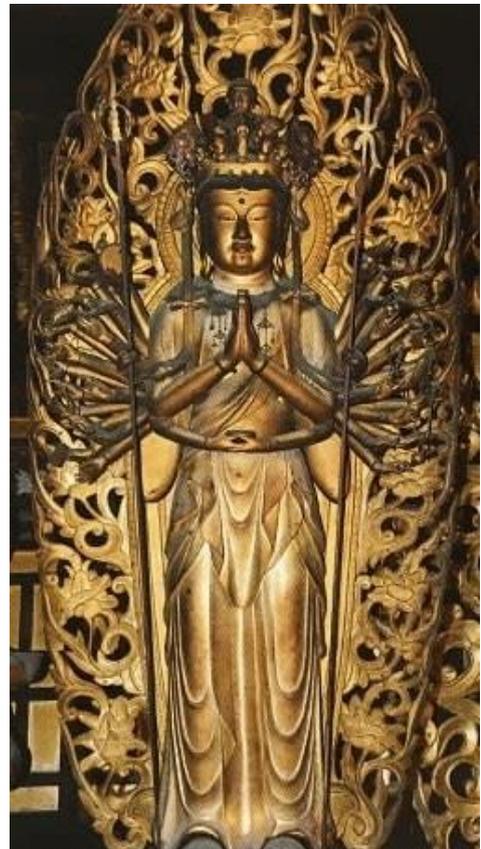
余談はさておき、上述の施福寺の後堂に祀られている馬頭観音には次のような言い伝えがある。西国観音巡礼の中興の祖・花山法皇がこの寺に行脚した折、余りの山深さから道を失ってしまって途方に暮れていた時に、馬の嘶きが聞こえて来たのでその方向に歩を進めてこの寺に無事辿り着くことができた。そこでお礼にこの馬頭観音を喜捨したと伝えられている。

本堂内陣の諸仏は撮影禁止となっている寺院が殆どであるが、この馬頭観世音菩薩は花山法皇の由緒高い仏像であるので、撮影をお許し願うべく、“私は午年で深く馬頭観音に帰依しているので、何とか撮影をお許しい頂けないものだろうか”と納札所に居られた係の人をお願いしてみたところ、菅笠・白衣・杖の姿をお認めになったのか、いとも簡単に「こんな山奥までご参詣お疲れ様です。ご自由にどうぞ」という有り難いお言葉。やはり山奥にある鄙の寺は違うナア・・・。

序に内陣のご本尊も撮影したかったが、これはさすがに手が出なかった(下右はどこかのHPから引用)。



(後堂安置の馬頭観世音菩薩)



(札所本尊：十一面千手千眼観世音菩薩)



(左：観音札所本尊十一面千手千眼観世音菩薩、中央：本尊阿弥陀如来。どこかのHPから引用)

次の第5番札所「葛井寺」へは、本来の西国古道である滝畑ダム、河内長野経由の道を辿った。境内からすぐに往路とは反対側の山道を下るのであるが、途中の杉林の巨木が昨年のおお阪台風の被害で何十本と根こそぎ倒木となって山道を塞いでいた。この倒木の下を這い潜ったり、跨ぎ登って越えたりする障害物競走で全身疲労困憊、ダムの下から葛井寺の門前町・藤井寺市の中心街まで飛天の術を使わせて頂いた。

藤井寺市では葛井寺指定の巡礼旅籠「千成屋」に泊まり、夜巡礼は地元で大人気だという駅前立ち呑みスタンド「谷酒店スタンド」に行った。吉田類のTV番組「酒場放浪記」で見た店である。酒の種類も沢山置いてあり、肴もリーズナブルな値段の割には凝った料理でなかなか風情のある粋な店であったが、腰痛の身には立ち呑みの姿勢はキツかった。



【第四番 槇尾山 施福寺】

天台宗 本尊：十一面千手千眼観世音菩薩

御真言：おん ばざら たらま きりく

創建：欽明天皇時代（6世紀）

御詠歌：深山路や 檜原松原 わけゆけば

巻の尾寺に 駒ぞいさめる



参詣日：令和元年9月30日

第五番 紫雲山 ^{ふじいでら} 葛井寺 (大阪府藤井寺市)



(豪壮な南大門)

前夜泊まった藤井寺駅前の旅館からは、葛井寺は門前町の商店街を抜けてものの10分も掛からない街中にあった。境内には南大門（山門）、西門（四脚門）、東門などがあり、付近の住民が自由に通行できるようなっているのので、駅まで歩く通勤者や生徒などが境内を横切ったり、散歩や買い物途上の老人がサンダル履きでちょっと線香を供えたりという実に庶民的な雰囲気の寺であった。

観光寺院は人出の喧噪で喧しく、また、塀や門で囲まれた格式ばった寺は肩が凝るが、このような庶民が自由に出入りしているお寺は長閑で和やかで寛げる。そもそもお寺というものは、貴賤貧富を問わず誰もが心和やかに過せたり仏様に僅かなお願いごとをしたり、住職に何かを教わったり、また子供が寺子屋で勉強したりなどという場所であった筈である。

さて、この葛井寺は、当地に帰化した百濟からの渡来人葛井一族が7世紀に建立した寺であるが、平安時代に一時荒廃していた寺を藤井氏という豪族が再興したので藤井寺とも呼ばれる。伊勢物語の色男・在原業平が天子の勅命を受けて境内に奥之院を造営して参籠したとも言い伝えられているが、その奥之院は明応年間に兵火で焼失して今は残っていない。

(本堂⇒)



この寺の本尊は十一面千手千眼観世音菩薩である。

日本最古の十一面千手千眼観音像で国宝。千手千眼といっても、通例は実際の手は多くても42本しか

ないが、此処の千手千眼観音は本当に千本の手がある（正確には 1043 本）天平彫刻の傑作だそうなの。全ての掌には慈しみに満ちた筆致で目が描かれている。秘仏の国宝でありながら毎月一回観音祀日の 18 日にご開帳されるそうで、これも誠に結構なことである。残念ながら今回はご開帳の日ではなかったので、お寺の HP でそのお姿を拝ませて頂いた。優しくてしかも智慧に富んだお顔立ちであった。こういう仏像を観ていると、信仰心皆無の小生如き輩でも、心の中に何らかの変化が起こるようで、心が穏やかになってくるのを覚ゆるから不思議なものである。



(手が本当に 1043 本ある葛井寺本尊「十一面千手千眼観世音菩薩、天平時代」)

さて、藤井寺市一帯には古墳が沢山あって、最近世界遺産に登録された。古墳以外にもいにしへのロマン、謎、神秘が詰まった地域である。それで、次の札所への途次この辺りでは一番大きいと言われている応神天皇陵や古い修羅（岩石などの運搬道具）が復元・展示されている道明寺天満宮などに立ち寄ってみた。途中には修羅をモチーフデザインにした生涯学習センター・アイセルシュラホールという斬新なデザインの建物もあった。（下写真 左：古市古墳群、左の大きな古墳が応神天皇陵。 右：同遥拝所）





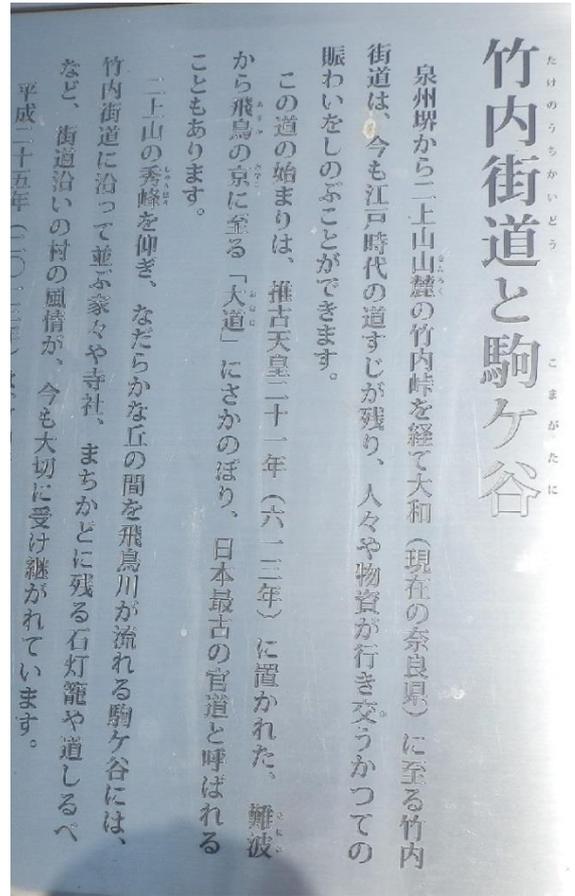
(↑復元された修羅、同説明板)

(↓修羅をモチーフにした斬新な建物)

藤井寺からは竹内街道を歩いて奈良県に入った。
竹内街道は河内から大和に至るいにしへの道で、随所に
里程標、地藏尊、石仏などの名残があった。

大阪・奈良県境の竹内峠を越えればこの竹内街道は大
阪府太子町から奈良県の當麻町に入る。





途中の当麻寺に寄ったりして、この夜は葛城山の中腹にある「かつらぎの森」に泊まった。かつての奈良県社会教育センターの宿泊施設であり今は民営のリゾートホテルになっている。部屋、料理、応対ともよろしかった。(↓かつらぎの森)



【第五番 紫雲山 葛井寺】

真言宗御室派 本尊：十一面千手千眼観世音菩薩

真言：おん ばざら たらま きりく 創建：神亀2年（725年）

御詠歌：参るより 頼みをかくる葛井寺 花のうてなに 紫の雲

参詣日：令和元年10月1日



第六番 壺坂山 南法華寺 (奈良県高取町)



(天竺渡来大釈迦如来坐像。お前立は左より普賢菩薩、十一面千手観世音菩薩、文殊菩薩)

第六番札所「壺坂山 南法華寺」は通称壺坂寺と呼ばれている。お里・澤市の盲人伝承を戯曲化した浄瑠璃「壺坂靈驗記」によって壺坂寺の名前は全国津々浦々に知られたが、今でも境内に盲人養老院「慈母園」を備えて盲人救済に一山の総力を結集されている。この慈母園への入所資格は、全盲であること、60歳以上であること、身寄りの無いこと、貧者であることだそうで、この養老院の庭には盲人に残された嗅覚、聴覚、触覚の三感を生かして楽しんで貰えるように“匂いの花園”という花の庭園も設えられているようだ。

このような貧者の一灯の精神は盲人救済事業だけでなく、インドでのハンセン病患者救済にも尽力され、その縁で天竺渡来の大石像が幾つも祀られている（この寺の貧者の一灯の精神についてはP. 59 参照）。

冒頭に掲げた写真はこの内の高さ10メートルの「大釈迦如来坐像」である。その他にも、インドの石工延べ7万人によって刻まれ66ヶに分割されて海を渡って運ばれて来た「大観音石像」（高さ20メートル、重量1,200トン、右写真）、長さ8メートルの釈迦大涅槃像、石工5万7千人によって高さ3メートル、幅50メートル、重さ300トンの石壁に刻まれた釈迦一代記「仏伝図レリーフ」、お里・澤市の靈驗を記念した夫婦観音像、インド・アジャンタ石窟寺院をモデルとし延べ12万人の日本・インドの人々によって彫刻、組み



立てられた総重量1,500トンにおよぶ壮大な大石堂など、インドで彫刻され運搬されてきた石像が祀られている。いわば印度伝来の石仏だらけのお寺であった。



(釈迦・大涅槃像、後方は大観音石像)



(仏伝レリーフ石壁)



(印度渡来大石堂)



(同 仏舎利塔)



(同 内部の仏像 ↑ →)





(大観音石像、右隣は大石堂、奥最左が八角堂本堂)



(八角堂本堂の本尊、十一面千手千眼観世音菩薩)

さて、壺坂寺は、前夜泊まった奈良県新庄町のホテル「かつらぎの森」から葛城山を背にして御所市（ごせし）、高取町などの田園地帯を6時間ほど歩いた山中にあった。

特に壺坂山駅の先の清水谷集落を過ぎれば、それから先には集落は全く無くなり、ウネウネと登って行く急坂の林道を1時間、出遭う人も車も通らない淋しい山中の道で、この先に本当にかの有名な壺坂寺があるのか、或いは道を間違えてとんでも無い山中に迷い込んで来たのではないかとかなり不安になってきた頃、少しの平地が現れて、これが寺の入り口だった。



(境内の盲人養老院「慈母園」)



(このような深い谷のドンツマリに壺坂寺はあった。
遥か後方に霞んでいるのは高取の町並)



(寺の入り口、左の建物は盲人養老院)

帰途は、高取町から明日香村に入ってキトラ古墳や高松塚古墳が散在している山中の径や農道を辿ったが、本日の宿泊地である明日香村の「岡寺」門前町への方向が全く分からず、道を聞くにも人っ子一人歩いておらず、また、たまに往き合う車に手を振って停めて貰って聞こうとしても、どの車も停まってくれなかった。それもその筈、夕暮れ時に独りで荷を担いでトボトボと歩いている輩は、マ、泥棒か追剥であろうから、おいそれと停まってくれる筈もなかろう。道を間違えながらやっと宿に辿り着いた時には日はとっぷりと暮れて真っ暗な闇夜になっていた。

本日の宿は、第7番札所「岡寺」門前の民宿「若葉」。食事は豊富ではなかったが、応対は非常に良かった。屋外の庭で飼っている烏骨鶏の卵が自慢で、その目玉焼きが美味かった。

【第六番 壺坂山 南法華寺】

真言宗 本尊：十一面千手千眼観世音菩薩 真言：おん ばざら たらま きりく

創建：大宝3年（703年）

御詠歌：岩をたて 水をたたえて 壺坂の 庭の砂^{いさご}も 浄土なるらん

参詣日：令和元年10月2日



第七番 東光山 龍蓋寺（岡寺） （奈良県明日香村）



（三重宝塔）

札所第七番は「岡寺」として知られているが、古くは龍蓋寺という古刹である。天智天皇2年（663年）の創建。飛鳥宮を見下す小高い山の中腹に建っている。天武天皇の御子・草壁の皇子の屋敷に造られた寺だということから由緒正しい寺であろう。現在は次の第八番札所「長谷寺」の末寺となっている。

昨晚はこの寺の門前の民宿に泊まったが、部屋から上に掲げた三重宝塔のライトアップが良く見えた。さて、「岡寺」という寺号は飛鳥の丘（岡）にあるので古来より「岡寺」と呼ばれてきたが、「龍蓋寺」というのはどのような謂れがあるのでしょうか？

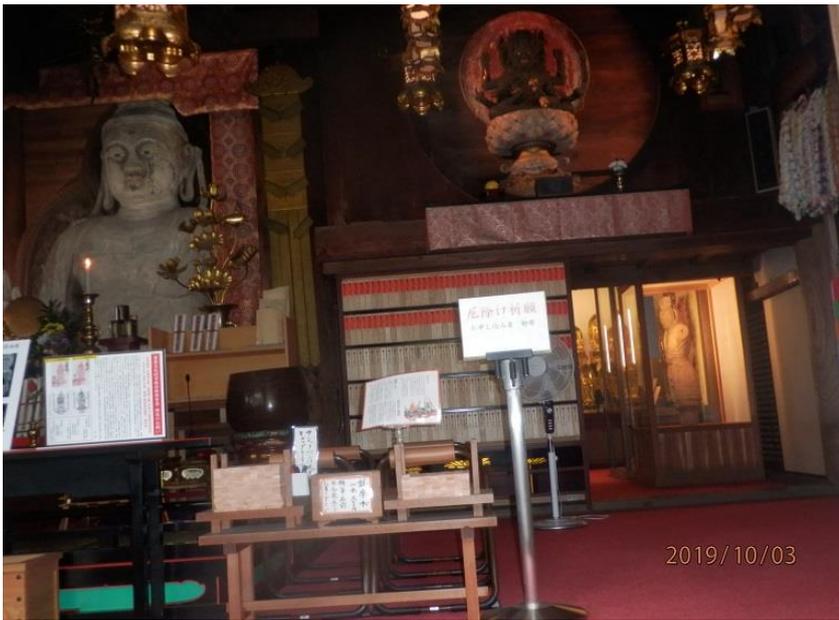
寺伝によれば、飛鳥の地を暴れ回っていた龍をこの寺の開祖・淵僧正という僧が法力を以って池の中に封じ込め、その上に石の蓋をしたことから、この龍は改心して旱魃の折には雨を降らしたという。



（←義淵僧正、龍を封じ込める。↑封じ込めた池「龍蓋池」）

また、この寺のご本尊は塑像では本邦最大の如意輪観世音菩薩（座高 4.85m）で、日本三大仏の一つに数えられている（他の二仏は、東大寺の大仏、長谷寺の十一面観世音菩薩 10m の巨像）。如意輪観世音菩薩は普通は六臂（6本の手）を持つが、ここの如意輪観音は二臂という非常に珍しい仏像だそう。

寺伝によれば、弘法大師が印度、中国、日本の土砂を捏ね合せて造ったのだとか・・・。



(本堂内陣。左本尊：如意輪観世音菩薩、右脇侍：不動明王。許可を得て撮影) (本尊：如意輪観世音菩薩。同寺 HP より)

さて、本日は石舞台、高松塚、キトラ古墳など飛鳥文化の詰まった地を歩き、更に次の札所「第八番・長谷寺」まで足を延ばす予定なので、岡寺のお寺参りはこの辺で早々に失礼して、午前中は上記の史跡を廻ってみた。長閑な山あいには広がっている田園地帯はかつての飛鳥の宮の匂いがしてくるようだった。

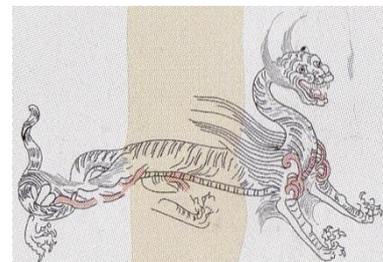


(石舞台古墳。このような巨石を
どうやって運んだのか?)

(高松塚古墳壁画「女子群像」、高松塚古墳壁画館⇒)



キトラ古墳は、石室内の四周に天の四方を司る四神（青龍、朱雀、白虎、玄武）が全て揃って残っている本邦唯一の古墳である。丁度この時にはキトラ古墳四神館で壁画特別公開がなされていて、西壁の「白虎」の現物を見ることができた。1300年間も地中に埋まっていた壁画がこのように明瞭に復元された文化財復元技術もさることながら、いつの時代にも大した絵師がいるものだ。



（天の西を司る西壁の白虎、キトラ古墳四神館所蔵。文化庁奈良文化財研究所パンフレットより引用）



（高松塚古墳）



（キトラ古墳）

さて、次の経由地桜井市に向かって歩いていたら、奈良県立万葉文化館という所で「棟方志功・福光時代」特別展が開催されていた。志功は言うまでも無く版画（板画）の大御所であるが、志功の常設展示館は鎌倉の記念板画館が閉館されてからは志功の出身地である青森県弘前にしか無く普段は滅多に観られないので、志功ファンである小生は嬉しくなって飛んで行った。道草である。



棟方志功と明日香村は何の縁も無いが、志功と親交が深かった文芸評論家・保田與重郎が隣町の奈良県桜井市出身の縁で開催されたとのこと。“福光時代”というのは、志功が富山県福光町に7年間ほど疎開していた頃のことで、この疎開時代に著名な「釈迦十大弟子」などの作品が製作されている。

また、画集などでは見たが実物は見たことが無かった仏画「二河白道図」も福光時代に製作されているので、これも展示してあるかと期待したが、これは残念ながら展示されていなかった。



(棟方志功板 御二河白道図)

さて、ここで1時間半ばかり芸術鑑賞？に浸った後、次の第8番札所「長谷寺」に閉門ギリギリに辿り着いた。長谷寺は次項に記す。

本日の宿：長谷寺門前「大和屋」(応対、食事共、良)

【第七番 東光山 龍蓋寺】

真言宗豊山派 本尊：如意輪観世音菩薩 真言：おん ばらだ はんどめい うん

御詠歌：けさ見れば つゆ岡寺の 庭の苔 さながら瑠璃の 光なりけれ

参詣日：令和元年10月3日



第八番 豊山 長谷寺 (奈良県桜井市)



(舞台付懸崖造りの本堂、東大寺の大仏殿に次ぐ大きさ)

この寺には明日香村から歩いて来て夕刻の閉門ギリギリに入山したので、ゆっくり観る時間が無かった。従って、仁王門から本堂に掛け渡されている長い登廊と、本堂の広い礼堂（外陣）の奥のそのまた奥の内陣の奥の暗がりにはっきりと安置されていた御本尊十一面観世音菩薩の金箔の輝きくらいしか印象に残っていない。本尊は高さ10メートル、樟一本彫り、木造仏としては本邦最大級で、日本三大仏の一つに数えられていることは札所第7番「岡寺」の項でも触れた（P.70）。

この寺は日本全国に末寺3000を誇る大寺だそうであるが、なるほど境内も広くて豪壮であった。



(磨き抜かれた礼堂。大きな外陣に大香炉が一つ置かれただけの静謐さ。その奥の内陣に金色に輝いているのが本尊)



(本尊：十一面観世音菩薩、同寺HPより)



(仁王門から本堂に続く 399 段の登廊。釣灯笼が趣深い
(広大な境内⇒)



(仁王門)



【第八番 豊山 長谷寺】

真言宗豊山派総本山 本尊：十一面観世音菩薩 真言：おん まか きゃろにきや そわか
御詠歌：いくたびも 参る心は はゆせ寺 山も誓いも 深き谷川

参詣日：令和元年 10 月 3 日



さて、長谷寺に詣でた翌日は、「山の辺の道」を奈良まで歩いた。

三輪山の麓を通る長閑な地道であった。途中には、往時の山の辺の道の往来の隆盛の跡を残す海柘榴市跡、金屋の石仏、三輪大明神や大神神社、崇神天皇陵などが点在する歴史の道であった。以下の写真で少しでもその雰囲気を感じて頂ければ幸甚である。





(金屋の石仏)



(三輪大明神)



おおみわ
(大神神社)



(大神神社から奈良市街)



(崇神天皇陵)

この夜は奈良に泊まって、会社で同僚だった関西在住の岩橋さん、松岡さん、山下さんと近鉄学園駅前の酒亭で一献傾けて、楽しかった。

宿泊：JR 奈良駅前「スーパーホテル JR 奈良駅前・三条通り」

第九番 興福寺 南円堂 (奈良市)



第九番札所は、奈良興福寺全山ではなくその中の一つの御堂である「南円堂」だけとなっている。興福寺全体が札所になっていないことが不思議といえば不思議であるが、興福寺は北嶺の比叡山延暦寺と並ぶ南都の僧兵の根拠地であったから、戦闘集団には関係したくない貴人や庶民の観音巡礼の肌合いには馴染まなかったのかもしれない。朝廷鎮護という特権を振り回して暴れ回った北嶺・比叡山の僧兵に対して、時の権力者藤原一族を後ろ楯とする南都・興福寺の僧兵も乱暴狼藉を繰り返した同類で、この二寺が僧兵の双璧であった。往時の興福寺には数千人の僧が居たと言われるがその殆どは学僧ではなく、錫杖と白衣を薙刀と鎧に持ち替えたゴロツキ集団であった。

広大な境内、豪壮な伽藍建築群、国宝級の多数の仏像を沢山所有している興福寺という古刹が、或いは仏法を隠れ蓑にした藤原一族やそれを取り巻くイカサマ暴力団の根拠地であったのかも知れない。

往時は藤原氏の勢力傘下の下、大和一円を所領する法相宗大本山の大本山であったが、今は法相宗のお寺はこの興福寺一つだけになっていることも、何となく胡散臭い感じがしないでもない。

マ、それはさて置き・・・。

ここを訪れた日が偶々土曜日であったせいか、境内は多くの観光客で溢れていた。^{くだん}件の中国人の観光ツアー団や、バスツアーの観光客も沢山居て古刹という情緒はなく、おちおち拝んでいられる雰囲気でもなかった。

それはさて置き、この南円堂の本尊は西国 33 観音霊場札所では唯一の不空羂索観音である。運慶・康慶父子の作で大変に厳かな国宝仏であるらしいが、南円堂は固く閉じられていてそのお姿に接することはできなかった。マ、これもこの寺の“大寺”の性格の延長線上かもしれないが、



(南円堂・不空羂索観音 パンプより)

札所である南円堂も固く閉じられていて拝観もできず、納経所もほんのご朱印行列スタンプ事務所という雰囲気です。西国観音霊場札所としては、取り付くシマも無かった。何の為に態々観音巡礼に廻って来たのかと些か落胆した。これほど多くの国宝・重文の建造物や仏像を蔵している寺院であるから、その慈悲をもっと民に分け与えられるような仏法をお考えになったら如何であろうか。

ちょっと悪口が過ぎたかも知れないので、お口直しに伽藍の情景や興福寺国宝館の仏像でも……。



(最近再建された中金堂)



(東金堂と有名な五重塔、何れも国宝)



(南円堂と対の北円堂 国宝)



(国宝館 諸仏)



(五重塔 国宝)

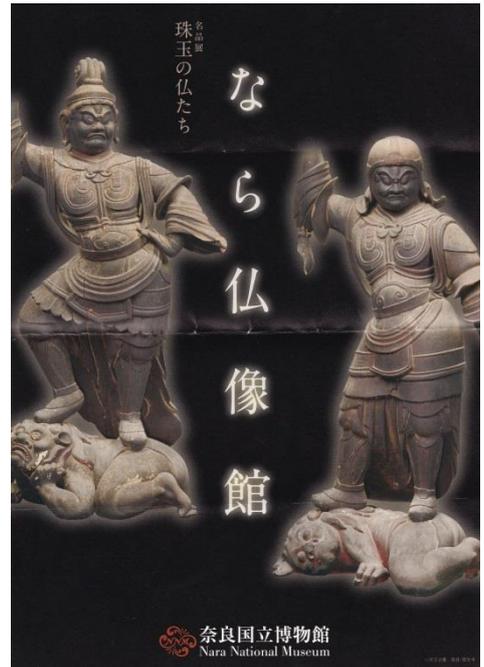


(左より、阿修羅、銅造仏頭、迦楼羅像)

折角奈良に来たのだからと、興福寺国宝館を見た後お隣にある奈良国立博物館の奈良仏像館を見学した。名品展「珠玉の仏たち」が開催されていて沢山の仏像が展示されていた。照明を落としてある薄暗い部屋で仏像を観たり、暗くて小さくて読みづらい説明板を眼を細めて読んだりで頭が痛くなってきた。これだけ沢山の仏様が次々と出て来ると、芸術心も信仰心も皆無の輩にはちょっと手に負えなくなった。



(奈良国立博物館)



南円堂の次は、第10番札所「三室戸寺」がある宇治に向かった。

【第九番 興福寺 南円堂】

法相宗 本尊：不空羂索観世音菩薩

真言：オン・ハンドマダラ・アボキヤジャヤニ・ソロソロ・ソワカ

創建：光仁4年（813年）

御詠歌：春の日は 南円堂に かがやきて 三笠の山に 晴るるうす雲



第十番 明星山 三室戸寺 (京都府宇治市)



今は第十番札所となっているこの宇治の三室戸寺は、かつて西国観音霊場巡礼の大部分が未だ畿内の人々で占められていた頃、長谷寺を一番札所として紀伊、播磨、丹後、丹波、美濃などの畿内から遠いところを先に回った後に大和や京に戻って来て最後の結願をこの三室戸寺で行うのが当時の札所順礼の順番であった。余談であるが、当時の一番の札所が長谷寺であるのは西国観音霊場中興の祖とされる徳道上人がこの長谷寺の本尊・十一面観世音菩薩を造立した縁からであるが、結願寺が何故三室戸寺であるのかはハッキリしない。

西国巡礼が、伊勢参りと併せた関東勢がメインになってくると、足の便から伊勢参りを終えた後の那智の青岸渡寺を一番として畿内を廻り、最後に江戸に帰る道筋に当る美濃の華厳寺で結願するという順礼の順番に変わって現在に至っている訳である。

話がちょっと横に逸れた。この三室戸寺は、宇治の中心街から宇治川を宇治橋で渡って小1時間ほど歩いた山際のドン詰まりにあった。5000坪の池泉回遊式庭園を併せた境内は広大なもので、広い芝地の奥に造営されている本堂は正面に唐破風の屋根を付けてのびやかな風格を感じさせた。

創建の由緒には、山中の岩淵の滝壺に何か光っているモノがあって、これを取り上げてみたところ僅か八寸の千手観世音菩薩であったそうで、この観音様を本尊として祀り、勅封によって33年に一度だけ開帳する秘仏とされた。

平安時代には山上・山下に多くの伽藍が建ち並び、観音霊場として篤く信仰された大寺であったそうだが、今回参った折にはご近所の方が一人二人散歩されているだけの静謐さであった。



(正面に唐破風屋根を付けた本堂)

さて。この寺からの帰りに宇治橋界隈を歩いてみた。折角だから何回目かの平等院にも寄ってみた。ここでも件の中国人ツアーが多かった。

宇治橋の袂には放生院（橋寺）という小さな寺があり、大化2年（646年）初めて宇治橋が架けられた経緯を刻んだ石碑の断片がこの寺から出土したそうで、その石碑は格調高い六朝風の名文で刻まれていて、本邦最古の石碑とのことなので興味を示して寄ってみた。宇治橋断碑という。断碑というのは折れた石碑の断片という意味だそうだ。断碑は鞘堂に納められていて、観覧料大枚300両を払って鞘堂の鍵を開けて貰い拝謁する仕掛になっていたが、碑の上には更にもう一つの小さい板の箱が被せてあって、碑自身は何も見えなかった。マ、見えたとしても格調高い六朝文字はその方面に全く学の無い小生には読める筈は無いので、どちらにしてもどうということはないのであるが・・・。



(宇治橋断碑の鞘堂)

寺から頂いた説明書（下）によれば、この石碑に刻まれている内容は、宇治川は暴れ川であってこれを渡るのに日頃から民衆が難渋していたこと、橋の完成によって人畜が大助かりしたということが記されている。

宇治橋断碑

〈重要文化財〉

〔六朝風〕名文で書き置かれた石碑です。その文字の簡浄な力強さが日本の書の源流をさぐるうとする人々の注目を集めています。又宇治橋の歴史書でもあります。

碑文をたどってみると、冒頭は「浼浼横流 其疾如箭 修修征人 停騎成市 欲赴重深 人馬亡命 從古至今 莫知航葦」と、宇治川の急流のはげしさにはばまれた、旅する民衆の難渋のさまを描いてみせ、ついで「世有釈子 名曰道登 出自山尻 惠満之家 大化二年 丙午之歳 搆立此橋 濟度人畜」と、道登が架橋し、人畜が助けられたことを簡潔に述べたあと「即因微善 爰發大願 結因此橋 成果彼岸 法界衆生 普同此願 夢裏空中 導其苦縁」と、橋の完成によって人々の苦勞が軽減されたことが、九十六文字の全文に記されている。

石碑は、洪水・戦火・地震、いかなる理由かはわからないが、いつの世かに消えた。長く埋没していたが、江戸時代の寛政三年（一七九一年）の春、寺の境内から上部三分の一の断石が発見された。が、残り三分の二は発見には至らなかった。

尾張・名古屋の学者、小林亮適は同志、内田宣経、小川雅宜、吉田重英、釈亮恵らと共に、十四世紀初頭に編修されたと思われる歴史書「帝王編年記」に記されていた原文をもとに六朝風の文字で補充し、寛政五年（一七九三年）に完成した。現在の石碑です。我国最古の石碑といわれております。

断碑とは切断している石碑の意味です。

（べんべんたるおうりゅう そのはやきことやのごとし）
 浼 浼 横 流 其 疾 如 箭
 （じゅうしんにおもむかんとすれどもしんはんのいちうしなう）
 欲 赴 重 深 人 馬 亡 命
 （よにしゅうくしあり なをどうといわく）
 世 有 釈 子 名 曰 道 登
 （たいか二ねん 丙 午 之 歳）
 大 化 二 年 名 曰 道 登
 （すなわちみぜんによつて ここに たいがんをほつす）
 即 因 微 善 爰 發 大 願
 （ほうかいのしじょうあまねくこのねがいをおなじゅうし）
 法 界 衆 生 普 同 此 願
 （ほうかいのしじょうあまねくこのねがいをおなじゅうし）
 法 界 衆 生 普 同 此 願

（しゅうしゅうたるせいじん うまをとめ いちをなす）
 修 修 征 人 停 騎 成 市
 （いにしえよりいまにいたるまで こういをしるもなし）
 從 古 至 今 莫 知 航 葦
 （やましる えまんのいえよりいでたり）
 出 自 山 尻 惠 満 之 家
 （このはしをこうりゅうし）
 搆 立 此 橋 濟 度 人 畜
 （いんをこのはしにむすび かをかのきしになさん）
 結 因 此 橋 成 果 彼 岸
 （むりくうちゅうに そのくえんをみちびかんことを）
 夢 裏 空 中 導 其 苦 縁

付「日本三古碑」

宇治橋断碑・多胡碑（群馬県）・多賀城碑（宮城県）

放生院（橋寺）

その宇治橋の袂には下のような道標や看板、銅像もあって、西国観音霊場巡礼の途も愈々京ノ都に近づいて来たことを感じさせた。



(宇治橋から宇治川・中島を望む)



(平等院鳳凰堂 夕照)



本日の泊まり：宇治民宿「きみや」
夜遍路：焼鳥「なかい」



【第十番 明星院 三室戸寺】

本山修験宗 本尊：千手観世音菩薩 真言：おん ばざら たらま きりく

創建：宝亀元年（770年） 御詠歌：夜もすがら 月を三室戸わけゆけば 宇治の川瀬に立つは白波

参詣日：令和元年 10 月 5 日

第十一番 深雪山 上醍醐准胝堂（京都市伏見区）



（上醍醐寺・如意輪堂。上醍醐寺はどの御堂も扉が固く閉ざされたままの無住寺）

醍醐寺は上醍醐寺と下醍醐寺の総称であるが、本来は上醍醐の方が根源の地で、西国観音巡礼の第十一番札所も上醍醐寺の准胝堂であった。しかし、10年前に准胝堂が落雷で焼失して以来、上醍醐寺を閉鎖・無住として札所の本尊・准胝観世音菩薩も下醍醐寺に移し、札所の納経も下醍醐寺で行われるようになったらしい。

そのような事を露知らなかったのも、巡礼古道に従って前の第十番・三室戸寺から志津川を遡って（東海自然歩道）宇治市・京都市伏見区境を越えて醍醐山（上醍醐寺）に至る山道を探ったのであるが、途中で道を失った折にたまたま居合わせたオジサンに尋ねたところ、上醍醐は無住になっており札所も下醍醐に移されてこちら側から直接上醍醐に入る山道は柵で完全に通行止めになっているとのこと。そのオジサンの話では、“表向きは土砂崩れの危険性があるためということらしいが、実はこちら側から無住の寺に入られては入山料が徴収できず、またこの道はハイカーが多いので彼等からも入山料を徴収するために、道を変えて下醍醐から入るコースとしたのではないかと。これはどうやら醍醐寺の策略らしい”と。ナルホド、ナルホド、西国観音霊場巡りの道標が急に消えてしまった理由がこれで分かった。

ここから上醍醐までは10kmほど志津川沿いの山道を遡らねばならず、通行止めになっている地点は上醍醐寺の直ぐ手前で、そこから先は道が全く無くなっているそうだから、このオジサンに出会わなかったら往復20kmを無駄ピストンして再びここまで戻る羽目になるところだった。助かった。

そのような訳で、相当な時間をロスしたので、再び宇治市街地に逆戻りして京阪電車とバスを乗り継いで下醍醐寺に飛天した。

下醍醐寺は「豊太閤の醍醐の花見」で有名な大寺で結構な人出があったが、西国観音巡礼の小生には用は無かったので境内を通過しただけで早々に上醍醐に向かった。それにしても、下醍醐でも入山料を払い上醍醐に参るためには更に上の入山料も払わないと登らせてくれないというシステムになっていた。

マ、上醍醐までの参詣道の整備にも経費が掛かるであろうから幾許かの入山料は仕方ないとしても、下で大枚 800 両、更に上用に 500 両、合計で 1300 両というのはチト高すぎるのではなからうか。入山料の多寡は擱くとしても、同じ醍醐寺という寺院にもかかわらず二重に徴収するという魂胆がよろしくない。言ってみれば、本堂だけでなく奥之院への入山料も二重に支払わせるということと同じで、日本全国の寺院を見渡して見てもこのような二重入山料を徴収している寺はここだけではなからうか。カネのことは言いたくないが、入山料は本来は喜捨、御志であるから、その多寡は別として気持ち良くお供えて初めて仏様もお喜びになられると思うが・・・。マ、それはともかく・・・。

下から上への道は勾配がきついウネウネと曲がった山道で、4km ほどの距離に 2 時間も掛った。



(下醍醐から上醍醐への山道)

上醍醐の広い山中の境内には、本堂である准胝堂は焼失していたが、薬師堂、五大堂、如意輪堂、開山堂などの由緒ありそうな古御堂が建っていてそれぞれに風格があった。五大堂の前庭には開創の理源大師の等身像が祀られていたが、松籟が吹く人っ子一人居ない淋しい山中でこのような銅像に突如逢うと閻魔大王の前に引き摺り出されたようで怖くて気色が悪かった。悲しいかな、日頃から悪業の限りを尽くしてきた罰当たりということであろう。

この醍醐山は標高が 500m ほどあるので、気持ち良い秋風が吹いていて遥か大阪平野まで見渡せた。



(五大堂と理源大師像)



(如意輪堂)

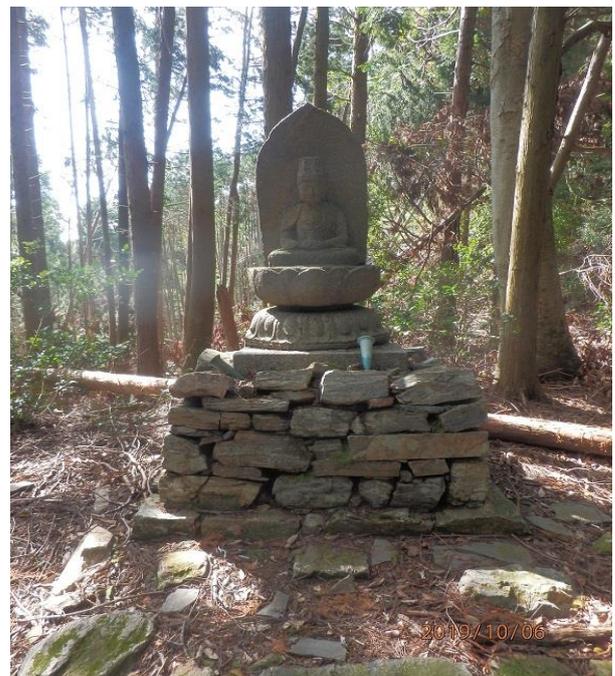


(松籟吹く醍醐山からの眺望。翳んでいる先が大阪平野)

上醍醐寺の次の札所は第十二番「岩間山 正法寺」である。上醍醐寺から西笠取川に降り、再びウネウネした巡礼古道の山道を登って標高 450m の岩間山に建つ正法寺まで歩いたが、途中で迷って行きつ戻りつしたこともあって、6km の山道に 4 時間も掛かった。正法寺のことは次項で書く。



(上醍醐寺から西笠取川への下山口。道標は「志ゆんれいみち」。杉の倒木や枯れ枝が被さった獣道程度の踏み跡)



(途中にあった由緒ありそうな石仏)



(昨年の大阪台風で倒れた杉が古道を覆っていた)

【第十一番 深雪山 上醍醐准胝堂】

真言宗醍醐派 本尊：准胝観世音菩薩

真言：おん しゃれい それい そんでい そわか

御詠歌：逆縁も もらさで救う 願なれば

准胝堂は たのもしきかな



参詣日：令和元年 10 月 6 日

第十二番 岩間山 正法寺(岩間寺) (滋賀県大津市)



(本堂)

先の上醍醐寺の末尾でも触れたが、上醍醐寺からこの第十二番札所・正法寺(通称岩間寺)に辿り着くのは些かきつかった。距離にすれば6kmほどであるが、道標が全く無いのでどの方向に歩いているのか分からずロストポジションに落ち込んだり、ウネウネした林道で仕事道に迷い込んだりで草臥れ切った。何しろ人家も全く無い山中ばかりの道であるから人に聞こうにも聞く人がいない。

マ、しかし、醍醐山から下って辿り着いた西笠取川最上流のドン詰まりの小さな集落の佇まいは私が生まれた岡山県の山奥の辺地を髣髴とさせるものがあって、心が安らいだ。

岩間山・正法寺は標高450mの岩間山の山頂にあり、前の札所の上醍醐寺がある醍醐山もほぼ同じ標高であったので、標高150m程の西笠取川の谷筋まで標高差300mほど下って、そこから再び標高差300m程を登らなければならないという寸法になった。

山中にある札所の閉門は16時か16時半の寺が多い。特に、無住の寺で僧侶が麓から通っている場合には、閉門時間を過ぎると寺に入ることもできず、当然ながら納経もできない。この岩間寺も山上の寺であるし、今の歩行スピードでは閉門時間に間に合いそうになかった。寺の付近には民家は全く無いらしいし路線バスなども無いので、閉門された寺に行ってもその先が行き詰って麓に降りることもできないだろうから、もし閉門時間に間に合わないのなら未だ携帯が繋がるこの集落からタクシーでも呼んで



(途中にあった懐かしい田舎の風景)

町に降りてどこかに宿を探し明朝再び登って来るという手を取らざるを得ないから、閉門の時間を確認するために僧坊に電話してみたところ、親切な女性の声で、今どこに居るのか？ そこからなら何とか閉門時間ギリギリに間にあうように来れると思うから頑張ってきて下さいとのことだった。

この電話に元気付けられてウンウン言いながら山道を登って行ったが、行けども行けども寺に到達する気配が無かった。辺りは段々と黄昏が迫ってきて今宵はこんな山中でビバークかと気が重くなってきた頃にやっと参道らしき道があった。その参道がこれまた長い長い参道で、やっと本堂らしき堂宇に辿り着いたが本堂の灯りは既に消えていた。それでも奥に誰かが居られるかも知れないと大声で呼んでみたら電燈が灯って、「なかなか来られないので諦めて引き返されたかと、たった今本堂の扉を閉めたところです」とのことだった。閉門時間を30分以上も過ぎていたが、本堂の扉も開けて納経もちゃんと下さった。このお寺のご住職は毎日麓から通っているようで、閉門時刻を過ぎて30分も待っていて下さっていたことは大変に有り難かった。電話に出られた件の女性はご住職の奥様のようなであった。

納経が終わって、帰りのタクシーを頼めないかと依頼したところ、「時刻が遅いのもうタクシーは来てくれないから、我々もこれから下に降るので麓のバス停まで車で送ってあげます。そこから大津方面への路線バスもあります」という有り難いお言葉。普通のお寺では、住職や寺の人がマイカーで送ってくれるなどということは滅多にあり得ない。この西国33観音霊場巡礼や坂東33観音霊場巡礼、秩父34観音霊場巡礼、また四国遍路も2回巡ったが、住職のマイカーで最寄駅まで送って貰った経験はここ以外では坂東の第10番「岩殿観音」だけであった。この寺も公共交通機関が不便な場所にあった。

歩きで廻っていると、このような“御利益”もあるから、これも観世音菩薩様の仏縁かもしれない。

【第十二番 岩間山 正法寺】(岩間寺)

真言宗醍醐派 本尊：千手観世音菩薩

真言：おん ぼざら たらま きりく

創建：養老6年(722年)

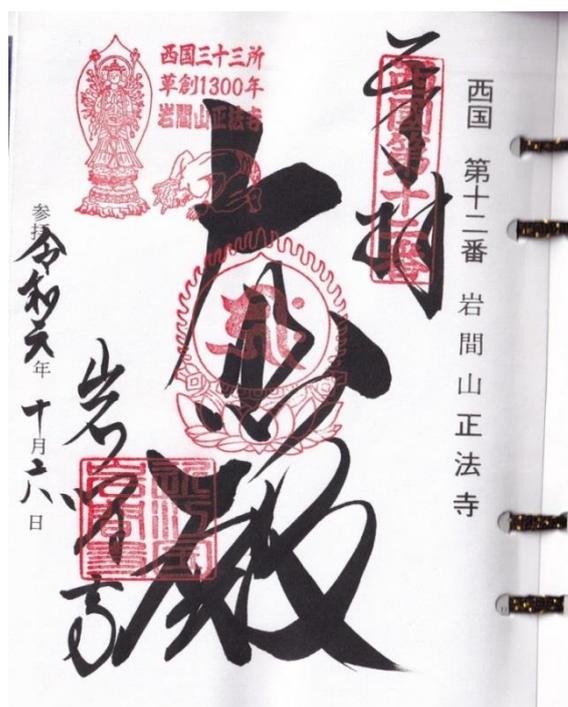
御詠歌：水上は いづくなるらん 岩間寺

岸うつ波は 松風の音

参詣日：令和元年10月6日



岩間寺の次の札所は第十三番「石山寺」(大津市)であり、そこからやはり大津の三井寺を経て京都市内の寺々を廻る順路となっているのだが、石山寺に着いた時には既に夜になっていたのだから、今回は先に琵琶湖東畔にある近江の2札所を回ってから石山寺から京都に戻ることとしたので、近江八幡のビジネスに宿を取った。近江八幡駅近くの「ビジネス第一ホテル」。朝食付き5300円、駅から少し離れていたが、なかなか良かった。夜遍路は串かつ屋。



第十三番 石光山 石山寺 (滋賀県大津市)



(石山寺 東大門)

前頁で触れたように、この日は近江・琵琶湖東畔にある第32番「観音正寺」と第31番「長命寺」を先に廻ってから石山寺まで足を延ばした。今回の巡礼を始めてから1週間が経ち腰椎骨折の腰も痛くなってきたので、乗れるところは電車やバスを使って飛天したが、上記の近江の2寺は交通が不便な場所にあり両札所間の歩きに結構な時間が掛かり、この石山寺に辿り着いた時には閉門ギリギリであった。西国の観音巡礼札所は山中の寺でなくても閉門が16:30と早い寺が多く、ここも受付で、納経所が閉まるから急いで納経所(本堂)に行つて欲しいと急かされて、長くて急な石段を登るのに大汗を掻いた。

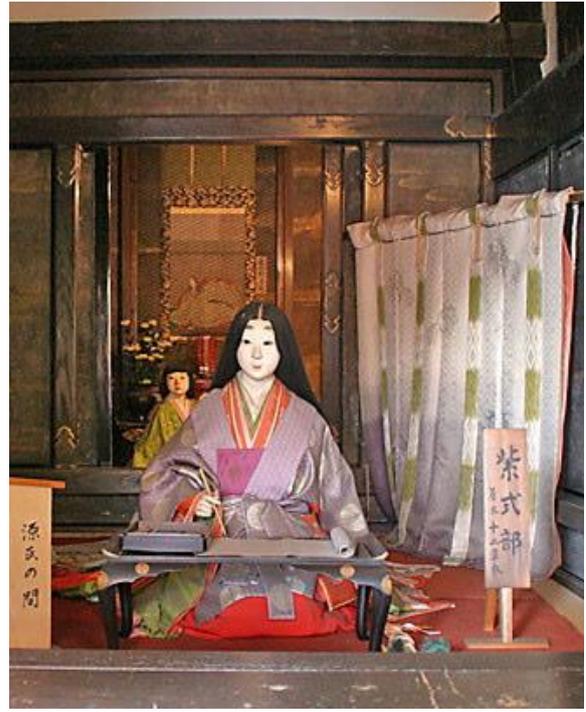
本堂まで登ったら、既に本堂の扉がゴロゴロと閉められつつあり、ご朱印を貰うのがやっこさっこだった。

この石山寺は京都に近かったので平安時代の昔から朝廷や貴顕の石山詣が流行し、大奥の女房達の参詣も多く、紫式部もその例に洩れずここに一週間ほど参籠した折に源氏物語の着想を得たと言う。そのことから境内には源氏物語や紫式部に纏わる記念碑などが沢山建っているそうだが、紫式部が源氏物語を執筆したという有名な本堂の「源氏の間」を観る時間的余裕も無かった。

マ、写真(次頁)によれば、紫式部が机に向かって物を書いている珍奇な蠟人形が置かれていて、古色蒼然たる国宝の本堂には全くの不似合のシロモノのようだ。

この寺は、珪灰石という珍しい巨岩の上に建てられた伽藍で寺号もこの石の山から名付けられたそうだが、残念ながらこれも見る時間が無かった。

また、境内の天辺には「月見亭」と呼ばれる懸崖造りの四阿があり、歌川廣重の近江八景「石山の秋月」にも描かれている有名な観月台だそうで、後白河法皇以下歴代の天皇の月見の玉座になっていたという。中天に掛った満月が瀬田川のせせらぎにも揺れ映って中秋の名月の情緒満点だったことであろう。一度でよいから死ぬる前の冥途の土産に女御更衣をあまた侍らせて酌をさせつつ、脇息などに凭れてアッ〜とかウンとかノタマイながら月を眺めるなどという芸当をしてみたいものだ。



(↑源氏の間と紫式部)

(←石山寺から瀬田川を見下す紫式部 歌川廣重筆)



(月見亭)



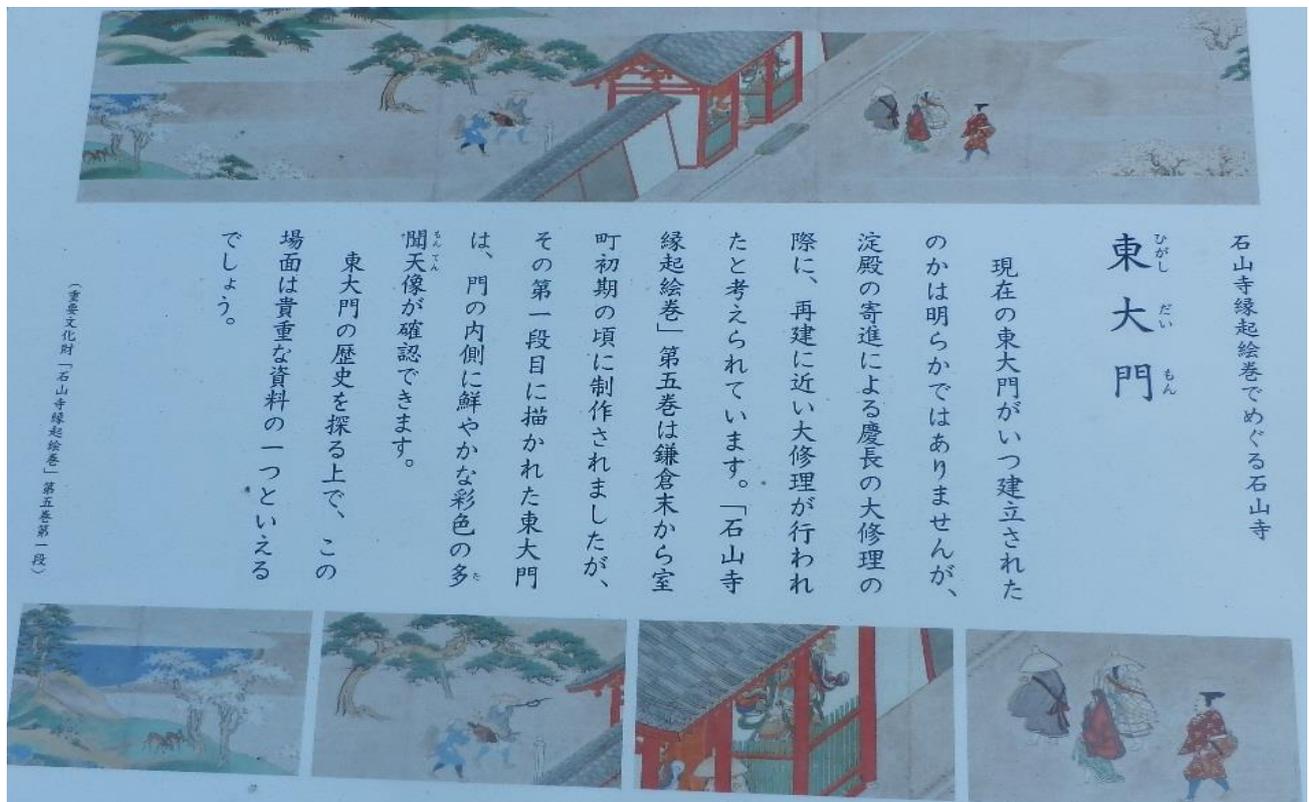
(歌川廣重筆「近江八景・石山の秋月」)



左:多宝塔
(国宝)
右:瀬田川



(石山寺の寺号となった硅灰石)



(東大門の説明板)

この日は近江八幡のビジネスホテルに戻って連泊した。

【第十三番 石光山 石山寺】

東寺真言宗 本尊：如意輪観世音菩薩（33年に1回開帳の秘仏）
 真言：おん ばらだ はんどめい うん 創建：推古天皇13年（605年）
 御詠歌：後の世を 願うところは かるくとも 仏の近い重き石山



参詣日：令和元年10月7日

第十四番 長等山 園城寺（三井寺）（滋賀県大津市）



園城寺（通称・三井寺）は「三井の晩鐘」で有名な天台寺門宗総本山の古刹・大寺である。天台宗（叡山）は昔から山門派と寺門派に分裂しており、同じ天台でも延暦寺が前者、この三井寺が後者である。

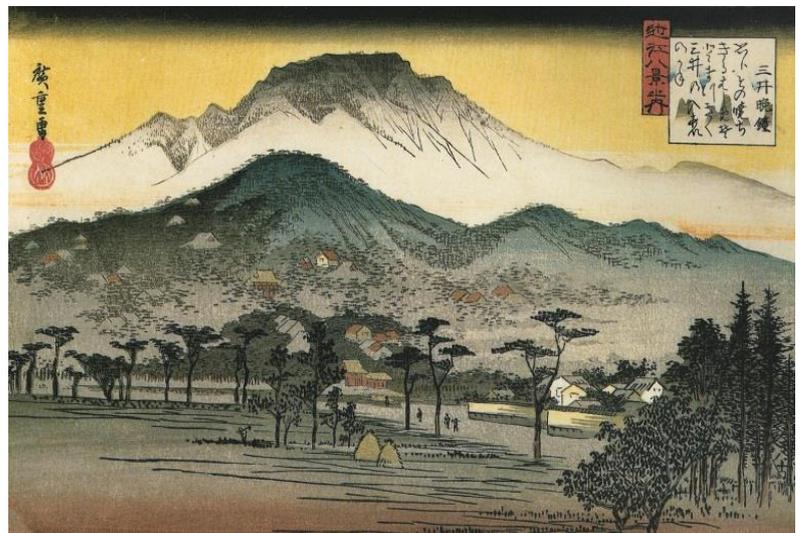
宗教本来の「^{まつりごと}祀治」がキナ臭い方の「^{まつりごと}政治」に悪用されるのは、今も昔も洋の東西を問わず同様に、^{くだん}件の事情も世に広く知られているように、天台宗は開祖最澄の後継を巡って直門と客分の二派の争いがあり、この時から延暦寺を山門、三井寺を寺門と称し、それぞれ僧兵を増やして天台宗は二分されてしまった。この後の延暦寺は園城寺のみならず南都の寺院とも争いを始め、また、御輿を担いで朝廷にも強訴を繰り返した。奈良・興福寺の僧兵も平安京で大暴れした。所謂僧兵の乱である。

白川上皇の有名な「意の如くにならざるもの」という言葉は、鴨川の水、双六の賽と並んでこの僧兵の暴挙を指している。このような由来から延暦寺と園城寺は対立関係にあつて、長年にわたって激突を繰り返し、それぞれ武装して焼き討ちなどの苛烈な戦いを繰り返してきた経緯がある。因みに、この三井寺は東大寺・興福寺・延暦寺と共に「本朝四箇大寺（しかたいじ）」の一つに数えられ南都北嶺の一翼を担ってきた古刹である。

さて、余談はさておき、本日は朝から氷雨となった。広い境内を雨に打たれて巡るも大儀なので、三井の晩鐘を大枚三百両也の冥加料を払って撞かせて頂いたくらいで失礼した。



（↑大枚 300 両を払って撞いた三井の晩鐘）
（歌川廣重筆「近江八景・三井の晩鐘」⇒）





(33年に一度しか開帳されない西国札所秘仏本尊・如意輪観世音菩薩が祀られている観音堂)



(金堂は檜皮葺きの大堂、桃山建築の代表作、国宝)



(境内から大津市街地の向こうに琵琶湖が見える)

三井寺裏山から雨の山道を合羽を着て次の札所「番外・元慶寺」へ歩いたが、猫と犬が降って来て落ち葉が厚く積もった巡礼古道の山道はよく滑って往生した。

【第十四番 長等山 園城寺】 天台寺門宗総本山

本尊：如意輪観世音菩薩 開創：朱鳥元年（686年）

真言：おん ばらだ はんどめい うん

御詠歌：いで入るや 波間の月を 三井寺の 鐘の響きに あくる湖 参詣日：令和元年10月8日



(←境内の奥にあった衆生観音。右手を岩に突き、左手を立膝に置いている姿は非常に珍しい形だそう)

(↓三井寺から山科を越えて京都に) 続く巡礼古道)



第十五番 新那智山 今熊野観音寺 (京都市東山区)



縁起によれば、弘法大師がこの地を巡錫していた折に熊野権現に出会って観音像を託された。弘法大師は早速十一面観音像を刻みその胎内に観音像を納めて、一字を建立した。これが今熊野観音寺の始まりである。その後、熊野詣でを 38 回も行った後白河法皇がこの地に熊野権現を勧請して新熊野神社を建立、熊野詣でに行かれない庶民に渴迎されて栄えたという。新熊野神社の本地仏が今熊野観音寺の本尊だからである。

さて、西国巡礼の行路が前後したが、この寺の直ぐ前に参った清水寺の大混雑に辟易していた身には、この今熊野観音寺は気味悪いほどの静謐さであった。本通りから小さな赤い鳥居橋を渡ればそこはもう鬱蒼とした山中の別世界で、特に往時はこの辺りは鳥辺野の葬送の地であったから、有象無象の靈魂や悪霊・怨霊・魍魎魍魎が潜んでいるであろうと感じさせる不気味さもあった。そういえば、我が邦の怨霊の首領となった崇徳上皇、平将門、菅原道真などの怨霊達が集まって往時の朝廷を滅ぼすための作戦会議をやった場所もたしかこの今熊野ではなかったか。鳥辺野の辺りは葬送の地だけあって淋しい所である。今でこそ大谷本廟などの巨大な霊園墓地として整備されているが、平安時代の昔は風葬で捨てられた庶民の死骸・白骨がごろごろしていた鬼気迫る山中であった。

一条帝の後だった中宮定子の墓所「鳥辺野陵」もこの今熊野観音寺の裏山にある。定子は聡明な中宮で一条帝に寵愛されていたが、関白跡目争いを巡って藤原一族のすさまじい近親争いが起こり、藤原道長が勝って、その娘彰子が中宮に送り込まれ、道長と争った定子の出自である藤原道隆系は遠流、定子も中宮から退けられて 19 歳で尼になり悲涙のうちに 25 才のはかない生涯を閉じた。この定子に仕えていたのが清少納言で、彼女の墓も定子の御陵のすぐ傍にある。因みに彰子に仕えたのが紫式部である。

折角鳥辺野に来たのだから、定子の鳥辺野陵にも詣でたかったのであるが、道が分からず聞く人も居ずで残念だった。清少納言が亡き中宮定子を偲んで詠った一首。

憂き身をば やるべき方もなきものを いづくと知りて いづる涙ぞ。



【第十五番 新那智山 今熊野観音寺】

真言宗湧泉寺派 本尊：十一面観世音菩薩 真言：おん まか きゃろにきゃ そわか

開創：天長年間 (830 年頃) 御詠歌：昔より 立つとも知らぬ今熊野 ほとけの誓い

あらたなりけり

参詣日：令和元年 10 月 8 日

第十六番 音羽山 清水寺 (京都市東山区)



(大混雑の清水寺)

懸崖造りの舞台で有名な清水寺は年間5百万人の人出で大繁盛だそう。私が巡礼した時も上の写真のような大混雑で境内もおちおち歩けなかった。例の中国観光ツアー客に加えて丁度修学旅行シーズンでもあったので境内も本堂も立錐の余地も無く、早々に退散した。

境内の脇にあった塔頭の一寺には、2011年の東日本大震災の津波で流された名勝・高田松原の松に鎮魂と復興の祈りを込めて一万人以上の手で「一鑿一削り」で刻まれた大日如来座像が祀られていた。このような祀り方こそ仏への功德と慰霊への供養に叶う方法ではなかろうか。大寺・名刹も金儲けばかりに走らずに少しはこのようなお手本を見習うべし。



(舞台は只今修理中で見えず、奥は雨に煙る京都市街)



(流された高田松原の流木に刻まれた大日如来、眞福寺)

【第十六番 音羽山 清水寺】

北法相宗大本山 本尊：十一面千手千眼観世音菩薩 真言：おん ばざら たらま きりく

開創：宝亀9年(778年)

御詠歌：松風や 音羽の滝の 清水を 結ぶところは 涼しかるらん



第十七番 補陀洛山 六波羅密寺 (京都市東山区)



(門柱に刻まれた文字が風格を感じさせる六波羅密寺)

前の札所「清水寺」から清水坂を下った街中に第十七番札所・六波羅密寺はあった。付近の路地には小さなお寺や地藏堂やこまごまとした商店やら内職店やら町工場などがゴチャゴチャと並ぶ庶民の町の一角であった。

この辺り六波羅の地は、元々京都の三葬送地^{*1}のひとつ鴨川から鳥辺野の辺りにあり、往時は蕭殺たる野風の中に倒れた石塔や打ち捨てられた死骸の白骨髑髏が散乱している鬼気迫る荒野であった(註^{*1}他の二つの葬送の地は、北の蓮台野、西の化野)。また後には平家の根拠地にもなった。平家全盛の頃には、この辺りには平家一族の居館が5千以上も建ち並び、六波羅密寺も平家の庇護を得て栄えた。

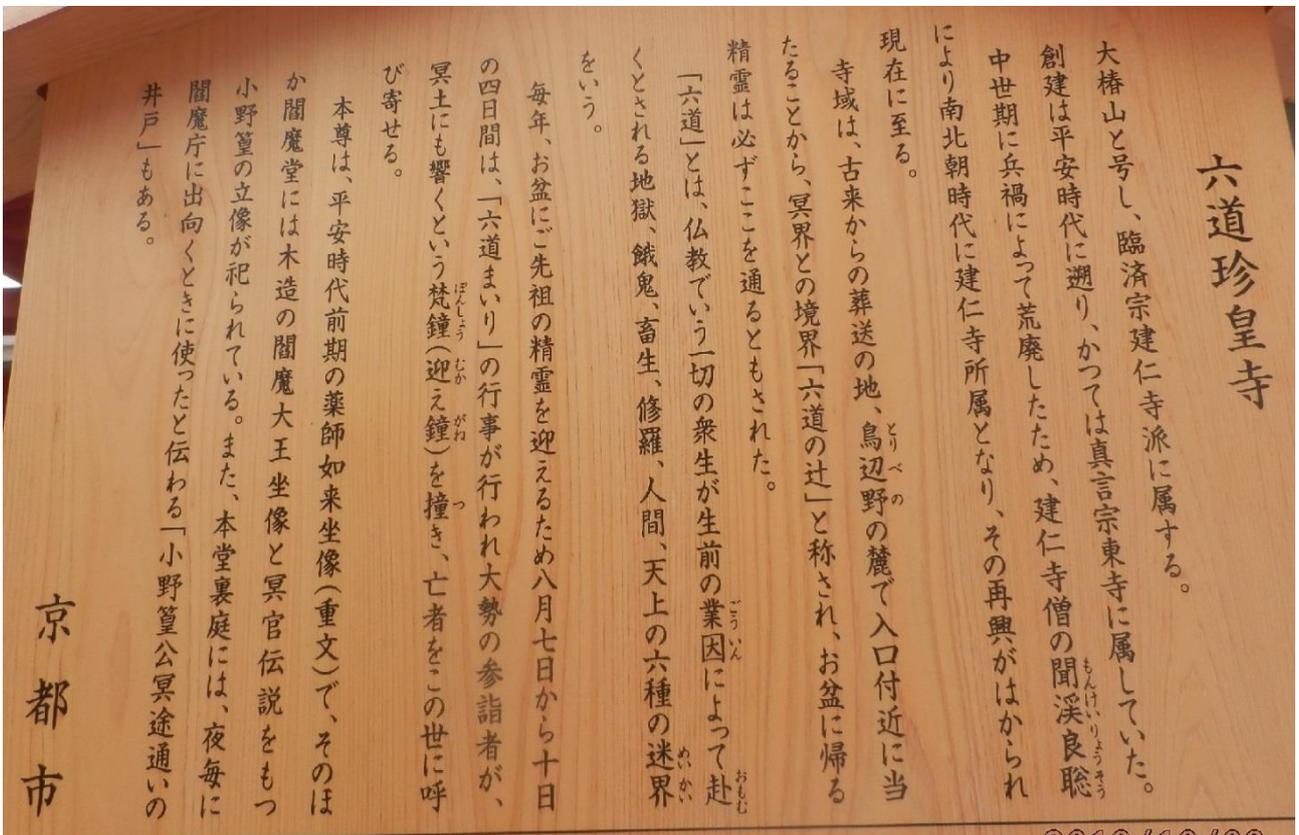
平家が滅亡すると、鎌倉幕府の源頼朝はここに六波羅探題を置いて朝廷や貴族、京の庶民などを監視したために、六波羅という地名には何となく怖くて気味悪いイメージが付き纏う。しかし、元来、仏法の教義では「波羅蜜」というのは「悟りを開く方法」という意味であり、「六波羅蜜」というのはそのために修行すべき六つの実践、即ち檀・戒・忍辱・進・禅・智^{*2}である。この六つを纏めたものを「般若」といい、これをお経で解いたものが般若(波羅蜜多)心経である。この寺の名前の由来もこの辺にあるのではなかろうか(註^{*2}檀=旦那の布施、戒=戒律、忍辱=忍耐、進=精進、禅=瞑想、知=これらの総和)。

この寺は、念仏聖・市の聖として庶民から敬慕された空也上人の創建である。天歴年間、京に流行した疫病により日ごと夥しい死者が鳥辺野に運び捨てられて行くのを憐み、空也上人は一体の十一面観音像を刻んで死者の冥福を祈るとともに、この仏像を手押し車に載せて市中に牽き出して多くの人々に結縁させた。また梅干しと昆布で邪気払いの茶を沸かして病人に飲ませ、不安に塗り潰されていた民衆の心を念仏踊りで救って廻ったのである。



(↑境内に祀られている左=平清盛ノ塚、右=平某の愛人で五条坂の遊女であつた阿古屋ノ塚。平清盛ノ塚より鞘堂も大きいのが泣かせる)
 (←六波羅蜜寺の空也上人像。口から出ているのは南無阿弥陀仏の化仏6体)

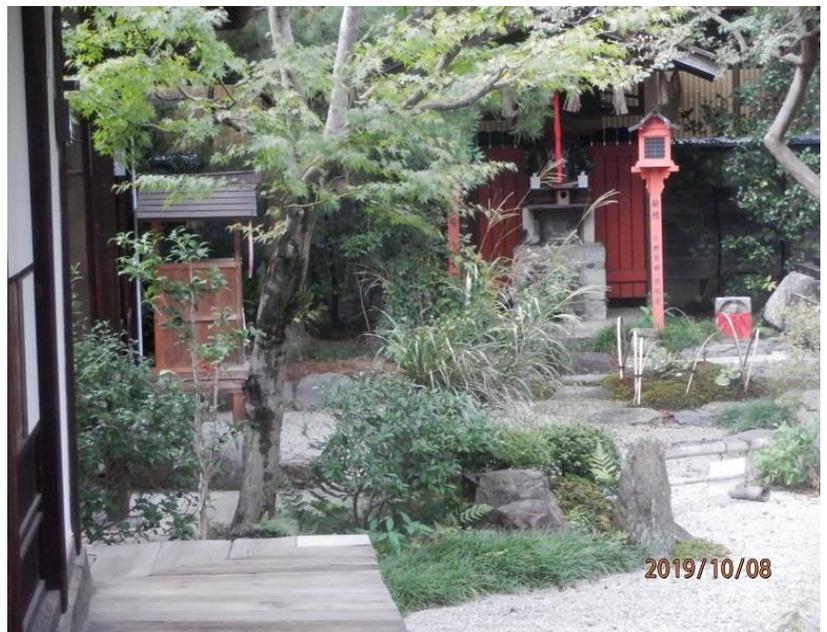
さて、六波羅蜜寺から清水寺へ登る角の辻は「六道の辻」と呼ばれる霊地である。この間の事情は六道の辻にあつた珍皇寺の説明板（下記）に詳しい。



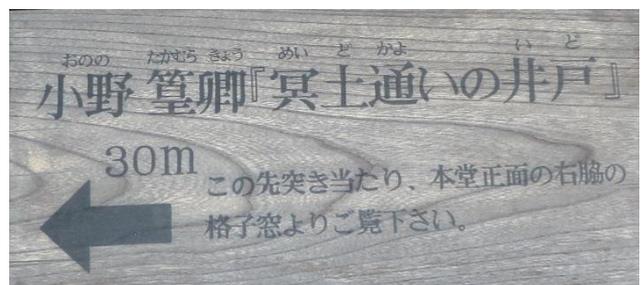
また、珍皇寺には冥府へ通じるという井戸があって、小野篁はこの井戸からあの世とこの世を自在に往き来してあの世では閻魔大王の代理を務めていたそうだ。このような異界譚が大好きな小生は、この井戸がどのような物なのか、珍皇寺に寄ってみた。残念ながらこの冥府井戸がある寺庭には入ることができず、廊下の格子窓から覗き見るだけだった。



(六道の辻。奥が珍皇寺)



(冥府井戸がある珍皇寺の庭。右端に少し見えている石が井戸の囲い)



(←↑ 冥府井戸への案内板と井戸の写真。珍皇寺)

本日は、大津の第 14 番札所・三井寺から行脚をスタートして、途中番外札所の元慶寺に寄ったりして、第 17 番札所・六波羅蜜寺まで廻り、この珍皇寺にも寄ったので草臥れた。六道の辻には寺町には似合いそうもない小さな立ち呑み酒場（スタンドバー風）があったので、ちょっと立ち寄って胃の腑にビールを吞ませてやった後、今夜の宿の長岡天神に向かった。宿は阪急長岡天神駅前の長岡京シティーホテル（7000 円）。長岡天神は結婚したての若い頃、大阪転勤で 6 年間ほど住んでいた所なので懐かしかった。夜遍路は焼鳥屋「雷（カズチ）」、2400 円。

【第十七番 補陀洛山 六波羅蜜寺】

真言宗智山派 本尊：十一面観世音菩薩 真言：おん まか きゃろにきゃ そわか
 開創：天歴 5 年（951 年） 御詠歌：重くとも 五つの罪は よもあらじ 六波羅堂へ
 参る身なれば 参詣日：令和元年 10 月 8 日



第十八番 紫雲山 頂法寺（六角堂）（京都市中京区）



本日は、昨夜泊まった長岡天神から再び京の街に戻って、京都市内で詣り残していたこの六角堂と次の札所革堂を巡り、併せて能や謡曲の「鉄輪」の舞台ともなった下京区鍛冶屋にある「鉄輪井戸」を見て来た。まずは、六角堂から。

六角堂は京都市役所近くの街中のビルに囲まれた谷間の一角に埋っていた。隣接する大きなビルは華道家元池坊の本部だそう。寺の由緒によれば、聖徳太子が念持仏をこの寺に安置し、小野妹子に毎日花を供えるように命じたので、高級官僚（遣隋使）でもあった小野妹子は一方では華祖と呼ばれ、池坊華道の開祖となった。その縁で、今でもこの六角堂の住職は池坊の家元が務める習いだそう。

また、境内には「へそ石」という六角形の礎石が置かれていた。由緒書きによれば、桓武帝が都を平安京に遷都した時、都大路の真ん中にこの六角堂が蟠踞して都市計画の邪魔になっていて帝も頭を悩ませていたが、尊い観音菩薩を勝手に移動させる訳にもいかずその処置に弱っていたところ、濃霧が垂れ込めたある夜六角堂は自分で数十メートル路傍に移動し、後にはこの礎石だけが残っていたのだという。京都の町人はこの礎石を京の中心として崇拝しているのだという。

狭い境内には、用事が有りそうで無さそうなお近所の老夫婦やお詣り組やら、ちょっと線香を上げに門を潜ったという風情の通行人やら、何かオモロイことは無いかと入ってきたようなアベックなど、気取らない庶民の寺の風情が誠に結構であった。



左：へそ石

右：六角堂本堂

右側のビルが
池坊本部



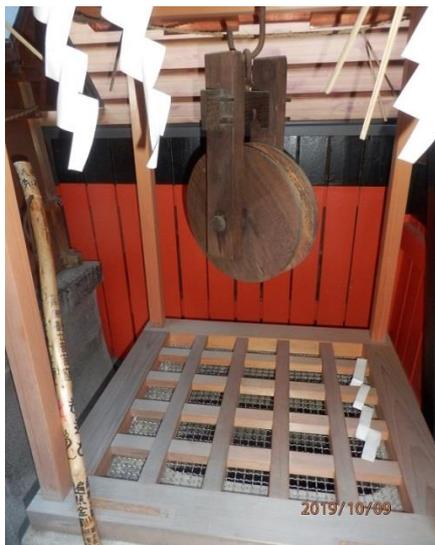
六角堂が終わってから近くにあるという「鉄輪井戸」を訪ねた。私は怖い物見たさでこのような生霊譚や妖怪譚が大好きなのである。方向から言えば、京都駅方面に僅かばかり「下ッタ」路地の奥にあるそうだが、場所が分からず辿り着くのが大変だった。近所の人に何回も聞いてやっと分かったが、個人の住宅の門を潜って入った小さな路地の奥にあったので、これでは探し切れないのは無理もない。



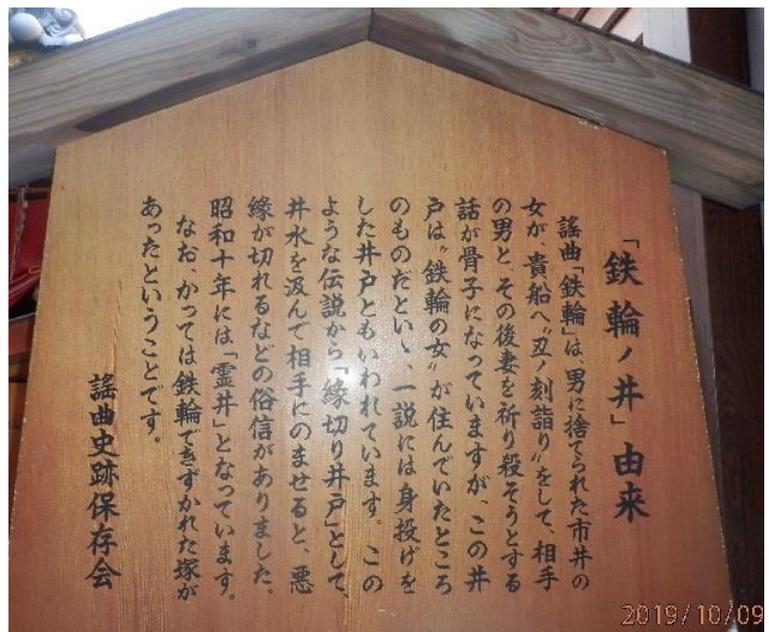
(民家の門を入った狭い路地の奥が鉄輪井戸)



(路地の奥のドンツマリに鉄輪靈泉、鉄輪社、鉄輪井戸)



(鉄輪井戸)



「鉄輪」というのは本来は火鉢や囲炉裏に置いて鍋や薬缶を掛ける三本足の五徳のことである。いつの世であったか、下京に住む女が自分を捨てて後妻を娶った男を恨み、毎夜貴船神社に丑の刻詣りをしていたが、この時に頭に載せていた被り物がこの鉄輪で、鉄輪の三本の足に火を点けたローソクを縛り付けて怒りの心を掻き立てながら藁人形に呪いの五寸釘を打ち込んでいたのだという。

その男はそれ以来悪夢に苦しみ、陰陽師安倍晴明に占って貰ったところ、その男の命は今夜限りであるとお告げであった。安倍晴明が調伏の祈祷を行うと女の鬼が現れ男を連れて行こうとしたが、安倍晴明の調伏に負けて苦しみながら去って行き、どこかで息絶えたという。以上が能や謡曲「鉄輪」の粗筋である。



(貴船神社・丑の刻詣りで藁人形に五寸釘を打つ女)



(能「鉄輪」)



(呪われた藁人形)



(藁人形に打ち込まれた貴船神社境内の五寸釘)

【第十八番 紫雲山 六角堂】

天台宗 本尊：如意輪観世音菩薩 真言：おん ばらだ はんどめい うん

創建：用明天皇2年（587年）

御詠歌：わが思う 心のうちは 六ツの角 ただ円かれと 祈るなりけれ

参詣日：令和元年10月9日



第十九番 霊麿山 行願寺（革堂）（京都市中京区）



この寺も、お隣の札所「六角堂」と同じく町中にある小さい寺で、ご近所のオジサン、オバサン達が犬の散歩や買い物の序に立ち寄りたりする庶民派の寺であった。

別名を革堂という。或る侍が若い折に狩に行き、子を身籠った雌鹿を射た。射た雌鹿から小鹿が生まれてきたのを見て殺生を悔い、その母親の鹿の革に経文を記して常にこの革を纏い、庶民の救済に尽くしたという。人々は彼を革聖と呼び、彼が建てた一字は革堂と呼ばれた。彼の名を行円と言ひ、この寺の開祖となった。

【第十九番 霊麿山 行願寺（革堂）】

天台宗 本尊：千手観世音菩薩 真言：おん ばざら たらま きりく
御詠歌：花を見て いまは望みも 革堂の 庭の千草も 盛りなるらん



参詣日：令和元年 10 月 9 日

今晚も昨夜の長岡天神駅前のビジネスホテルに連泊し、夜遍路も昨夜と同じ焼鳥「雷（カズチ）」。

第二十番 西山 善峯寺 (京都市西京区)



(城門のように豪壮であるが、丹塗りが剥落した山門。素木の風格が感じられる)

この寺は、50年ほど前の若かりし時に大阪に転勤し、その年に結婚して所帯を持った京都府乙訓郡長岡町（現長岡京市）の裏山にある。地図で言えば、京都府長岡京市、京都市西京区、京都府亀岡市、大阪府高槻市が境を接している西山の稜線の中腹で、山城盆地の西端に当る。

子供2人もこの地で生まれ育ったので、ハイキング旁々何回か遊びに行った。息子を自転車のハンドルに付ける幼児用椅子に乗せてこの寺まで登り、帰りに息子が眠ってしまって椅子から落ちこぼれそうになって往生したこともあった。そのようなことで、大変懐かしい場所でもある。

今回は、前夜泊まった長岡天神駅前のホテルから一人でトコトコ歩いて行った。この辺りは50年前の頃と殆ど変わっていない田園地帯で懐かしかった。道も大体は覚えていた。3時間程のノンビリ歩きであった。

さて、この善峯寺は、平安中期に比叡山の高僧・恵心僧都の高弟・源算上人によって開かれて以来、後鳥羽天皇、白河天皇、後嵯峨天皇、後深草天皇など皇室の崇敬を受けて栄え、また鎌倉時代には門跡法親王の籠居、隠居所「西山宮」にもなった。室町時代には山城40万坪、境内3万坪、僧坊50余を数える大寺であったが、応仁の乱の兵火で大半の塔堂伽藍を焼失、現在の伽藍は八百屋の娘から徳川五代将軍綱吉の生母へと昇りつめた桂昌院の寄進で江戸時代に再建されたものだろう。

境内からは山城の眺望が随一だそうで、なるほど、北は京都盆地の北端、北山から東山三十六峰の連嶺のうねり、中京区などの中央市街地、南は鳥羽伏見、淀川が流れる大阪平野まで一望であった。また、境内には桂昌院お手植えと言われる樹齢6百年の這松の五葉松「遊龍の松」もよく手入れされていて見事であった。樹高は2mに満たない松であるのに、30mもの枝を横に2列も伸ばしている。

伽藍や庭は掃き清められていて塵一つ落ちていなかったが、歴史小説家の杉本苑子によれば、この寺は人工美による“箱庭”で、その贅沢さや気品は歴代皇室の庇護の基、西山宮としての寺格も上がった

ために齋されたものであり、あえぎ、苦しみ、血みどろになって今日を闘っている庶民の眼からすれば全て風化した死物であり、生命力を失ってしまった形骸に過ぎない。法灯の真の輝きを失った貴顕の別天地でしかない。見事な遊龍の松も、このようまモノが存在すること自体、この寺の貴族的性格の表れであると手厳しい（昭和 55 年中公文庫刊「西国巡拝記」による）。マ、それはさておき・・・。

寺のパフレットによれば、開祖・源算上人が刻んだ石仏釈迦如来は腰痛への霊験あらたかだそうで、小生も拝んで見たが霊験が顕れなかったのは、やはり今生の悪行が報いているのか、或いはお布施が少なかったのか・・・。また、パフレットに曰く、平成 7 年の阪神淡路大震災の時、高速道路の折れた端に引っ掛かって宙吊りなりながら奇跡的に乗客が助かった高速バスの運転手がたまたまこの寺の釈迦如来のお守りを奉持していたそうで、その縁で「おちないお守り」として売り出し、交通安全や受験生に人気が高いそうだ。なかなか商売上手であるナー。



2019/10/09

(↑ 観音堂)

(六角経堂、奉安は中国南北朝時代の僧・傳大士⇒)



2019/10/09



2019/10/09

(遊龍の松)



2019/10/09

(善峯寺から京都方面の眺望)

【第二十番 西山 善峯寺】

天台系単立 本尊：千手観世音菩薩 真言：おん ばざら たらま きりく

開創：推古天皇 35 年 (627 年)

御詠歌：野をもすぎ 山路に向かう 雨の空 善峯よりも 晴るる夕立



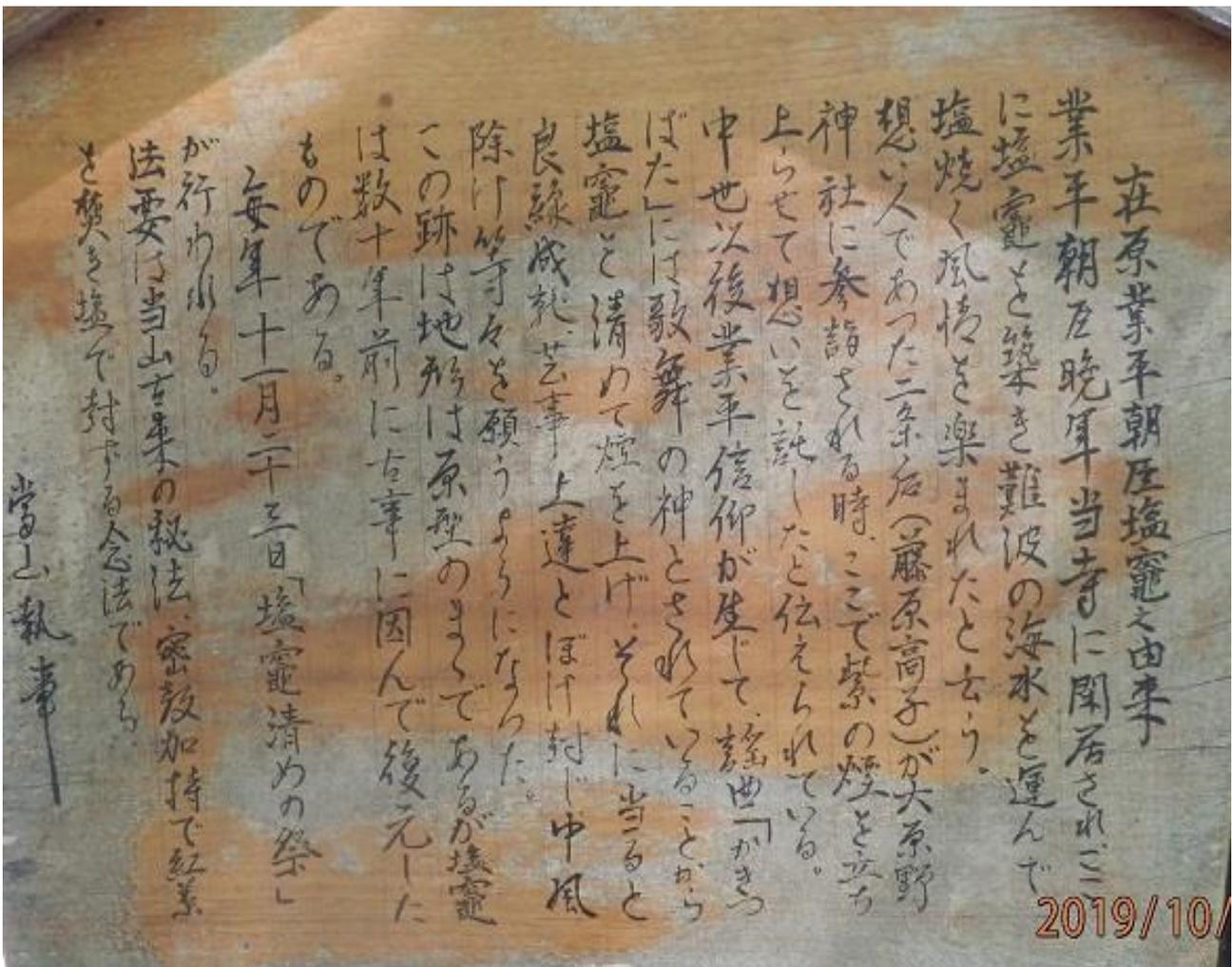
善峯寺から山を下って長岡京方面に戻る途次、長岡京に住んでいた頃によく散歩した大原野をブラブラと歩いて、伊勢物語の在原業平が隠棲していた山寺（十輪寺、通称なりひら寺）や当時住んでいたアパート、アパートのすぐ近くの子供を本堂で遊ばせていたお寺（西山浄土宗総本山・光明寺）などを訪ねて若かりし頃の昔を偲んだので、個人的な追想ではあるがそれらの写真を少し掲げておく。



（在原業平の隠棲寺、小塩山十輪寺。この寺には西国観音↓

（同寺にあった在原業平の墓）

巡礼中興の祖・花山院が持ち歩いた持仏・笈擧観音が祀られているそうだが、所在が分からなかった）



（十輪寺にある在原業平・塩竈の由来。塩竈の写真は次葉）



(塩竈)



(在原業平公)



(西山浄土宗総本山・光明寺本堂 今でこそ京都の寺の中で随一と言われる紅葉の名所となっているが、私が近くに住んでいた50年程前の頃は鄙びた山寺の情緒があって、子供を涼しい本堂で遊ばせて貰った。のんびりした時代だった)



(光明寺の裏山にある農業用溜池。
ここも息子を連れてよく散歩に行った)



(新婚の頃6年間ほど住んでいたアパート。右から2軒目の樹木の繁った1階が我が住まい。裏山が光明寺の境内)



(長岡天満宮の八条ヶ池。この池も散歩コースだった。水上に浮かんでいる亭は筍料理で有名な錦水亭の四阿)

第二十一番 菩提山 穴太寺 (京都府亀岡市)



(穴太寺本堂)

前夜泊まった長岡京市から、この寺の一つ前の札所第20番「善峯寺」がある西山を越えて、次の第21番札所「穴太寺」がある亀岡市までの山道を約20km歩いて行った。善峯寺から西山の峠越えへの道は、軽自動車がやっと通れるくらいの幅しかない林道がウネウネとヘアピンカーブを描いた急坂で、峠の杉谷集落に登り着くのに大汗を掻き、我が足はストライキを起しそうになった。杉谷集落は家数は数軒あるが現在は1軒ほどしか住んでいない峠の集落で、ここから東海自然歩道が終点の大阪・箕面に向けて伸びているそうだ。杉谷というだけあって周りは杉の植林地帯で、鹿の鳴き声を聞きながら静かな谷沿いの林道を下り、京都市西京区から大阪府高槻市の北端をかすめて亀岡市に入った。途中には僅かな集落があったが、道の殆どは滅多に車も通らない山中の静かな林道であった。



(杉谷集落にて)

亀岡市に入ってから穴太寺方面への道が分からずウロウロしたので、2時間ばかりロスった。同じ西国霊場第29番札所、舞鶴の「松尾寺」の松尾心空師が発行した「西国三十三所古道徒歩巡礼地図」を頼りに歩いているのであるが、この地図は20年以上前の物であるから新興団地が出来ていたり、道路が付け替えられていたりするので、しょっちゅうロスポジションになる。マ、それはともかく・・・。

この寺の札所本尊は聖観世音菩薩で33年毎のご開帳であるが、寺の本尊の薬師如来は完全な秘仏で開帳した記録は無いそうだ。

一方、この寺には、全国的にも珍しい等身大の釈迦涅槃像があり、「なで仏」として親しまれているそうだ。私も頭を撫でてきたが、時すでに遅しであった。



(杉谷から亀岡方面に下る静かな林道)



【第二十一番 菩提山 穴太寺】

天台宗 本尊：聖観世音菩薩 真言：おん あろりきや そわか 開創：慶雲2年(705年)

御詠歌：かかる世に 生まれあう身の あな憂やと 思はで頼め 十声一声

参詣日：令和元年10月10日

(補遺)

亀岡駅の近くには明智光秀の居城だった旧亀岡城跡があり、毛利攻めの令を受けた光秀はこの城に兵を集結させ、矛先を突如東に転じて洛中に殺到、主君織田信長を本能寺に屠った史実で有名な城である。現在は大本教の本部になっている。私は若い頃高橋和巳の小説に引き込まれたことがあって、中でも大冊の「邪宗門」は何回も読んだ。これは官憲による大弾圧で壊滅した或る信仰宗教の興亡を通して日本人の土俗的宗教心や精神構造を描きだした小説であるが、大本教への大弾圧事件に材を採ったものと言われているので、この小説の舞台が見られるかと旧城跡である現在の大本教本部に足を運んでみた。

教団の敷地は綺麗に整備されていて、大弾圧によって破壊壊滅し廃墟となったという教団本部の跡や弾圧によって集団自決に追い込まれた信者のすすり泣きが聞こえるという谷は何処なのかと旧城址を彷徨ってみたが、そのような跡は全く無かった。折角だからと大本教本部の事務所を訪ねて聞いてみたが、ここ亀岡城址にある本部は布教関係の本部で、教理や信仰関係を扱う本部は別に綾部にあるのだという。

事務所の奥に居た責任者のような人が応対に出て来られて曰く「邪宗門という小説があるのは承知しているが、これは著者の創作であるから当教会とは全く関係がない。従って、小説に出てくる舞台も著者の仮構にしか過ぎないから、当教会にそのような場所はない」というご返事だった。なるほど、左様でもあろう。

帰りに、境内の草むしりをしていたオジサンが普通のオジサンではなく、哲人の顔付をされていたのでこの件を再び聞いて見たら、小生の菅笠・杖・白衣の巡礼姿を認められたのか、これは退屈していた時に良い鴨が来たワイと宗教談義を始められて大本教の教義が如何に他の新興宗教と異なって優れているのかを延々と1時間ほど講義された。小生が聞いたかった回答は無かった。

因みに、「邪宗門」の最終章は次の一節で閉じられている。

「・・・何人とも知れず、破壊された神部の本部あと、今は地獄谷と称される水のない谷間に、誰を弔うのか石を積み上げる者があり、細々とながら線香の煙も切れなかった。地獄谷と呼ばれるようになったのは、弾丸のために随所が深くえぐられて池となり、鮎川の流れが変わって、そこに一時水が流れ込んだからだが、鮎川堤の修復とともに、水は枯れ、荒涼とした窪地として残ったためである。地獄谷には近郊の人々もほとんど近寄ろうとはしなかったが、時折り、白い旗を持った狂人が何かを叫びながら彷徨している姿がみられ、夜には、とりわけ雨の降るときには、人のすすり泣くような風音があたり一帯に響くという。」、合掌。



(在りし日の亀岡城。大本パンフレットから引用)

明日からは荒天になる予報だったので、今回はここで一旦打ち切って、今晚は西宮在住の潔ちゃん(大学の同期)宅に一宿一飯の恩義に与って、二人で一献傾けた。

第二十二番 補陀洛山 総持寺 (大阪府茨木市)



第22番「総持寺」は茨木市街のド真ん中にあった。平安時代の公卿で料理の名手でもあった中納言藤原山蔭の開創によるという。そのために、この寺は包丁道の寺、料理の寺とも呼ばれ、境内にある包丁塚に使い終わった包丁を奉納する調理師の参詣が多いのだそう。毎年4月18日の観音様の縁日には山蔭流包丁式が行われ食材の魚に手を触れず包丁と箸のみで捌く妙義が披露されるのだそう。

また、開創の山蔭は幼い頃継母によって淀川に突き落とされた時に大亀が現れて助けられたという寺の縁起があり、その縁で本尊も亀の背中に乗っており、上の写真の寺標を亀が支えているのもこの伝承によるようだ。この大亀は実は捕らわれて殺されそうになっていたのを山蔭の父が助けた亀だそう。

山蔭流 庖丁式

毎年4月18日執行

総持寺開山・従三位中納言・藤原山蔭卿は総持寺本尊造立の時、仏師に千日の間毎日違う料理を饗し、「中納言の千日料理」として知られる。また光孝天皇の命により宮中料理の諸作法を整えたことから山蔭卿は庖丁道の祖とされ、庖丁の神、料理・飲食の神として全国の調理師から信仰を集めている。

藤原山蔭卿が庖丁道の祖であることから、当山では毎年四月十八日に、古式に則り「山蔭流庖丁式」が執り行われる。庖丁式は古来宴席において、当主が賓客を前にして、座敷に俎板を設え、料理して見せたことに由来する。現在「庖丁道山蔭流」を継承する全国の調理師により、山蔭卿の菩提所である総持寺に於いて、庖丁式が奉納されている。庖丁式には厳しい修業を重ねた調理師が臨み山蔭流免許の許し状が総持寺より授与されている。



2019/10



(池で水を吹いているのは何の石仏?⇒)

【第二十二番 補陀洛山 総持寺】

真言宗 本尊：千手観世音菩薩

真言：おん ぼざら たらまきりく

御詠歌：おしなべて 老いも若きも 総持寺の ほとけの誓い 頼まぬはなし



第二十三番 応頂山 勝尾寺 (大阪府箕面市)



(紅葉真っ盛り、弁天池の水面に人工霧が舞う勝尾寺境内)

西国観音霊場 33 札所の 3 回目の巡礼は、紅葉真っ盛りの 11 月中旬の 10 日間ほどを掛けて、ここ摂津の第 22 番「勝尾寺」から播磨へ、更に播磨から北上して丹後・丹波から琵琶湖を抜けて第 33 番（結願寺、谷汲山）のある美濃まで廻って「西国観音霊場 33 札所巡礼」を今回で結願した。

この日は、やはり西国を廻っている西宮在住の潔ちゃんと大阪の千里中央駅で待ち合わせて、路線バスに乗って 1 時間、第 23 番札所「勝尾寺」に詣でた。この寺は寺号の“勝”に因んで入試、合格、選挙、スポーツ、芸事、タレントなどあらゆる勝負の成功祈願に訪れる人が多く、皆「勝ダルマ」を奉納するのだそう。

弁天池の水面には人工の霧や噴水を漂わせ、人工滝なども設えられていて一大観光地の態であった。駐車場や路線バスで来る客も多く、駐車場や歩道の整理をする案内係の人は汗だくで走り廻っていた。



勝尾寺からは東海自然歩道が箕面まで通じていて、ウネウネしたこの道を下って日本百滝にもなっている名瀑「箕面大滝」や日本四所弁天の一つで本邦最古の弁財天とされる弁天様が祀られている瀧安寺などに立ち寄りながら阪急箕面駅まで歩いた。結構長く、下り一方の道に膝が笑った。

瀧安寺の弁天様は恥ずかしがり屋なのか、本堂の扉が閉ざされていてそのお姿は拝観できなかったが、本堂前に祀られていた妙音天という仏様が琵琶を持っておられたので、この寺の弁天様もこのようなお姿ではあるまいか。



(大混雑の箕面大滝)



(瀧安寺の妙音天⇒)

【第二十三番 応頂山 勝尾寺】

真言宗 本尊：十一面千手観世音菩薩 真言：おん ばざら たらまきりく
御詠歌：重くとも 罪には法の 勝尾寺 ほとけを頼む 身こそ安けれ



参詣日：令和元年 11 月 9 日

第二十四番 紫雲山 中山寺（兵庫県宝塚市）



（中山寺境内 同寺 HP より引用）

中山寺は、宝塚市街地のど真ん中にあった。安産と子育ての寺だそうで、子供連れの若い夫婦やカップルが大勢詣でていた。七五三の家族連れも多かった。幼児を抱いた人用のエスカレーターもあった。

この寺は、聖徳太子が 1400 年程前に開いた日本最初の観音霊場と言われている。本尊は古代インドのアユジャ国王妃シュリーマーラー夫人（勝鬘夫人）をモデルにしたと伝えられている十一面観世音菩薩で、本邦の仏像には珍しい異国的な特異なお姿であるらしい。

インド・アリア系の御顔立ち、豊満な体、肉感的な腰のヒネリやしなやかな左手、優美な指の曲げ方、等々そのお姿を拝みたかったのであるが、秘仏厨子の奥深くお隠れになっていて叶わなかった。マ、ヘンな妄想を逞しくする輩にはおいそれとお姿をお見せにならないのであろう。

また、この寺は西国巡礼再興の舞台となった寺でもある。伝説によれば、西国巡礼開創の長谷寺の徳道上人の夢のお告げに閻魔大王が現れ、西国観音霊場巡礼の普及を図るようと霊場三十三所の宝印を授けられた。しかし、当時はなかなか思うように普及せず、困り果てた徳道上人はこの宝印を取りあえずこの中山寺の境内にある石棺に埋めた。

時代は過ぎて 270 年の後、西国観音霊場巡礼中興の祖となった花山法皇がこれを掘り出して巡礼を復活させたという事になっている。

この石棺（石の櫃）には実はもう一つの伝承があって、悲劇の王妃第 14 代仲哀天皇の妃「大仲津媛」の陵墓と伝えられており、このことは古事記や日本書紀にも書かれているそうだ。その伝承は下記のようなものであった。

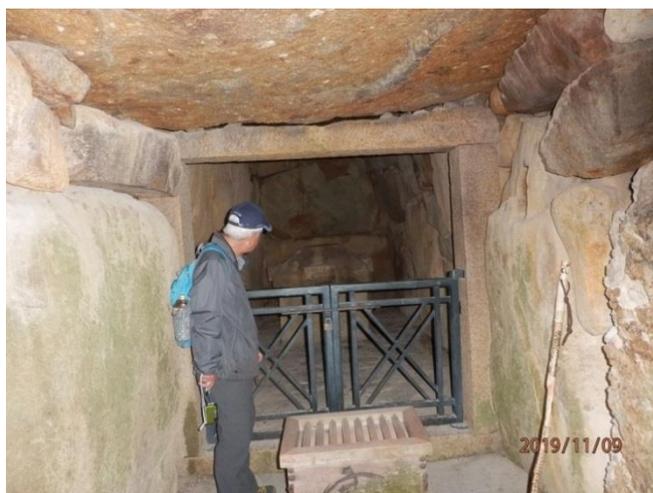


（中山寺本尊、十一面観世音菩薩。同寺 HP より引用）

仲哀天皇と大仲津媛はいとこ同士の間柄で仲睦まじく王子も二人もうけていた。当時の朝廷内部には朝鮮半島の動乱に乗じて新羅ノ國を掠め取り、技術が進んでいた彼の国の武器や人を略奪する計画が進められていて、そのためには新羅の内情に明るい渡来民の豪族である「丹波ノ主家」の協力が欠かせなかった。仲哀天皇が丹波ノ主家からおきながたらしひめ息長足娘を後に迎えさせられたのもこのための政略結婚であった。朝廷内部は新羅侵攻派と穏健派に分裂して争うようになり、娘を后として入内させた息長足姫の父・息長宿祢が強大な勢力を持つようになり、仲哀天皇は息長宿祢によって謀殺され、その王子も一人は暗殺、もう一人は近江の琵琶湖畔に追い詰められて自殺し仲哀天皇一派は壊滅した。仲哀帝の後の后・足媛が自らも新羅に出陣した神功皇后である。因みに、神功皇后が新羅から九州に凱旋して産んだ男児が後の応神天皇である。

夫帝と二人の子息を一挙に失った悲劇の王妃大仲津媛がその後の孤独な生涯をどのように閉じたのかは不明であるが、聖徳太子が大仲津媛母子の冥福を祈ってこの地に建立した慰霊の寺がこの中山寺であった。その後、聖徳太子の子息や孫が、息長宿祢の子孫の蘇我蝦夷、入鹿らに虐殺されて滅亡しているのも何かの巡り合わせかもしれない。

(中山寺の境内にある古墳「石のからと櫃」⇒)



(夕陽が多宝塔を染めていた)



(豪壮な二層の山門にも燈が灯った)

【第二十四番 紫雲山 中山寺】

真言宗中山寺派大本山 本尊：十一面観世音菩薩 真言：おん ばざら たらまきりく

開創：推古天皇時代(600年頃)

御詠歌：野をもすぎ 里をもゆきて 中山の 寺へ参るは 後の世のため

参詣日：令和元年 11月 9日



今晚は西宮の潔ちゃん宅に一宿一飯の恩義に与り、清談をしながら夜中まで痛飲。

第二十五番 御嶽山 播州清水寺（兵庫県加東市）



第 25 番「播州清水寺」は播州の真ん中にある。前の札所の中山寺からは 40 kmほど離れているので途中の三田市街で一泊して歩を進めた。前夜は潔ちゃん宅で少々呑みすぎたので、今朝は西宮から電車で JR 福知山線の「西宮名塩」という山間の駅まで乗り、そこから山を越えて三田市に入った。三田市では有馬川の堤防をのんびりと中心街まで歩いた。有馬川は日本三古泉の一つ有馬温泉から流れ出ている川である。

三田では、山崎旅館という料理旅館の老舗に泊まった。料理の種類により宿泊代が異なっており、当地の名物である鴨料理が名高いそうであるが今は未だシーズンには早いそうだった。美食に縁がない小生は一番安価な料理を頼んだ。大盛りの肉と野菜が入っている鍋が来た。裏山で駆除された猪肉かと思ったら、何とこの地の名物「三田牛」の牛鍋だという。泊まり賃含めて 7000 円弱という宿泊代もこれもまた誠に結構であった。

翌朝は、三田からこの第 25 番「播州清水寺」に詣でた。播州清水寺は播州御嶽山という標高 600m 程の山頂にあり、ウネウネとした山道を標高差 400m ほど登るので、かつては西国観音霊場札所で一番の難所であった（今はこの登山道とは別の車道もできていて日に 1 本程の路線バスもある）。

京都の有名な清水寺は、この地の帰化人武族・坂上田村麻呂が蝦夷征伐を命じられ凱旋した後、京都に邸を賜って京に駐在するようになったので、帰依していたこの播州清水寺の観音像を洛中に勧請し地形が良く似た東山の音羽山に一字を建てたのが京都の方の清水寺の始まりだそうで、こちらの播州清水寺の方が本家だそう。

さて、この寺には一風変わった仏像が安置されていた。東京芸大の教授で彫刻家の手になる十二神将像で、それぞれの神将に応じた干支の姿に彫られていた。次頁にその神将像の一部を。



さて、この寺から次の札所第26番「一乗寺」までは約30kmあるので、途中のどこかで一泊しなければならないが、いずれにしても御所谷と呼ばれる山中の三草川沿いに下って社町方面へ出なければならない。

本来の西国巡礼古道は清水寺西坂という山中の巡礼道を御所谷に下るらしいが、納経所で聞いてみたところ土砂崩れで通れないとのことだった。仕方なくウネウネと下る登山道を麓まで下って大回りしたが、途中で時雨に遇ったり黄昏に道を失ったりして、やっどこさっこ集落がある田園地帯に辿り着いたが、途中の御所谷は集落も民家も無い山中ではあったが、名前のようにどこか由緒がある土地柄のようでもあったし、また逆に〇〇上皇の悪霊などがウロウロしているような気味悪さも感じた。



(「右、ほっけ山」というのが次の札所一乗寺への巡礼古道であるが、現在は通行不能↑)

途中の路傍には下のような石仏もあった。何となく由緒を感じさせる雰囲気ではないか。

加東市指定文化財

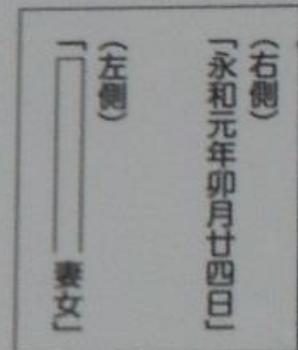
平成25年3月31日指定
所有者 上三草財産区

じぞうまがいぶつ 地蔵磨崖仏 1基

露頭する岩脈に地蔵菩薩立像が半肉彫りされています。

蓮華座上に立ち、舟形光背の内に浅く彫り込まれた尊顔は、地蔵菩薩立像としては厳しい目や口元をしています。右手で握る錫杖は斜めに刻まれています。

光背の左右にそれぞれ右のような刻書が認められます。永和元年(1375)の紀年銘から南北朝期の作例であることがわかり、蓮華座などに当時の作風をよく留めています。石造物の指標となる資料として貴重な存在です。



にそんせきぶつ 二尊石仏 1基

上三草の旧丹波街道沿いに建立されている二尊を刻んだ龜山石の板碑で、法量は、現高104cm、幅55cm、厚さ14cmを測ります。

向かって右側に阿弥陀如来坐像、左側に地蔵菩薩立像が刻まれています。像を刻むために背面を削り、蓮華座は浮彫りされていますので、本来は、この板碑はより厚みがあったことが分かります。

加東市域で二尊を刻む石仏は数少なく、本例は高砂市付近で製作され、持ち込まれたことが石材から分かります。

銘文は刻まれていないものの、蓮華座などの作例から磨崖仏と同様、南北朝期のものと推定されます。



今宵の宿は、滝野町という田園地帯にあった「やまや旅館」。6,500円。工事関係者の定宿にもなっているようで、安いのが取り柄だったが対応は良かった。



【第二十五番 御嶽山 播州清水寺】

天台宗 本尊：十一面千手観世音菩薩

真言：おん ばざら たらま きりく

開創：推古帝 35 年（627 年）

御詠歌：あはれみや 普き門の 品々に なにをかなみの ここに清水



参詣日：令和元年 11 月 11 日

第二十六番 法華山 一乗寺 (兵庫県加西市)



(懸造りの重文・本堂回廊から日本屈指の古塔、国宝・三重塔を観る)

朝が早かったせいか、参詣者は一人も居らず静謐で清浄な気が広がっている山中の寺であった。山中とはいえ、このような山奥によくぞこのような大伽藍を創ったものよと思わせるような大寺であった。私は往時の巡礼古道を辿って入山したが、今は通る人も無いようで淋しい山道になっていた。

この寺の開祖はインドから紫雲に乗って飛んで来たという法道仙人。この仙人の持ち物は一体の仏像と仏舎利と鉄鉢のみ。腹が減ったらこの鉄鉢を飛ばして供養を乞うたそう。或る時、瀬戸内海の高砂沖辺りを航海していた官米満載の船にこの鉢を飛ばして「一飯、恵んでくれやあい～」と頼んだが、船頭は「積んでいる米俵は朝廷に納める税物だ。一粒だってやれるものか」と取り合わなかった。

鉄鉢も為す術なく戻って来たが、何と驚くなかれ、積み荷の米俵が一俵残らず鉄鉢に付いて来たそうで、驚いた船頭は胆を潰した。仙人は笑って全部の米俵を船に返してやった。中に一俵だけ地面に落ちた俵があったが、その墜ちた場所は稲が良く稔って豊かな村になったという。兵庫県印南群米墜村、今の米田町よねだだそう。思うに、この法道仙人という人物は大陸からの渡来民族で、進んだ農業技術の指導や開墾、利水技術などをこの地方の農民に教えて崇敬されていた人達ではなかろうか。



(かつての巡礼古道から山門に入る)

【第二十六番 法華山 一乗寺】

天台宗 本尊：聖観世音菩薩 真言：おん ありきや そわか
御詠歌：春は花 夏は橘 秋は菊 いつも妙なる 法の華山

参詣日：令和元年 11 月 12 日



第二十七番 書寫山 圓教寺 (姫路市)



(摩尼殿[観音堂]の豪壮な懸造り。上は舞台造りの回廊)

第27番札所「圓教寺」は西国観音巡礼33札所の最西端に位置しており、姫路市北部の高台にある。西の比叡山とも呼ばれる天台の大寺院であり、西国33札所の中では奈良・興福寺、近江・三井寺と並ぶ三大寺である。標高400mほどの書寫山の山頂にあるが、ロープウェイで登れるので老若男女、観光バスツアー客など大勢の人出で大繁盛しているが、境内が広大なので、同じように大混雑していた京都の清水寺のような喧騒は無かった。境内の展望所からは、姫路市街地や播磨平野、その先には播磨灘の向こうに淡路島や小豆島も一望だった。



(境内の展望所から播磨平野の眺望)

前の第26番札所「一乗寺」からは25kmほど離れているので、一乗寺を朝一番に出ても納経時間に間に合うようにこの寺に着くためにはオール徒歩では間に合わないので、一部の区間をバスで飛天して何

とか納経時間には間にあったが、広い伽藍や御堂などをゆっくり観るには少なくとも半日～1日間は必要だろう。

さて、案内書きによれば、この寺の見所の第一は白砂の大広場に建つ「三之堂」だそうで、大きな御堂が三つコの字型に並んでいる。右側に大講堂（本堂）、中央には長大な食堂、左側には常行堂が並び、静謐な雰囲気の中に不思議な異境感が漂っていた。映画「ラストサムライ」のロケ地にもなったそうだ。また、ここから更に奥に進むと、境内の最奥には森閑とした奥之院があり、開山の性空上人を祀る開山堂がひっそりと建っていた。奥之院はちょっと寂しい場所で、何か鬼気が漂っているようだった。



(三之堂)



(奥之院の開山堂)

開山堂の軒下には、左甚五郎作と伝わる力士達が四隅の屋根を支えているが、その内の一人は重さに耐えかねて逃げ出したそう。

奥之院の裏山には和泉式部の歌塚がひっそりと建っていた。寺縁に曰く、或る時中宮彰子が紫式部や和泉式部などの女官を帯同してこの寺に詣で、開山・性空上人の説法を聞きたいと申し入れた。

ところが上人は権威筋は性に合わないらしくて居留守を使ってこの申し出を拒否した。和泉式部はこれを残念がって、主人に代って一句をしたため樹に枝折って下山した。上人はこの歌に感銘を受け、



人をやって中宮一行を呼び戻し懇ろに説法したという。この伝承を寺格の嵩上げのために使ったのかどうかは知らないが、参道のあちこちに和泉式部の一生を絵巻とともに記した看板が建っていて、如何にもこの寺が和泉式部と関係が深いという風な感じになっていたのは、両者の関係に仏縁という程の必然性も感じられずチョット合点がいかなかった。史実によれば、中宮一行が詣でた時には上人は既に亡くなっていた後だったそうだから、いずれ後世の作り事であろうし、ま、どうでもよいことである。

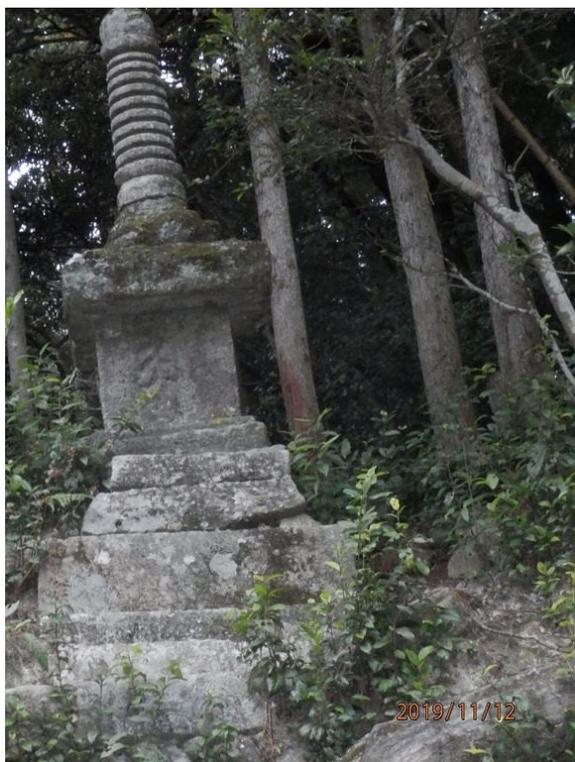
しかし、この時に和泉式部が詠んだ歌は、

暗きより暗き道にぞ入りぬべき はるかに照らせ山の端の月
というものだったそうで、これはなかなか味があるではないか。和泉式部と言えば和歌の才もさることながら、その奔放な恋愛遍歴や性遍歴は私の大好きとするところであるので、興味深い。「暗き道」とはそのような一旦入ったら抜け出せない女の負う宿命なのであろう。

この歌への性空上人の返歌は、日は入りて月まだ出でぬ黄昏に かかげて照らせ法の灯火、というも

のだったそうで、こちらの方はありきたりの御詠歌にも劣る単なる作文であって、上の和泉式部の歌に較べれば格段に質が落ちると言わざるを得ない。

大伽藍の摩尼殿に祀られている観音堂本尊は、崖に生えていた生きたままの桜の生木の幹に性空上人が刻んだ六臂の如意輪観音で、そのために岩山の中腹に懸崖造りの鞘堂を建立したのが摩尼殿の始まりであるそう。この本尊は毎年一回4月の観音祀りの日にしか開扉されないが、参道の傍に西国33札所の観音様が祀られていて、その中に下右のようなレプリカが祀られていた。頬杖をついて首をやや傾けたお姿は如意輪観音そのものであった。



(和泉式部の歌塚。兵庫県最古の宝篋印塔だそう)



(この寺の本尊、六臂如意輪観世音菩薩レプリカ)

圓教寺付近には宿も無く、唯一の宿泊施設であるこの寺の宿坊を当てにしていたのだが、宿坊は団体客のみ宿泊可とのことで、宿探しに往生した。いろいろ探した結果、寺からはかなり離れているが「ニューサンピア姫路夢前」という旧厚生省系のリゾートホテルが取れた。このホテルは山中にあり、行く途中で暗闇になったのでルート案内の電話をしたところ、麓の県道まで宿の車で迎えに来てくださった。シニア割引もあってなかなかよろしかった。素泊まり 6,480 円。

【第二十七番 書寫山 圓教寺】

天台宗 本尊：如意輪観世音菩薩 真言：おん ばらだ はんどめい うん

開創：康保3年（966年）

御詠歌：はるばると のぼれば書寫の 山おろし 松のひびきも 御法なるらん

参詣日：令和元年 11 月 12 日



第二十八番 成相山 成相寺 (京都府宮津市)



(入母屋造に唐破風をつけた重厚な本堂)

一つ前の札所である姫路の第27番「圓教寺」から、次の札所第28番「成相寺」(京都府宮津市)までは兵庫県を南北に横断して瀬戸内海の播州から日本海の若狭湾の丹後に至る120kmを歩かなければならない。平均して1日に20km歩くとすれば、この縦断だけで一週間近く掛る寸法になるが、残念なことにこの区間には福知山などの大きな町を除いては宿が無い。おまけに西国古道は大きな町沿いを通っている訳ではないので、かつては商人宿なども少しはあったらしい古道の道は今は廃村になっている場所も多い。

と言う訳で、前夜泊まった姫路北部の夢前町からJR播但線の一番近い駅(甘地駅)までの峠越えの山道を15kmほど歩いて、そこからはJR播但線と丹後鉄道を乗り継いで天橋立駅に飛天、駅から暮れなずむ天橋立の松林を1時間ほどブラブラと歩いて渡って対岸の民宿に止宿した。民宿「みゆき」。

この民宿は親切な宿で、宿代(素泊まり4,500円)も有り難いが、雨が降っていた翌朝、雨の中を歩いて山上まで登るのは大変だろうと車で山門まで送って下さった。おまけに、地元参詣者ということで、入山料もタダにして頂いた。雨の中を下って行かれるご主人の車に最敬礼をして感謝の意を表した。

さて、この成相寺はどこかの仙人が上空を飛んで来た時にあまりにも風光明媚な天橋立の景観に感得するところがあって一庵を結んだのが始まりだそう。今から1300年前のことであった。

御本尊は聖観世音菩薩。美人観音として名高いらしいが、秘仏なので拝観できなかった。



(雨に煙る天橋立。左は宮津湾、右は阿蘇海)

また、本堂内陣の木彫りの龍は顔が正面を向いている珍しい龍である。伝左甚五郎作、眞向の龍。



宮津の町は江戸時代には丹後縮緬の産地として栄えた。そのために多くの商人の往来があり、また縮緬の集積地やそれを積み出す宮津の港も繁盛したという。この成相寺も、宮津の町の人出で賑わったという。下の成相寺曼陀羅図にも壮大な伽藍の様子が描かれている。



【第二十八番 成相山 成相寺】

橋立真言宗 本尊：聖観世音菩薩 真言：おん あろりきゃ そわか

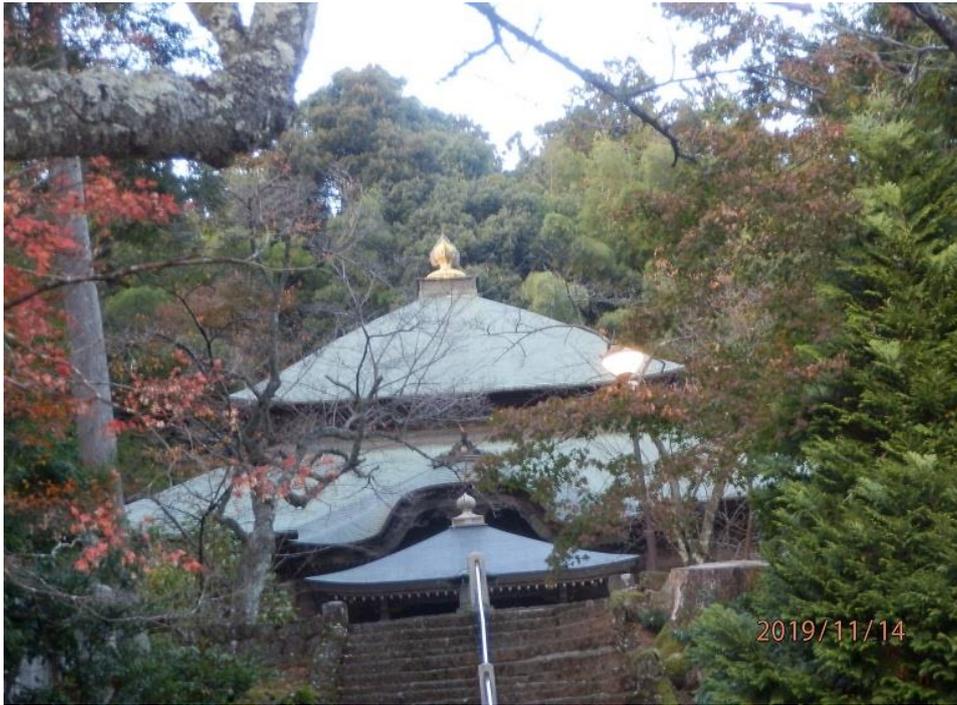
開創：慶雲元年（704年）

御詠歌：波の音 松のひびきも 成相の 風ふきわたす 天橋立

参詣日：令和元年 11月 14日



第二十九番 青葉山 松尾寺（京都府舞鶴市）



（香炉覆屋根を併せると三層の宝形造が特徴の本堂）

この日の朝は一つ前の札所・成相寺へ詣で、午後は舞鶴の「引揚記念館」を見学に行っていたので、この松尾寺へは徒歩で廻る時間がなくなり舞鶴駅から最寄りの JR 松尾寺駅まで電車に乗り、そこから片道 1 時間の山道を往復した。

余談であるが、私は 3 歳の時に母に連れられて今は北朝鮮になっている元山（ウォンサン）から引き揚げて来た。父親は抑留されて帰国も後になった。母親の話では幼児連れということもあって大変な苦勞をした末にやっと釜山まで辿り着き、そこから引揚船で引き揚げて来たのだという。3 歳の私はやせ細って 1 歳くらいの目方しかなかったそうだ。

引き上げ船と言えば興安丸という船名や「岩壁の母」で有名な舞鶴港とばかり思っていた私はこの機に是非当時の引き上げの様子などを観たいと思い、舞鶴港にあるという舞鶴引揚記念館を訪ねたのである。

聞いてみると、この舞鶴への引き揚げはナホトカからの引き揚げが主で、朝鮮からの引き揚げ港は博多か米子であったことが分かったが、当時の悲惨な抑留生活や引き



揚げの写真などを観ていると涙が止まらなかった。今から思えば、既に鬼籍に入った母親にも父親にも親不孝ばかりしてきたのが、誠に心残りである。

さて、本筋に戻ろう。

JR 松尾寺駅というのは無人の山間の駅で、そこから田圃の畦道のようなところを歩いて登った。西国古道通しと思われる地道に入ると、草茫々の獣道となってこのところ通った人も無い様相であった。

この寺の本尊は西国観音霊場 33 札所唯一の馬頭観音である。この観音様は秘仏で開帳は 77 年に 1 回だそうで、住職でも拝める人は少ないのではなかろうか。お前立も祀ってあるが、薄暗い内陣の奥にあるのでよく見えなかった。



(内陣の奥にお前立の馬頭観音)



(馬頭観音お前立。どこかの HP から盗用)

ところで、この寺の老師（今は名誉住職、松尾心空師）は西国霊場 33 札所の巡礼古道を復元された方であり、『西国札所古道巡礼』、『西国三十三所古道徒歩巡礼地図』などの西国巡礼書や、『極楽往生手形』、『人生まんだら』などの説法の本などの著者でもある。京都大学哲学科出身だそうだから鄙の山寺の住職としては珍しい方であろうが、どのような経緯があったのか他人事ながら興味が湧く。

納経所でご朱印を受けた時に世間話の積りで、私はここの老師の著わされた上記の西国古道巡礼書 2 冊を頼りに西国霊場を那智の第一番青岸渡寺からここまで歩いて来たと話したところ、納経所の方が“ちょっとお待ち下さい。今日は老師が居ますので呼んで来ます”と仰って、大柄な老師が出て来られた。年齢 90 歳を超えておられるが、足腰、応対共に矍鑠としておられ、どこをどのように廻って来たのか、あの古道は台風で壊れたと聞いているが今はどうなっているか、どこそこの札所の山主とは昵懇にしているなど、懐かしそうにお話になった。老師によれば、西国霊場 33 札所を歩きで廻っている人は年間で僅か 30 人ほどとのことであった。

同じ西国の札所、泉南の「葛井寺」の山主が送ってくれた柿が届いているのでお一つどうぞと立派な柿を手渡して下さり、またお茶と虎屋の最中も御馳走になった。今まで四国遍路を 2 回、坂東や秩父の観音霊場も歩きで廻ったが、これらの 200 近いお寺でこのような茶菓の接待に与ったことは無かった。これも歩きで廻っている仏縁であろうかと馬頭観世音菩薩の御真言「おん あみりと どはんば うん はった そわか」を心中で 3 回唱えて有り難く頂戴した。



(松尾寺 松尾心空老師)

松尾寺は雪深い丹後の山中にあって、冬には1mほどの雪が積もるそうだ。境内のすぐ東は福井県の若狭であるから、なるほどそのような気候であろう。



(松尾寺駅から松尾寺への道。寺は最奥の山の中腹)



(松尾寺の山門。古びた風格があった)

本日の宿は西舞鶴駅前のグランドホテル別館 (4,700円)。



(今夕の夜遍路。左は値段が高かったの一杯一品でやめて、右に梯子)

【第二十九番 青葉山 松尾寺】

真言宗醍醐派 本尊：馬頭観世音菩薩 真言：おん あみりと どはんば うん はった そわか
御詠歌：そのかみは 幾世経ぬらん 便りをば 千歳もここに 松の尾の寺

参詣日：令和元年 11 月 14 日



第三十番 竹生島 寶巖寺 (滋賀県長浜市)



(琵琶湖竹生島・寶巖寺。中央の白い覆いは修理中の観音堂。右端の茶色屋根2棟は都久夫須麻神社)

一つ前の札所、丹後の第29番「松尾寺」の次の札所は、福井県の若狭を挟んで80kmほど先の琵琶湖の竹生島にある。第30番「竹生島 寶巖寺」。日が短くなった晩秋では全部歩けば3~4日間ほど掛かる。今回は後が詰まっていたので、行路の半分ほどはJR小浜線という鄙びた電車でちょこちょこ飛天しながら、若狭湾、小浜湾から鯖街道、若狭街道を経て、竹生島への渡船が出る今津の町まで2日間ほど歩いた。この古道ルートもなかなか味があったので、余談にはなるが竹生島に渡る前に少し記しておきたい。まずは若狭湾・小浜湾から。

舞鶴から若狭を通過して福井県敦賀に抜ける国道は丹後半島と越前岬に囲まれた若狭湾に沿って付けられている。若狭湾に面した海岸線は険峻な岬がフィヨルドのように出入りしており、そのため山に囲まれた小さな湾が幾つかあり眺望が良い。小浜湾もその一つであり、岬の突端には大飯原発や高浜原発が立地している。



(小浜湾。中央奥の岬の突端に大飯原発がある)

大飯町から小浜市に入った所に岡津製塩遺跡というのがあった。海浜公園にもなっていた。

若狭街道 御食国若狭の原点と鯖街道のメインルート

岡津製塩遺跡

The remain of salt making in Okozu

当遺跡から出土した製塩土器が大型なことから、大量の塩を生産した官営工房と推定されています。奈良時代、若狭は重要な塩の供給地でした。奈良の平城京からは若狭の塩の荷札木簡が多く出土しています。国史跡。



(岡津製塩遺跡)



(製塩遺跡から小浜湾を望む)

この付近からは小浜海岸の屹立した山腹に若狭自転車道というサイクリングロードがウネウネと走っていて、常に小浜湾の海を左手に見ながら歩いたが、なかなか風情があった。

その夜は小浜のビジネスホテルに泊まり、翌日は“鯖街道”を歩き、福井県の“熊川宿”から滋賀県の若狭街道に入って琵琶湖北西畔の港町・今津に宿をとった。熊川ノ宿は、若狭と近江を結ぶ宿場町で、若狭で取れた海産物を京へ運び、また京からの諸物資を若狭へ運ぶ流通の拠点として栄えた。往時は200軒の旅館や問屋、商家があり、牛馬も1日1000頭が通ったという。当時の徳川藩譜代領主・浅野長政が重要視して造った宿場であるそう。



鯖街道であるから若狭で取れた新鮮な鯖寿司が売り物で、飛び切り新鮮な鯖寿司はここでしか食べられませんというキャッチフレーズに惹かれて土産物&和食屋に入ってみた。平生は鯖は喰わない習慣の小生も何かを喰わなければいけない雰囲気になったので、鯖寿司を注文してみた。身が厚い鯖は新鮮で臭みも無くプチプチとしていて美味かったが、二切れ 800 円とチト高かった。



(鯖寿司を喰った鯖寿司の店「まる志ん」)



(福井県から滋賀県に入る峠のトンネル。寒風トンネル。このような誰も通らない淋しい場所をトボトボと歩いた)



竹生島に渡る観光船が出る今津港の棧橋の傍に、「琵琶湖周航の歌資料館」という小さな記念館があった。

この歌は若い頃によく歌ったものだった。旧制第三高等学校（現京都大学）ボート部の部歌だったが、三高寮歌にもなって学生歌としても人気が高く、多くの



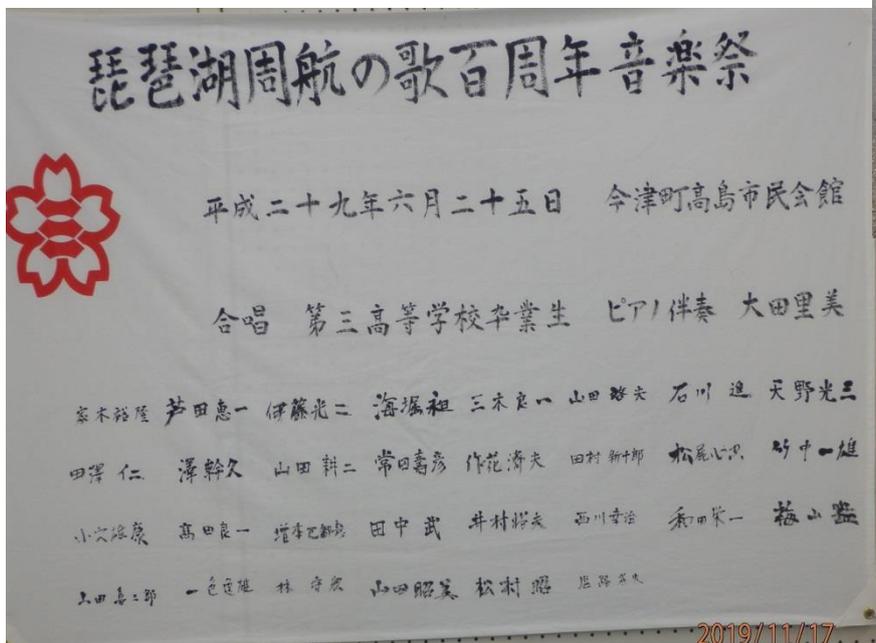
歌手が歌ってヒットした。特に加藤登紀子のレコードは80万枚という当時としては大ヒットとなった。

この資料館は小さな資料館ではあったが、琵琶湖周航の歌に関する往時の色々な資料がきちんと展示されていて、また、一人しか居ない係の女性（学芸員？）も懇切丁寧に説明されて親切だった。

話題が西国観音霊場巡礼に及んだ時に、ここ今津に来る前に一つ前の札所の舞鶴「松尾寺」に詣でて松尾心空老師にもお目に掛けて来た話をしたら、2年前に今津港で開催された「琵琶湖周航の歌・誕生百周年記念会」に老師も参加されていて、その時の寄せ書きが二階に展示されているので見て行って下さいとのことだった。前項でも触れたが（P.127）、老師は旧制第三高等学校の寮生だったのであろう。



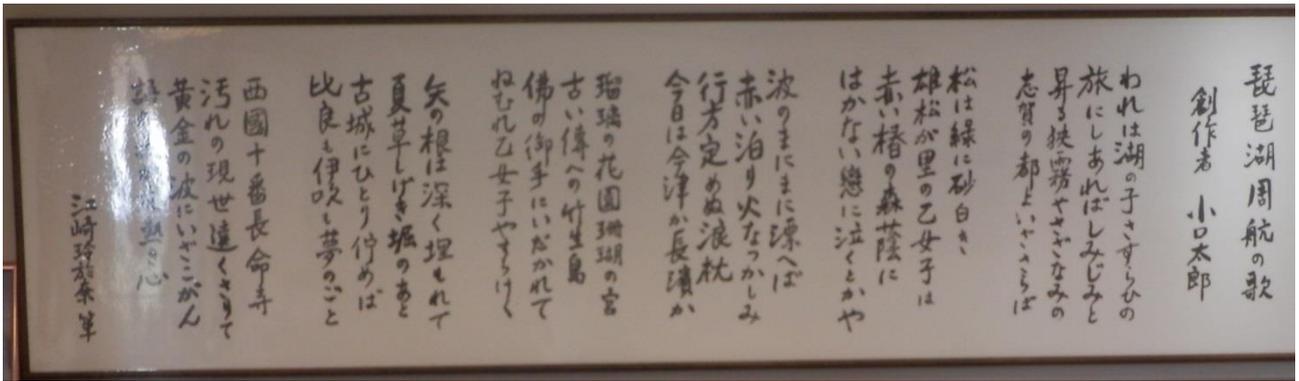
（↑今津港付近にあった記念碑）



（←参列者欄、上から二段目、右から二人目に松尾老師の署名が見える）



（狭いながら落ち着いた展示風景）



(展示されていた江崎玲於奈博士筆の「琵琶湖周航の歌」歌詞)

私事で恐縮であるが、私はボート部ではなかったが、田舎の駅弁大学には学内レガッタというサークル対抗戦の漕艇大会が毎年5月に行われていて、ある年我々のサークルが優勝した。その時に「ストローク」を漕いでいたのが私である（その時のクルーが右写真。右端が小生。56年前のもの）。



胸に縫い付けられているのは我々のチーム名“ARGO”で、英雄神イオスが黄金の羊を探しに航海に出たというギリシャ神話の巨船の船名に因んで名付けたものであった。私事を重ねて恐縮であるが、田舎の高校3年の頃には柄にもなく京大に憧れていたもので、この歌には余計に思い出が深い。

資料館には売店もあって、背中に「われは湖の子・・・」の歌詞が染め抜かれたTシャツがあったので、さる駅弁大学のボート部出身の愚息夫婦にお揃いの2枚を買ってきて進呈した。



この日は今津の「丸茂旅館」に泊まった。設備は古かったが、対応は昔気質で実に気持ち良いものだった。

さてさて、道草を喰いすぎたので本論に戻ろう。琵琶湖の北端に浮かぶ竹生島は周囲僅か2km程の小さな島で、寶巖寺と都久夫須麻神社が鎮座ましましているだけで、民家などは全く無い無人島である。周囲は断崖絶壁となっていて、上陸できる場所は僅かにこれらの寺社への参道の小さな栈橋一つだけである。



このような人里離れた無人島の懸崖によくぞ寺や神社を造ったものと感心させられるが、寺の縁起によれば、『聖武天皇が夢枕に立った天照皇大神より「江州の湖中に小島がある。

その島は弁才天の聖地であるから寺院を建立せよ。さすれば、国家泰平、五穀豊穰、万民豊楽となるであろう」というお告げを受け、僧行基を勅使としてつかわし、堂塔を開基させたのが始まり』だそうなの。

それ以来、天皇の行幸が続き、また伝教大師、弘法大師なども来島、修業したというから、古代から仏と神だけが住む神仏習合の別世界の霊地として神聖視されていたのであろう。或いは、宗教民俗学の五来重博士が言うように、湖東地方の民衆の葬送（水葬）の地であったのかも知れない。確かに、湖東から西方を観ると、波の彼方に夕陽が沈む琵琶湖の水面に浮かんでいる黒々とした竹生島は西方浄土にも見えたことであろう。

この寺の本堂本尊は安芸の宮島、江の島の弁財天と並んで日本三弁財天と称されている弁天様で、その中でも最古の建立であるので「大弁財天」と呼ばれている。観音堂に祀られている観音霊場の方の本尊は千手千眼観世音菩薩。どちらも60年に一回開帳の秘仏であり、通常はお前立を拝む。



(左：大弁財天、右：千手千眼観世音菩薩。何れもお前立ち、同寺 HP から引用)

竹生島は観光の島でもあって、多くの参詣者や観光客でごった返していた。おまけにご朱印も本堂・弁財天、西国・千手千眼観音、西国御詠歌の3種類があるので、行列ができていて1時間以上待たされた。

余談になるが、寺院には山号、院号、寺号が夫々付けられていて、通常は山号と寺号を併記するが多い。

山号は通例は「○△山」という「山」が付けられており、この寶巖寺のような「竹生島」などという「島」が付けられているのは、西国33霊場札所だけでなく、坂東霊場、秩父霊場、それに四国88ヶ所遍路を合わせても、山号に“島”が付いているのは唯一この「竹生島寶巖寺」だけである。

(このような弁財天も祀られていた⇒)



【第三十番 竹生島 寶巖寺】

真言宗豊山派 本尊：千手千眼観世音菩薩 真言：おん ばざら たらま きりく

御詠歌：月も日も 波間に浮かぶ 竹生島 船に宝を 積むこちして

参詣日：令和元年11月17日



(餓鬼草紙、本文とは関係ありません)

第三十一番 姨騎耶山 長命寺 (滋賀県近江八幡市)



西国観音霊場33札所の巡礼順路は、丹後の2寺（成相寺と松尾寺）から若狭を経て琵琶湖・竹生島の寶巖寺に参った後、竹生島から船で琵琶湖南東岸の近江八幡に渡り31番・長命寺、続けて32番・観音正寺を詣でた後に美濃の33番・華巖寺で満願とするのが正式であるが、現在は竹生島から近江八幡への船便が廃止されていて、この正式な順路を辿ろうとすれば湖北を大迂回して湖南に戻ってくる大回りとなり、西国巡礼古道でもないの、宇治から山越えの西国古道を大津に下った時にそのまま近江八幡まで足を延ばしてこの近江八幡の2寺を詣でた。

さて、長命寺は安土城址のある丘陵地が琵琶湖東岸に突き出た岬の突端の中腹に建っており、その山麓には長命寺港という小さな港もあった。参道の808段ある長い石段をウンウンと登って行くと足下に琵琶湖の入り江が見えてその向こうには比良山や比叡山の山並みも見えた。

この寺の本尊は一つの厨子の中に千手観音、十一面観音、聖観音の三仏を一体として祀ってあるそうだが、秘仏なので拝顔できなかつた。

【第三十一番 姨騎耶山 長命寺】

単立（天台系）

千手十一面聖観世音菩薩

御詠歌：八千年や 柳に長き

命寺 運ぶ歩みの

かざしなるらん

開創：推古天皇27年（619年）

参詣日：令和元年10月7日



（境内からは足下に琵琶湖の入り江、その向こうには比良山系）

第三十二番 織山 観音正寺 (滋賀県近江八幡市)



(寺域を警護する露座の仁王像、奥突き当りが本堂)

この観音正寺も前の札所と同じ近江八幡にある。山麓の石寺集落が入山口。ここから山門まで1200段の石段を登るが、小1時間掛かった。かつては西国札所随一の難所だったという。石寺集落は戦国時代、日本で最初に楽市が開かれた場所だそうで、なるほど、そのような由緒ありそうな集落であった。今は当地で採れた野菜などの朝市になっているようだ。



(現在の石寺楽市)



(入山口の道標 左=左かんおんし すく 彘ち川
右=従是観音正寺十二丁)

この寺は平成になってから本堂を焼失、本尊も同時に焼失したが、10年後に本堂を再建し、印度から特別許可を得て輸入された香木白檀 23 トンで再建された丈六 (約 6m) の手千眼観世音菩薩である。

光背にも小さな手と眼がびっしりと刻まれていてまさに千手千眼である。柔和なお顔であった。

また、境内には石を積んだ庭園がしつらえてあった。この寺が位置している^{きぬがさやま}織山は石だらけの山であるから、これも自然の地形でもあろう。この山全体が戦国大名の近江源氏・佐々木一族の山城であったから、裏山には至る所に崩れた石垣や城郭の遺構があった。



(本尊 千手千眼観世音菩薩 同寺 HP から引用)



境内にはちょっと珍しい形の石塔があった。宝篋印塔の側面に浮き彫りされた仏像は観音菩薩であろうか？

また、境内からは琵琶湖畔に続く蒲生野ののどかな田園風景が眺められた。

ピラミッド形の山は近江富士として親しまれている三上山であろうか。



さて、帰路は、逆順ではあるが近江のもう一つの札所「長命寺」へ廻るために山越えで安土城方面に向かった。山城跡の崩れた石垣などを観ながら稜線に出ると、次頁のような看板が出て来た。

この道は西国古道でもあり、ハイキングコースにもなっている山道である。“この先入山される方は、・・・”と言われても、他に逃げる道が無いのだから二階に上げられて梯子を外されたような気分になった。

先程、観音正寺で西国古道の道を聞いた折に、途中の麓にある桑実寺という寺院（西国霊場の札所にはなっていない）の境内を通過する時に突然ベルが鳴るが、これは寺の木戸の通行センサーが働いて鳴るものなので、びっくりしないようにとの注意があった。

なるほど、仰るとおりであった。山道を下って行くと、寺に入った所で突然けたたましくベルが鳴り、寺男が木戸に現れて入山料を徴収した。伽藍を見学するでもなく、寺寶を拝観するでもなく、ほんの数歩だけ境内を横切らせて頂くだけなのに、「入山料」とは納得がいかない気持ちになってくる。マ、悲しいことに、小生が広大な心を未だ持っていない下司であるからかも知れないが・・・。

確かに、広い寺域を持っている寺院では参道やハイキングコースの整備にも経費が掛かるので、受益者負担の原則で道を利用する人からそれなりの使用料を徴収することは当然であろうが、仏法の世界であるからには払う人がお布施として気持ち良く供奉できるような形にしたら如何であろうか。例えば、入山口から山門までの参道を舗装して車で入れるようにしてある寺院などで、「私道通行料」や「駐車場使用料」などと言う名目ではなく「参道整備ご協力御志」という名目で幾許かを頂戴している寺があるが、これなどは気が利いた心遣いであろう。

通行人をセンサーでキャッチしてベルを鳴らして寺男が通行料を徴収するなどということは、この寺の仏法が目線が衆生に向いているのでなく、俗にいう上から目線だからであろう。そういえば、この寺のパンフレットには、当寺は天智天皇の勅願寺院として創建され、足利某將軍も仮幕府を置いていたことがある名刹と記載されている事実がこれを裏書きしていると思われる。

歴史小説家の杉本苑子が『西国巡拝記』で繰り返し述べているように、寺の品格はその由緒、歴史、寺寶・国宝の多寡、伽藍などの壮大さにあるのではなく、如何に仏法を庶民に伝えているかにあるということ今少し考えてみたら如何であろうか。桑実寺にはちょっと悪口が過ぎた。



【第三十二番 織山 観音正寺】

単立 本尊：千手千眼観世音菩薩 真言：おん ばざら たらま きりく

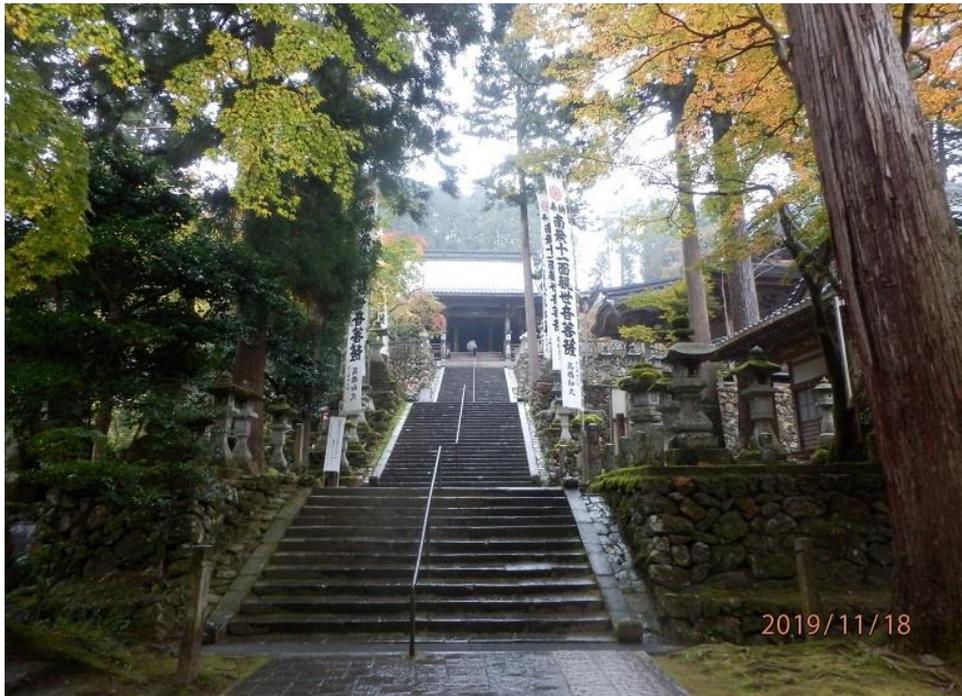
創建：推古天皇 13 年（605 年）

御詠歌：あなとうと 導きたまえ 観音寺 遠き国より はこぶ歩みを

参詣日：令和元年 10 月 7 日



第三十三番 谷汲山 華嚴寺 (岐阜県揖斐川町)



(秋霖に霞む華嚴寺境内)

西国観音巡礼 33 札所の結願寺、谷汲山華嚴寺までは、琵琶湖竹生島の寶嚴寺から船で長浜に渡り、長浜から中山道を米原、関ヶ原、大垣などを經由して 50 キロほど歩いて行った。途中の中山道では名所旧跡も通ったがこれは割愛して、ここでは途中でお世話になった事の御礼だけ記しておきたい。

前夜泊まった大垣から美濃赤坂を經由して池田町に入ったが、この先の西国古道が分からなくなったので、途中にあった役場で道を尋ねた。役場でも西国巡礼古道を知っておられる方は居られなくて、書類棚を引っ掻き回して地図類を探して下さったのであるが、期待する物は見つからず、役場を辞して大凡の方向にトボトボと歩いて行った。1 キロくらい歩いた頃、後ろから追っかけて来る人が声を掛けてきたが見れば先程の役場の人だった。それらしき地図が 1 枚見つかったので届けに来たとのことだった。

聞けば、この方は今朝役場へのマイカーでの出勤途上、美濃赤坂にある石灰工場の横の道路をトボトボと歩いていた菅笠遍路姿の人を見かけたがそれが貴方だったので、態々届けに来たとのこと。この辺りで歩きの遍路姿を見ることは滅多に無いので何分の供養にもなるかと、忙しい役場の仕事の合間を縫って届けて下さったのだそう。これも観世音菩薩の仏縁であろうかと有り難く頂戴して深々と頭を下げた。歩いて廻っていることへの験、功德でもあろう。役場は池田町役場と思われ、届けて下さった役場の方は 40 歳くらいの方だった。確か税務課か建設課に居られた方だった。ここに記して感謝する次第である。

さて、那智の第一番札所「青岸渡寺」を出発して都合 45 日間歩いて辿り着いたここ結願寺「谷汲山」は秋霖に濡れていたが紅葉の真っ盛りでもあった。流石、西国の満願寺だけあって参詣者も多く、参道脇の門前町には多くの軒が並んでいた。往時はその殆どが参詣宿だったそうであるが、現在は宿屋は 2、3 軒ほどで、他は土産物屋や食堂、茶店などに転業しているのも時代の流れであろう。

境内は大変広く、伽藍も沢山あったが、雨の中を歩いて来てズブ濡れの態になっていた身には拝観ど

ころではなくまた時間も無かったので、結願成就を報告すべき本堂、満願堂、笈摺堂を拝み、ご朱印を頂戴して、精進落しの鯉を撫でたところでタイムアウトとなった。本当は西国33札所の本尊が路傍に祀られている奥之院まで往復2時間の足を延ばしたかったのであるが、雨の中では年寄りの冷や水になるので割愛した。

ここのご朱印は本堂、満願堂、笈摺堂の3種類のご朱印があり、夫々現在、過去、未来を表わしているのだそう。マ、満願はしたが、現在過去未来のどれをとっても因縁がよろしくない小生には特段のこともない。何も断らずにご朱印をお願いすれば、3種類のご朱印が押されて戻ってくる訳で、マ、3倍のご朱印料が入るといふ商売上手な仕掛けとなっているようだった。

1寺で3つものご朱印が同寺に纏めて頂戴できるということは、逆に考えればそれだけコストパフォーマンスが良く、従って功德を積めるスピードも速いというべきかも知れないが、「鯛の頭」ほどの信仰心も無い小生はやはり救って貰えそうにない。只々、六道の闇を彷徨うのみ。



(紅葉真っ盛りの門前町)



(豪壮な入母屋造りの仁王門。右側の門前旅館「立花屋」の看板には、歓迎「大塚様」の文字も)



(本堂裏陣に祀られていた仏像。ちょっと古そうで風格があった)



(笈摺堂。満願になって脱いだ笈摺が奉納されている)



(満願堂)

満願の夜はこの門前町のそれも仁王堂の直ぐ前の旅館「立花屋」に泊まった。この参詣宿は古くから門前旅館を代表する老舗旅館だそうで、設備は古かったが応対や料理は結構であった。料理の種類によって宿代が異なるが、小生が一番安価な料理で2食付9000円にした。最高は松茸づくしという料理で15000円程らしい。他の宿泊客の宿泊料金のクラスが分からないように、宿泊料クラス(料理の値段)により食堂を別々にしているところがニクイ。

徒歩での巡礼満願お祝いということで、売店で売っている満願煎餅も頂戴した。翌朝は路線バスが廃

止されていて最寄駅までの足が無くて困っていると、おかみさんがマイカーで樽見鉄道の谷汲駅まで送って下さった。



(仁王門すぐ前の立花屋旅館)



(樽見鉄道「谷汲駅」。鄙びた無人駅)

【第三十三番 谷汲山 華嚴寺】

天台宗 本尊：十一面観世音菩薩 真言：おん まか きやろにきや そわか

創建：延暦 17 年（798 年）

御詠歌：世を照らす 仏のしるし ありければ まだともしびも 消えぬなりけり（本堂）

万世の 願いをここに 納めおく 水は苔より 出る谷汲（満願堂）

今までは 親と頼みし 笈摺を 脱ぎて納むる 美濃の谷汲（笈摺堂）

参詣日：令和元年 11 月 18 日



番外札所 東光山 花山院菩提寺 (兵庫県三田市)



(花山院菩提寺境内からの眺望 中央奥：六甲山、右奥に小豆島、手前左：有馬富士)

[御詠歌に曰く、有馬富士 ふもとの霧は 海に似て 波かときけば 小野の松風]

麓^{にんじ}の尼寺という集落から寺までの急坂をウンウン唸りながら登って行った。僅か1k程の坂道に30分も掛かる心臓破りの急坂であったが、辿り着いた境内からの眺めは足の疲れを吹っ飛ばすほど素晴らしかった。晴れていれば瀬戸内海とその向うに浮かぶ小豆島まで見えるそうだが、生憎今は春霞に霞んでいて三田盆地^{さんだ}の先の六甲山くらいまでしか見えなかった。

さて。

折から平成最後の2019年4月末に大阪で大学時代のサークル同窓会の関西支部の集まりがあり、令和元年発足の超長期ゴールデンウィーク10連休期間中ではあったが、それに出席した足で引き続きとりあえず第1番・青岸渡寺(那智)から第2番・紀伊三井寺(和歌山市)、第3番・粉河寺(紀の国市)までの和歌山県内3札所を10日間掛けて歩く予定で西下した。

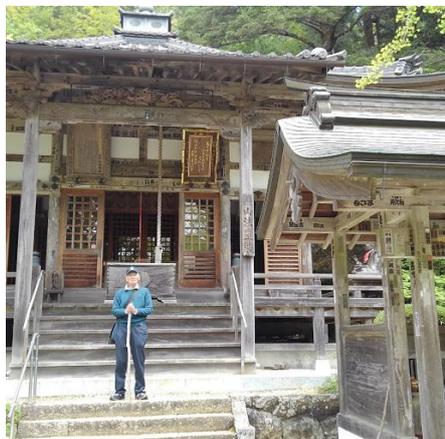
ところが、宿の予約で最初の宿泊地の旅館組合に電話を入れたところ係員曰く「当地は辺鄙な場所ではありますが、令和改元さま様でお蔭様でこの10連休はピンからキリまでどこも超満員でございます。今頃になって宿をお探しとは誠に申し訳でございます。マ、1泊10万円の部屋なら或いは1部屋くらいなら探し出せるかも知れませんが、イッヒッヒ・・・」と口ではお気の毒様といいながら、心中では今頃ノコノコ予約の電話を入れるようでは癡癡老人ではないかと半ば軽蔑気味の御言葉、あ～アの阿。

そういう訳で同窓会の後、いつもの関西での定宿である西宮在住の同サークルの学友の家に一宿一飯の恩義^{あづか}に与った翌日、その儘また自宅にトンボ返りするのもナニだからと、同じく目下西国札所観音を巡りつつある彼に案内して貰って彼の家から近い番外・花山院菩提寺に詣でることにした次第である。

花山院(花山法皇)は、藤原氏一族の政争の犠牲となって若くして18歳で皇位を奪われ京都山科の元慶寺(同じく西国番外札所)で落飾、その後観音巡礼の旅に出た。西国観音巡礼を開創した奈良・長谷寺の徳道上人が閻魔大王から授かり観音巡礼の布教の途で心身尽きて埋納したという三十三の宝印を掘り起こして観音巡礼を復興するための旅だったそうだ。三十三の閻魔大王宝印を掘り起こして西国霊場巡礼を再興した花山院は「西国霊場中興の祖」と呼ばれている。

花山院は、西国巡礼中に播州清水寺（西国観音巡礼第25番札所）から美しい山（東光山、或いは有馬富士か？）を眺めて深く感得するものがあった。巡礼を終えた後、この山を終の棲家と定めて仏教の修業に精進、41歳で生涯を閉じた。法皇の菩提を弔い、ここを花山院菩提寺とした。法皇が生涯を閉じたこの寺は西国霊場の中でも別格の聖地とされ、かつてはまずこの寺を参拝してから巡礼に出たという。

寺には薬師堂（この寺本来の本尊・薬師如来を祀る本堂）と花山法皇殿（本尊は十一面観音と花山法皇像を祀る本堂）が並び、やや小高い場所には法皇の御廟がある。



（花山法皇殿本堂）



（法皇殿の右隣、薬師堂本堂）



（花山院御廟）

見た目には法皇殿の方が立派な造作で主堂のようであるが、納経所の若僧の話では西国三十三霊場巡拝の方が人気が高いから法皇殿ばかりが注目されるが、本当は当寺の本尊は薬師瑠璃光如来であり、花山法皇殿は、マ、後の世に出来た子会社という位置づけにしか過ぎないそうだ。親会社・子会社の関係はいつの世でもどの商売でも同様に、子会社を「蔑^{ないがしろ}にする企業はいずれ親会社の放漫経営によって破綻するのが世の常である。この寺も西国観音霊場巡拝者のお布施で生きているのであろうから、この小坊主ももう少し世の中のことを勉強した方がよからう。

余談であるが、この若僧は説教好きでもあるのか、「ご宝印というモノはスタンプラリーではない。当寺のご宝印は、当寺本来の本尊・薬師如来、及び西国観音霊場の本尊・十一面観音、加えて境内に鎮座まします三宝荒神の三つの種字（神仏を一字で表象する神聖な梵字の意）が彫られている非常に珍しい御宝印（朱印）であるから、有り難く三拝九拝して頂戴し合掌禮拝するように・・・云々」とノタマツた。



（当寺の御宝印）

ブスツとして一言も口を利かずご朱印帳を投げて返すような愛想の無い納経所の坊主に較べれば、何事であれ本来の意味の説教をしてくれる僧はそれなりに有り難いモノであるが、マ、信仰などというメンタルな心象は個人個人によってその塩梅がそれぞれ異なるものであろうから、同じ説教でももう少し色が付いた色即是空の如き説教の方がよろしいのではなからうか。

因みに、手元にあった納経帳で他の寺のご朱印を調べてみたら、同じ西国三十三観音札所の第2番「紀三井寺」（和歌山市）のご朱印の種字も3種、第3番「粉河寺」（紀の川市）にいたっては何と6種も種字が彫られていたゾ。

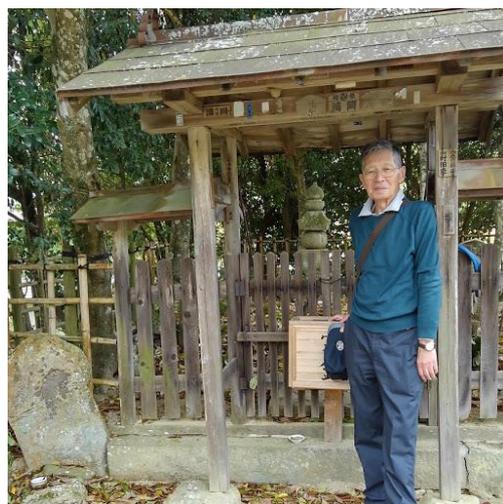
（粉河寺の御朱印⇒）



ちょっと道草が過ぎた。同じ霊場巡拝にしても、小生はこのような“斜視”や“僻目”でばかり眺めているから霊験も御利益も顕れないのかも……。反省の意味も含めて、この若僧の名誉回復のために一言付加すれば、同じ「じゅんれい」でも、「巡礼」とは札所の順番に拘らずに巡る意味であり、一方、順番どりに巡る場合には「順礼」と言うのと教えてくれた。私の場合は後者の口である。

さて冒頭で、麓の集落は尼寺^{にんじ}という地名であると書いたが、これには次のような伝承があるそうだ。落飾の身で全国の仏教行脚に憂き身をやつしこの寺を終の棲家とした花山法皇を慕って、かつて宮廷で仕えた女官 11 人が法皇寵愛の弘徽殿の女御の位牌を携えてこの地に移り住んだが、女人禁制のために入山が許されず、麓で尼僧となって生涯を終えた。そこの小高い丘の上に一つの五輪塔と小さな 11 ヶの墓石が祀っており、前者が弘徽殿の女御の五輪塔、後者が女官達の墓であるという。十二尼妃の墓という。

その手の話が大好きな小生は、これは見ずばなるまいと麓の田圃の中にあるその墓を見に行った。うらぶれた淋しい雰囲気のところではあったが、新しい花やしきびが手向けてあって、墓所も綺麗に掃除されていた。地元の人々の心意気と信仰心の表れでもあろうか。



(十二尼妃の墓、門)



(十二尼妃の墓、内部)

また、その尼妃達が法皇を慰めるために山の途中まで登って琴を弾いたという所が琴弾坂という所で、坂道を丁度風が通り抜けるような地勢になっていて、何やらその風に乗って琴の音が聞こえてくるような風情であった。法皇は琴弾坂で女官達が弾く琴の音をどのような気持ちで聴いたのであろうか。

弱冠 18 歳で皇位を追われた花山法皇は朝廷では落削の身であったが、このような女御や女官に慕われてそちらの方では充たされた生涯であったのではなかろうか。果たしてどのような人



物であったのか、この寺の花山法皇殿には本尊の十一面観世音菩薩の横に花山法皇像も祀られているので一目拝顔したかったが、堂宇の中が暗くて見えなかった。

何れにしろ、日本全国改元奉祝の大混雑によって、偶然にはあるが古式作法に則って西国観音巡礼を、西国霊場中興の祖である花山院^{ゆかり}縁のこの西国番外霊場「花山院菩提寺」からスタートできたことは、これはこれでまた仏縁というものであろうか。今までに四国アルキ遍路2巡、坂東33観音霊場、秩父34観音霊場を廻って来た功德と霊験が、前世の悪因と今生でも悪業の限りを尽くしてきた小生の身にも少しは顕れたのかも……。或いはタツプリと弾んだお布施が効いたのかも……。

[東光山 花山院菩提寺]

真言宗 本尊：薬師瑠璃光如来 札所本尊：十一面観世音菩薩 おん まか きゃろにか そわか
創建：651年 御詠歌：有馬富士 ふもとの霧は 海に似て 波かときけば 小野の松風
参詣日：平成31年4月27日



花山院菩提寺の参拝を終えた後、少し足を伸ばせば“花の寺”があるからと、バスで30分ほど走った撰津・丹後境にあるナントカ寺に行った。春は芝桜、初夏は菖蒲で有名な寺だそうで、今は菖蒲には早かったが芝桜が満開であった。



以下はオマケ。大学時代のサークル同窓会の関西支部の集まりのスナップ。大阪・京橋での昼食会と、食後に散歩した大阪城公園。



(本項了)

番外札所 豊山 法起院 (奈良県桜井市)



奈良の長谷寺への門前町の家と家に挟まれた狭い露路の突き当りに小さな山門があるが、これが番外札所「法起院」であった。

昔、法起菩薩の化身とまで言われた徳道上人という善知識が晩年に隠棲し老体を養っていたのがこの寺である。徳道上人は道明上人と共に、長谷寺の濫觴となった高僧である。

徳道上人は創作力豊かな人であったそうで、或る日弟子の僧達に“上人様は亡くなられた”と言い触らさせて七日後に蘇生してみせた挙句、衆生を集めて曰く「閻魔大王から素晴らしいお告げを頂いたぞ」と言い出した。仔細を聞いて見ると閻魔大王曰く「本邦には観世音菩薩の霊場が33箇所ある。これを巡拝した者は善人は勿論のこと極悪人でも極楽往生間違いなし。もし間違つて地獄へ墜とされても儂が代つてその罪を引き受けてやろう。これはその印の品だ」と仰つてこれこの33ヶの寶印をお授けになった。この話を聞いていた衆生は我も我もと巡礼希望を申し出て上人はこれらの衆生を引き連れて西国巡礼の旅に出たのが西国観音霊場33札所順礼の始まりということになったと伝わっている。即ち西国巡礼の祖が徳道上人であるという訳で、この寺が番外札所になった。

真言宗 本尊：御自作徳道上人像

御詠歌：極楽はよそにはあらし 我が心 同じ蓮のへだてやはある

参詣日：令和元年10月4日

(徳道上人の御廟と伝わる十三重石塔)



番外札所 華頂山 元慶寺 (京都市山科区)



藤原氏一族の政争の犠牲となって弱冠 19 歳で退位させられた花山天皇が、藤原道兼の陰謀で連れ出されて落飾させられたのがこの寺であった。

出家して法皇となった花山院はこの寺で2年程過ごした後に観音巡礼の放浪の旅に出て、最後に辿り着いた処が二つ前に書いた番外札所の花山院菩提寺であった。花山院は観音を深く信仰し、全国の観音聖地を巡礼されて「西国観音霊場再興の祖」として今でもこの世界では崇敬されている人物である。

さて、大津の三井寺から山越えて山科に下り、そこからまた山越えて清水寺に詣でる途中にこの寺はあった。昔は栄えた大寺だったそうだが、今は畑の中に小さな御堂と庫裏を残すだけの小刹であった。折からの秋霖が辺りを暗く包み、花山法皇の怨霊が顕れるのではないかというような雰囲気であった。



天台宗 本尊：薬師如来

御詠歌：待てといはば いとも畏し花山に しばしと
啼かん 鳥の音もがな

参詣日：令和元年 10 月 8 日

— 1 4 9 —



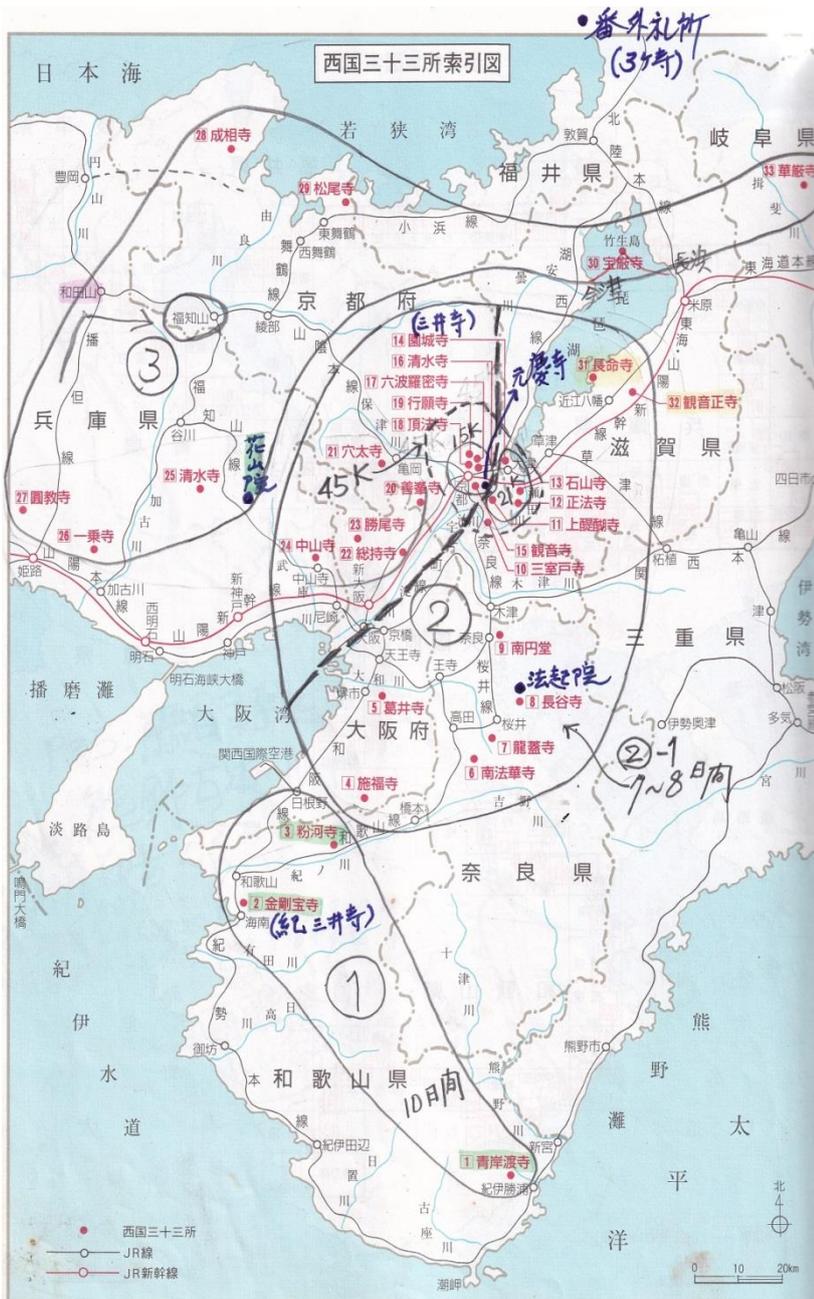
おわりに

西国観音霊場巡礼は終わった。令和元年5月から11月までの半年間、3回に分けて約1,000キロを歩いて廻ったが、信仰心の無い輩には毎度のことながら、功德も霊験も御利益も顕れなかった。

マ、霊場や巡礼途上の地でそれぞれの風や情に触れさせて頂いたことが仏縁といえれば仏縁であろうか。

齢残り少なくなつて西方に近づきつつあるが、彼の地で西国霊場巡礼開祖の徳道上人や中興の祖の花山法皇にでも逢えればそれが仏縁というものでもあろう。

末尾になったが、西国巡礼の途中で何回も一宿一飯の恩義に与つた西宮市在住の学友、山本潔兄、並びに巡礼途中の奈良で二夕に亘り清談にお招き頂いた会社同僚の岩橋昌祐、松岡英一、山下昭三の各氏に改めて御礼申し上げる次第である。合掌。



西国三十三所観音霊場行程表

三十三所霊場名	霊場間距離目安	累計
1 青岸渡寺	191.4 km	191.4 km
2 金剛宝寺	29.4 km	220.8 km
3 粉河寺	24.3 km	245.1 km
4 施福寺	27.5 km	272.6 km
5 葛井寺	32.4 km	305.0 km
6 南法華寺	7.9 km	312.9 km
7 龍蓋寺	13.3 km	326.2 km
外 法起院	0.5 km	326.7 km
8 長谷寺	27.0 km	353.7 km
9 南円堂	32.5 km	386.2 km
10 三室戸寺	8.7 km	394.9 km
11 上醍醐寺	5.6 km	400.5 km
12 正法寺	5.6 km	406.1 km
13 石山寺	9.4 km	415.5 km
14 園城寺	7.1 km	422.6 km
外 元慶寺	3.5 km	426.1 km
15 今熊野観音寺	2.9 km	429.0 km
16 清水寺	1.4 km	430.4 km
17 六波羅蜜寺	2.6 km	433.0 km
19 (注) 行願寺	1.5 km	434.5 km
18 (注) 頂法寺	16.6 km	451.1 km
20 善峯寺	19.8 km	470.9 km
21 穴太寺	29.2 km	500.1 km
22 総持寺	11.7 km	511.8 km
23 勝尾寺	23.1 km	534.9 km
24 中山寺	27.9 km	562.8 km
外 花山院	20.8 km	583.6 km
25 清水寺	32.5 km	616.1 km
26 一乗寺	24.4 km	640.5 km
27 圓教寺	120.6 km	761.1 km
28 成相寺	61.2 km	822.3 km
29 松尾寺	73.8 km	896.1 km
30 宝巖寺	0.6 km	896.7 km
31 長命寺	14.5 km	911.2 km
32 観音正寺	79.9 km	991.1 km
33 華巖寺		
合計	約	991.1 km

(西国観音霊場三十三所順禮記 了)